

卒業研究抄録集

2015年度

松山東雲女子大学

人文科学部

目 次

人文科学部

心理子ども学科		セミ No
指導教員	井上 治美	・・・・ 1
指導教員	小野 紳一郎	・・・・ 2
指導教員	香川 実恵子	・・・・ 3
指導教員	門田・リンダ K	・・・・ 4
指導教員	河原 理	・・・・ 5
指導教員	小池 美知子	・・・・ 6
指導教員	小西 敏雄	・・・・ 7
指導教員	佐伯 三麻子	・・・・ 8
指導教員	塩崎 千枝子	・・・・ 9
指導教員	高橋 圭三	・・・・ 10
指導教員	坪井 良史	・・・・ 11
指導教員	直井 玲子	・・・・ 12
指導教員	西村 浩子	・・・・ 13
指導教員	曲田 志保子	・・・・ 14
指導教員	増本 達彦	・・・・ 15
指導教員	森 日出樹	・・・・ 16
指導教員	善本 裕子	・・・・ 17

国際文化学科		セミ No
指導教員	小西 敏雄	・・・・ 7

人 文 科 学 部
心理子ども学科

氏名	日野 美咲	学籍番号	J012047	ゼミNo.	1					
テーマ	アンパンマンの世界と社会福祉の関連性について									
アンパンマンは、子どもから大人まで人気を集めている。彼は、困っている人を助け、いつも誰かの役に立とうと行動しているが、それは、社会福祉の考え方と共通するものがあるのではないかと考え、卒業研究のテーマとした。										
<p>本論では、アンパンマンについて、作者であるやなせたかしと、登場するキャラクターや主題歌についての検証を行った。アンパンマンは、なぜ人気があるのか。それは、わかりやすいストーリー展開と、小さい頃からアンパンマンのおもちゃに慣れ親しんでいる、キャラクターグッズが周りに多いことがその要因である。そして、アンパンマンの丸い顔が小さな子どもたちに安心感や親近感を与えていていると言える。</p>										
<p>アンパンマンは、自分の言葉を発する事のできない年齢からも支持を多く受けている。それはアニメ・おもちゃ・グッズなどが親しみやすさに繋がり、国民的なキャラクターとなっているのだ。また、「困っている人を助ける」というアンパンマンのその正義が多くの人々に認知され、今もなお愛されているのである。「それいけ！アンパンマン」では、正義について描かれている。本当の正義とは何なのか。これは、決して強い人ではないがその場に困っている人がいれば助けようと行動すること、正義は決してかっこいいものではなく、捨身、献身の心なくしては行えないと言える。つまり、正義は、力の強さやかっこよさのことをいうのではなく、物価高や公害、飢えというような本当に困っている人のために行うものである。</p>										
<p>アンパンマンは、物語の中で敵と味方や善と悪を明確にせず、目の前で困っている者を優先的に助けている。つまり、特定の人物だけを好きになることはなく、関係性に優劣をつけていない。</p>										
<p>やなせがアンパンマンに込めた世界観は、困っている人のために行動する正義、誰にでも平等に接する公平性、善と悪の関係性である。これは、社会福祉の考え方と共通している。つまり、アンパンマンの世界の中で皆に平等に接し、困っている人のために行動するアンパンマンやジャムおじさんの姿は、ソーシャルワーカーのあるべき姿だと言える。そして、私達が目指すべきは、やなせが思い描いたアンパンマンの世界の実現であり、社会福祉の目指す社会でもある。</p>										

氏名	三好 佑果	学籍番号	P012024	ゼミNo.	1					
テーマ	「人間力」としての「女子力」一個人を認め、自分らしい生き方へ									
<p>社会には「男は仕事・女は家庭」というような性役割に基づく考えが存在している。日本の社会において、性役割は社会通念としてステレオタイプ化され、語り継がれてきた。昔からの性役割が今なお続いていると同時に、文化や社会の変化に伴い、女性に期待される役割は複雑化していると言える。我々は、性役割に縛られ、生きにくいと感じたり、時代の流れに取り残されたりしてしまう状況にある。</p>										
<p>本稿は、こうした社会の中で発生し、いたる所で使われている「女子力」について取り上げ、性役割に束縛されない生き方を検討するものである。</p>										
<p>セクション1では、「女子力」という言葉の継起、世間に浸透した状況を、先行調査から分析した。「女子力」が、性役割的な「女らしさ」意味するだけでなく、幅広い意味合いで使われていることを確認することができた。さらに、性役割やジェンダーの問題が、世界的に見ても大きな課題であることを認識した。</p>										
<p>セクション2では、社会福祉の観点から、実際にジェンダーの課題があることを示し、「女らしさ」としての「女子力」が、女性に生きにくさを感じさせていることを明らかにした。ジェンダーの課題において、ジェンダーバイアスの存在が根本的な問題であり、私たち一人ひとりが考えていく必要があることを指摘した。</p>										
<p>セクション3において、ジェンダーバイアスが示すような男女の区別に縛られないために、「その人らしさ」や「自分らしさ」を尊重できる「人間力」を持つ必要があると考えた。社会福祉の理念や、バイスティックの原則(個別化・受容の原則)をもとに、一人ひとりを個人としてとらえ、「自分らしさ」を大切にする生き方を検討し、「女子力」は「人間力」であることを提案した。</p>										
<p>『「女らしさ」としての「女子力』ではなく、『「自分らしさ」としての「女子力』』を大切にすることが、ジェンダーバイアスを解消していくきっかけになると私は考えた。さらに、女性だけでなく男性に対しても、褒め言葉として使われている『「人間力」としての「女子力』』は、「男女の協働」や、「人と人の共生」につながっていくものであることを確認した。</p>										
<p>「人間力」は、「自分らしさ」であり「個性」であるとも言える。卒業研究を終えて私は、「女らしさ(男らしさ)」にとらわれず、『「人間力」としての「女子力』』を発揮しながら、「自分らしさ」や「その人らしさ」を尊重できる生き方を目指していくと考えている。</p>										

氏名	渡部 育美	学籍番号	P012027	ゼミNo.	1
テーマ	「べてるの家の生き方」研究 ～『降りていく生き方』とは～				

私は、「頑張ることは、当たり前で、一番になったほうがいい」と思っていた。しかし、「人間らしく生きる」「そのままの自分で良いと思える生き方をする」という「べてるの家の生き方」に出会い、「私もそう生きたい」「もっと知りたい」と考え、卒論研究のテーマとした。

「べてるの家」の概要、理念、活動内容の検証を通して、「べてるの家の生き方」とは、『昇る人生から降りる人生へ』、つまり『降りていく生き方』であることを確認した。

『降りていく生き方』を知るために、「べてるの家」の当事者研究、つまり自己研究が必要であると考え、自己研究を試みた。自分の行動を、イラスト化、図式化、文章化することで、頭だけで考えていてもまとまらなかつたことを客観的に見ることができた。自己研究を通して、『降りていく生き方』とは、他者との関わりを通して、「ありのままの自分」を知ることではないかと考えるに至った。

では、なぜ日本では「上を目指し、上に昇ることが良い」とされ『降りていく生き方』を良しとしないのか、浸透しないのだろうか。それは、日本人ならではの「普通」というラインがあり、そのラインを越えたり、またはそのラインに至らなかつたりすると、周りからの目線が冷たく、変わった目で見られる。また、日本人は自分をアピールすることが苦手であり、「真面目で頑張ることは当たり前」といった考え方方が強いため、自分の弱い部分を見せることに、恥ずかしさやためらいがある。こういったことから、日本人は『降りていく生き方』と聞くと「楽をしている、頑張っていない」「逃げている」といった考え方を持つ場合が多いからで、浸透していないのだということが分かった。

「べてるの家」の『降りていく生き方』を研究していくうちに、福祉にも繋がると考えた。『降りていく生き方』とバイスティックの7原則が重なる部分、それはクライエントを一人の人間として尊重し、クライエントの言葉を大事にすることと、クライエントの力を信じ、問題や悩みを無理に解決しようとしたことであると私は考えた。

この研究を通して、『降りていく生き方』だけに限らず、どのような生き方にも、「人との関わりと繋がり」「自分の言葉で話すこと」「ありのままの自分」を知ることが重要であると分かった。

人は自分の心地よいと思える人や場所を見つけ、「ありのまま」に生きることで、今まで見えていなかった世界が広がり、「新しい自分」「ありのままの自分」を見つけることができるのではないだろうか。

氏名	浅川 遥香	学籍番号	J012001	ゼミNo.	2					
テーマ	「障がい児の自立について」									
保育実習を通して、障がい者が支援を受けながら自立に近づいていることを知り、彼らが将来自立していくためにどのような支援が必要なのか、障がい児にとっての自立とは何なのかについて研究した。										
<p>まず、実習の事例を生活技術力に関する視点、コミュニケーション能力に関する視点の2つの視点から取り上げ、考察を行った。生活技術力に関する視点の事例では、ダウン症の3歳児の食事についての事例を取り上げた。食事の支援の際に食べることだけに着目するのではなく、食事の時間を楽しむということに着目することに気づいた事例である。食事は生きていく上で必要不可欠なことである。食事の時間や食べることを楽しいと感じられることが、自ら自然と食べられるようになったり、苦手な食べ物を克服していくことに繋がる。子どもの「食べたい。」という意欲を引き出すために、食べることばかりを促すのではなく、食事の時間を楽しく過ごせるような関わりや支援が必要であると考えた。</p>										
<p>コミュニケーション能力に関する視点では、文字や数字に興味が強い3歳児に関する事例を取り上げた。言葉が多くても、対人でのコミュニケーションとしては不十分であり、人との関わりを楽しいと思えるような関わりが必要であると考えた事例である。生きていく上で、人との関わりは欠かせないことになる。触れ合い遊びなどを通して、まずは人と遊ぶことが楽しいと思えるように大人と遊ぶことが初め、子ども自身が他者と遊びたいという意欲を見い出せるようにしていく支援が必要であり、子どものコミュニケーション能力を育てていくと考えた。また、インリアル・アプローチのような方法を用いて、子どもの欲求を言葉にして返すなどの関わりがコミュニケーションに必要な言葉を育てていくと考え、インリアル・アプローチについても詳しく研究した。</p>										
<p>これらの事例と考察から、保育者が子どもにとってどんなことが必要か考え、関わりを工夫して、子どもから要求を引き出していくことが必要であることがわかった。また障がい者にとって自立とは、経済的に自立するという意味ではなく、自分で選んで自分で決めるができる、自己決定する力があることであると結論づけた。保育者の役割は障がい児が将来、自己決定していける力を得られるように支援していくことである。また、保護者に対して障がい児でも様々な将来の選択ができるなどを提示することも保育者の役割であると考えた。</p>										
<p>実習での関わりや、事例考察や研究を通して、障がいがあっても自立して生きていけると感じた。将来彼らが自立していくためには、幼児期の関わりが重要であり、保育者が障がい児から要求を引き出し、自己決定して生きていけるように支援をすることが必要である。</p>										

氏名	小笠原未緒	学籍番号	J012006	ゼミNo.	2
テーマ	『ディズニーランドの秘密』				

はじめに

筆者は小さい頃からディズニーリゾートが好きでもう何度もディズニーランドを訪れている。行く度に幸せで楽しい気持ちにさせてくれる夢と魔法の国、ディズニーリゾート。その裏には常にゲストを楽しませ、喜ばせるためにどのような工夫、秘密があるのか知りたいと思いディズニーについて調べることにした。

第一章 ウォルト・ディズニーについて

世界的に有名なミッキーマウスの生みの親であり、ディズニーランドの創設者であるウォルト・ディズニーの生い立ちや彼の人生の軌跡を述べたのち、どのようにしてミッキーマウスがうまれたのか、そしてディズニーが建設されるようになるまでの流れについてまとめている。

第二章 ディズニーの魅力

日本や世界で数多くのテーマパークが存在する中でなぜディズニーが最も多くの人に選ばれるのか、他のテーマパークとの違いについて述べたのち、ディズニーに訪れる人々を魅了する魅力について、ディズニーが実践している秘密の政策について述べていく。

第三章 ディズニーランドの経済効果

ディズニーを訪れる人々は皆、よりディズニーという世界観に入り込むためにキャラクターの耳をつけたりする。またパーク内に入れば食べ物や飲み物購入する。アトラクションで遊ぶだけでなく、ゲストに商品を買ってもらうための工夫と努力について、また、その工夫と努力によって経済効果はどのようにになっているのかについて自分の考えと経験を含めながら説明している。

結論 まとめ

常にディズニーがたくさんの人に愛され、訪れた人みんなが楽しくて幸せな気持ちになれる夢と魔法の国であるために、そしてまた訪れたいと思わせるようにディズニーが行っていることについて知り、そのことについて自分なりに考えることができた。ディズニーは一人ひとりのゲストのことをとても大切にしていて、それをキャスト全員で行動や言葉で示してくれる場所なのだということが再確認できた。人々の記憶に残り、テーマパークとして最も多く支持され、多くの感動を与えるディズニーリゾートであり続けるためのディズニーのプライドも垣間見ることができた。これからもゲストに大きな期待を持って何度も訪れてもらうために創業当初から変わらないおもてなし精神を大切にしつつ、ゲストに常に新しい楽しみを与えられるよう、新しいアトラクションの開設や仕掛け、秘密なども生み出していくことを検討していくべきだと考える。

氏名	小野寺 葵	学籍番号	J012009	ゼミNo.	2
テーマ	「ヨコミネ式教育法の未来」				

はじめに

私（筆者）がヨコミネ式教育法（以下、ヨコミネ式）を初めて知ったのは、実習先の幼稚園がヨコミネ式を取り入れていたからである。それまでは自由保育、設定保育の2つしか知らなかった。実際にヨコミネ式を自分の目で見てみると、幼稚園児がブリッジ歩き、前方面回転倒立、逆立ち歩き、側転等を軽々とこなしていた。そして、この子たちほぼ全員の身体が柔らかいのである。また、ヨコミネ式のワークをしていて計算問題や文字の書き方を学んでいた。他にもたくさんのこと驚きを感じた。ヨコミネ式についてもっと調べ考えていきたいと思い研究をしようと考えた。

第1章 4つのスイッチ

4つのスイッチ「①子どもは少しだけ難しいことに挑戦したがる、②競争が好き、③褒められるより“認められる”方が嬉しい、④マネをしたがる」についてそれぞれのことを詳しく調べ、実習先で起きたことと重ねてみて自分の考えを述べる。

第2章 ヨコミネ式基礎学力の付け方

横峯氏が考案した「ヨコミネ式 95音」や「たまたま足し算」についてなぜこのようなやり方から始めるのかを調べ、そして子どもにとってどのような教育効果があるのかを考える。また、読書の仕方もヨコミネ式のやり方があるためそれについても考える。

第3章 ヨコミネ式の未来

ヨコミネ式のメリット・デメリットを考える。デメリットについては自分の考えを述べる。ヨコミネ式教育法についてこれからどうしてほしいか、保育者にどうしてほしいかを考える。

結論

ヨコミネ式を調べてみて、子どもの才能を最も引き出せるのは10歳前後だとわかった。筆者が調べているうちにヨコミネ式は子どものポイントを押さえつつ、うまく才能を引き出せていると感じた。幼稚園の選び方はその子どもの保護者を中心に人それぞれだと考えるが、私はヨコミネ式教育法を調べているうちに小学生になってからも幼稚園で学んだことは無駄ではなかったと、子ども本人もその保護者たちもが感じることができる点が、最も素晴らしい所であることが分析できた。

氏名	橋本 雅	学籍番号	J012045	ゼミNo.	2					
テーマ	「双生児の個性発揮 ～遺伝と環境から生まれる個性～」									
第1章 はじめに										
<p>「ふたご」というのは、容姿や行動がどこまで似ているのかと思ったのをきっかけにこの研究を行なうこととした。まず、双生児のメカニズムを探り、成長過程でのそのペアの特徴について知り、個性の発揮は双生児間で同じなのかを疑問に思い、調べることにした。</p>										
第2章 双生児のメカニズム										
<p>1節では一卵性双生児・二卵性双生児の誕生の仕方について述べている。また、一卵性双生児と二卵性双生児の特徴の違いを、簡単に表にまとめている。2節では「ふたご」の出生率について述べ、多胎妊娠は人種による違いが見られることがわかった。また、近年では多胎出産率が急上昇しており、1960年代に排卵誘発剤の臨床応用が開始され、1980年代になると体外受精・胚移植が導入されるようになり、体外受精が本格化していった。</p>										
第3章 「ふたご」が多い背景について										
<p>第2章とリンクする内容だが、多胎児が増えた背景には3点の主な要因が見られる。このことから、晩婚化・高齢出産による不妊治療の影響がふたごや多胎児が多い要因の背景にある。</p>										
第4章 双生児の個性の発揮										
<p>ある1組の一卵性双生児であるA男とB男を題材に長期にわたり、追跡調査を行った。乳児期・幼児期・小学校・中学校・高校別にふたごの特徴・性格について述べている。</p>										
第5章 結論										
<p>まとめとして、一卵性双生児の個性というのは、環境から受けたわけではなく、生まれつきあるということがA男B男の成長記録から言える。また、学校生活の中で、各々の友達と関わることで、ふたりの個性というのは大きく分かれていくのである。ふたりが別々の中学校に入り、そこで個々人としての生活を始めたことで、ふたりで1組という関係から独立してそれぞれの環境の中で過ごしてきたことが、ふたりの個性に大きな影響を与えたのだと言える。そして、自分自身で自らの性格を或る方向に形成していくこうとする積極的な面が生まれてくるのである。</p>										

氏名	比嘉 むつみ 佐伯 美帆子	学籍番号	J012046 P012008	ゼミNo.	2					
テーマ	「映画『もののけ姫』から見た宮崎駿監督」									
はじめに										
本研究のテーマに選んだ理由は、映画『もののけ姫』(以下、『もののけ』)の「人間と自然の共存」と「生きることそのもの」をテーマに描かれているところに我々は興味と感心があり、宮崎駿監督(以下、宮崎)がこの作品にどのようなメッセージを込めているかに興味をもち本研究のテーマとして取り上げた。										
第1章										
映画『もののけ』の内容と映画の狙いについて述べている。人を寄せ付けなかつた深い森を人間が切り開くが、最終的には人に馴染みのある草原になった。しかし、「人間と自然」が争うことで人間によって壊された自然がディタラボッチによって自然が生き返った。そのシーンを見て、「人間がいかに自分たちの事しか考えていなかいか」という観点から分析した。										
第2章										
多神教や『もののけ』に登場する神々について考察した。この作品には様々な神様が関わっているため、コンセプトは多神教であるといえる。										
第3章										
『もののけ』の時代背景について考察した。この作品は室町時代に設定されていてメインとなる舞台がタタラ場である。なぜなら、彼は子どもの頃から「製鉄する人」に憧れてきたからである。製鉄とは、「人間と自然との関係の複雑さ」を象徴していることが分かった。										
第4章										
他作品との共通点について考察した。『もののけ』、『千と千尋の神隠し』、『となりのトトロ』を比較して3つの共通点を見つけた。それらは即ち、1「子どもが主人公」、2「女性の活躍」、3「神様・人間と自然の関わり」である。										
第5章										
『もののけ』のテーマである現代の環境問題としては、森林伐採が主に取り上げられており、宮崎はこの作品を通して、自然の恐ろしさとその大切さを伝えたかったと分析した。										
第6章										
宮崎は『もののけ』に「人間と自然の共存」と「生きることそのもの」をテーマに取り入れることで、現代の環境問題である自然破壊や地球温暖化に关心を持ってもらい、それに対しての意識を変えてほしいという強い思いがこの作品には込められている。また、命がまだ宿っている以上これからがスタートであり、現代を生きるすべての人達に応援のエールを送っていると結論付けた。										

氏名	松岡利栄	学籍番号	J012054	ゼミNo.	2
テーマ	「子どもに対する声かけの効用」				

はじめに

なぜ声かけについてをテーマに選んだのかというと、大学2回生の保育実習Iでの学外施設実習での自分自身の経験がきっかけである。実習を通してほんの些細な声かけをきっかけに、思いがけず子どもとの距離を縮める事ができるのだと知った。本研究では主に声かけという焦点を置き、観察し関わった子どもたちの反応や、心情の変化などを理解した上で、その子どもの反応の原因を研究していきたい。そして声掛けによって子どもたちへどのような成果が表れるのかを分析し、声掛けの効用を研究したいと考える。

第1章 研究方法

児童自立支援施設である愛媛県立えひめ学園に実習に行き、実習生のように始めて出会う人に対してどのように反応し、声かけを繰り返すうちにどのように変化していくのかという視点を持って、この実習中に観察してきた事例に考察を加え、分析していく手法をとる。

第2章 事例と考察

過去の実習ノートを参考に3つの事例と考察をする。

第3章 考察のまとめ

第2章で行った事例と考察を元に分析を進めた結果、子どもたちは誰よりも愛情を求める、自分が認められなければ暴れてしまったり塞ぎ込んでしまったりするなどの形となって表れてくるのだということが分かった。そして声をかけることは子どもとの距離を近づけたり、心を開けさせたりすることに大きな役割を果たすことが分かった。効果的な声かけとしては、自分で考えた言葉だけでなく他の実習生や職員さんが褒めていたところなどを、「○○先生が～って褒めてたよ」というように周りにいる人皆がその子自身を見ているということを伝えることである。

第4章 結論

今回の研究から子どもに声をかけるという行動の効用は、子どもに愛情を伝える大切な手段であると考えた。施設に入所している子どもたちは両親からあまり愛情を受けずに育ってきているおり、愛着の形成ができていない。そのような子どもからの信頼を得るために、大人との愛着形成が必要であると考える。子どもの愛着形成には本来、小さい頃に親等とたくさん触れ合うことで形成されるものである。それを成長してから形成することはとても難しく、その相手が親ではないということはそれをさらに難しくしているのだと考える。その愛着形成に重要なものの1つに、声かけがあるのではないだろうか。

氏名	宮川 恵利子 森本 知歩	学籍番号	J012057 J012059	ゼミNo.	2
テーマ	絵本と幼児の関連性について				

第1章：はじめに

学外実習で、幼稚園や保育所に行かせていただく中で、子どもたちが次の活動に移る時、感情を落ち着かせたり、想像力を伸ばしたりできる読み聞かせの重要性を感じた。そこで、本研究では、幼児期の絵本が、現在の私たちに与えている、知能面、心理面の影響と、絵本からのメッセージ性について興味を持ち、調べることにした。

第2章：アンケート調査・結果

幼児にどういった絵本を与えるのが、発達、成長のうえでよく、バランスの良い子どもに育つか、また、読み聞かせが行われることが、どういった面でいい方向に働くのか調べるために、松山東雲女子大学人文科学部心理子ども学科子ども専攻の学生、1回生から4回生までの146名にアンケートを実施した。

第3章：絵本の種類について

絵本には、「入門絵本」、「命名絵本」、「生活絵本」、「リズム絵本」、「子守歌絵本」、「数・量・形の絵本」、「観察絵本」、「昔話絵本」、「あいうえお絵本」があり、子どもたちの年齢、発達段階に合わせた絵本が適する。

第4章：10冊の絵本の抽出

第3章までの内容や、アンケート結果を踏まえ、10冊の絵本を抽出した。その絵本の内容、メッセージ性についてまとめる。

《まとめ》

今回、絵本の影響力について調べてみて、読み聞かせの良さについて改めて実感することが出来た。様々な種類の絵本に触れることで子ども達にもバランスのとれた、よりよい情操教育と、知能、言語能力の向上、心理面、情緒面などの発達、想像力の発達などが見込める。また、絵本の読み聞かせをすることで、言葉を知り、子どもたちの言葉も広げることが出来る。そして、言葉が広がることで、子どもたちは、友達や、保育者、保護者とも言葉によるやり取りが出来るようになり、言葉による、意思表示が出来るようになり、相手の立場を思いやる人間性を育むと結論付けた。さらに読み聞かせは、子どもたちの発達に良いだけでなく、保護者や保育者の子どもを大切にしようとする気持ちも強くすることが出来ると思う。子どもたちとのかかわりの上で、絵本をまず初めの第一歩とし、子どもたちと積極的にかかわることが出来る人が増えていって欲しいと考える。

氏名	松井 美月	学籍番号	J012052	ゼミNo.	3					
テーマ	愛媛の郷土食について									
1. はじめに										
私たちが生きていく中で、食は欠かせないものである。食に関する知識や食を選択する力を身に付けることが食育である。子どもの頃の食育が基礎となり、大人になってからの食に対する考え方へ影響する。そのため、子どもの頃行事食に触れたり、郷土料理を食べたりすることで食文化を知っていくことが重要になる。本研究では食育の中でも郷土料理を取り上げて研究を進め、普及啓発活動に取り組んだ。										
2. 研究および実践活動										
(1) 「えひめの郷土食」ブック作り										
「えひめの郷土食」ブックの制作に取り組んだ。まず愛媛の郷土食 50 品を調べ、東・中・南予、県内全域に分類した。東予は、せんざんきや包丁汁、法楽焼、中予では、緋のかぶら漬け、たこ飯、松山ずし、南予は、じやこ天、ふくめん、さつま汁などの郷土食を調べ、それぞれの料理の歴史などの説明とクイズを記載した。歴史は、ただまとめるだけではなく、学校給食の放送時に使うことができるよう、分かりやすい言葉を選んで文章化した。またクイズを掲載し、より楽しく知識を得ることができるよう工夫した。さらに、郷土料理に関するオリジナル紙芝居も取り入れ、言葉だけでなく、絵からも楽しむことができるようとした。										
(2) 「一嘗三嘆・子規が愛した瀬戸の鯛料理」試作会(2015年12月7日実施)										
松山市水産市場運営協議会の方々と連携し、鯛料理の試作会を行った。松山市水産市場運営協議会と三津浜まちづくり協議会は、正岡子規にちなんだ「鯛料理」を復活させ、三津の朝市、瀬戸の松山の新たな魅力を創り出そうと道後温泉などの観光地等での提供を目指している。その事業の一環として、松山東雲女子大学で実際に鯛をさばき、鯛のなます、鯛の押し寿司、鯛の洗い、松山鮒、鯛の潮汁の 5 品を作った。この経験を通して、私たち大人が魚に対するマイナス面の見方を変えていき、興味を持つことで、子どもたちが魚を好きになるきっかけを与えることができると実感した。										
3. おわりに										
郷土料理は、受け継がれた食文化であり、一つ一つに歴史がある。次世代へと郷土料理を伝承していくのは、私たちと子どもたちである。そのためには、私たち大人が郷土料理に興味を持ち、子どもたちに伝えることが重要である。なかでも最も郷土料理を伝えやすいのは、家庭料理や学校給食であろう。食卓で郷土料理が出ることで、自然に親から子どもへと受け継がれる。家庭や地域、学校給食においても、郷土料理を通してコミュニケーションを取ることもできる。今回制作した「えひめの郷土食」ブックを通して、子どもたちがさまざまな歴史を知り、自ら食に興味を持ち、郷土料理についての知識を少しでも持つてもらえるようにしていきたい。										

氏名	山縣 舞子	学籍番号	J012060	ゼミNo.	3
----	-------	------	---------	-------	---

テーマ	食事中の子どもの行動と援助について
-----	-------------------

1. はじめに

「食べること」が心身ともに健やかな成長の発達を促し、食べることの原動力である「食欲」が「生きる意欲」につながる。したがって、保育者として食生活の充実を目指した環境作りを行う必要がある。本研究は、食事中の子どもの行動や保育者の援助について分析し、それを基に冊子を作成・配布することで、大学での自分の学びを形に残し、保護者と共に子どもの食について考えていく為の参考とすることとした。

2. 食事の様子の実態調査

実習を行った保育園、乳児保育園、乳児院、幼稚園の食事の様子を、子どもたちの行動や保育者の援助に着目し、調査・分析した。その結果、保育園と幼稚園では、ほとんどの子どもが自分で食事ができるため、正しいマナーを身に付けながら楽しく食事をしていた。乳児保育園と乳児院では、食事中の関わりが、子どもと保育士の信頼関係の形成において大きな役割を担っていた。どの園でも、子どもの「自分で食べたい」という意欲を大切にし、「楽しく食べること」ができるように援助を行っていた。

3. 食事中の子どもの行動と援助について

子どもの特徴的な食行動である、偏食、むら食い、遊び食い、食べる時間がかかる、よく噛まない、食物アレルギーについての原因、対応の仕方について、実態調査、文献などを踏まえてまとめた。これらの食行動をいけないこととして捉えるのではなく、保育者の援助の工夫次第で、子どもの食事に対するイメージや食行動をより良いものにすることが大切であることが分かった。

4. 実践活動での学び

実習での経験や文献を基にして、「子どもの食事お助け BOOK」を作成し、子育てをしている保護者に配布した。また、2015年5月28日に、本学子育て支援広場たんぽぽ広場で開催された「離乳食のすすめ方」を企画運営した。自作の資料を基に離乳食やおかゆについて説明することとし、離乳食の試食も出来るよう工夫した。28組の乳幼児の親子が参加し、熱心に講座内容を聞いて下さった。

5. おわりに

本研究を通して、幼児期の食習慣は子どもの脳や身体、心に大きく影響を及ぼすため、食育が重要であることを改めて認識した。子どもが空腹を感じて食事が美味しいと思えるように体を動かす活動や、紙芝居や絵本などの教材を活用して食に興味を持つことができる活動を、普段の生活から取り入れると良いと考えた。また、「楽しく食べること」ができるように援助することも大切である。保護者と共に子育てをしていく保育者として、子どもの食に関する知識を多く身に付け、保護者や子どもに伝えしていく必要がある。自分の学びを生かし、今後も多くの人に伝えていきたい。

氏名	武田和華	学籍番号	J012029	ゼミNo.	4
テーマ	Children's TV Programming: A Comparison of <i>Sesame Street</i> & <i>Okaasan to Issho</i>				
<p>Children are greatly influenced by the many hours of TV programs they watch. This paper examines the influence children get from the TV they watch. First it gives a short history of Japanese and American children's TV programs. Then it compares the programs <i>Sesame Street</i>, and <i>Okaasan to Issho</i> (おかあさんといっしょ) and considers the good points and bad points of each program. It also looks at the effects TV has on children and how it influences their behavior or enhances their learning.</p> <p><i>Sesame Street</i> is one of the longest running children's TV shows in the world. It was created in order to help preschool children prepare for school. Today <i>Sesame Street</i> is broadcast in about 150 countries. The themes of the show and lessons taught follow the educational needs of each different country. Also, the characters on <i>Sesame Street</i> have very full backgrounds, so children can know naturally that there are various types of people in society.</p> <p>NHK (Nihon Hoso Kyokai) began broadcasting the children's program <i>Okaasan to Issho</i> (おかあさんといっしょ) in 1959. The program first focused on children age from the ages of four to five. In the 1970s, Japan experienced rapid economic growth. As a result, many children were able to go to kindergarten. Consequently, <i>Okaasan to Issho</i> was reformatted to focus more on younger children from the ages of two to three. However, since younger children do not have the ability to concentrate for a long time, the program introduced many short episodes. Unfortunately, this program does not focus on social issues in Japan.</p> <p><i>Okaasan to Issho</i> is broadcasting on the assumption that children are watching the program with their mothers. But today a lot of children watch TV alone because the program is broadcast in the morning or afternoon. In order for young children to learn language or develop social skills, they need more communication with parents, friends or someone who can talk with them. They need to feel the love from their parents, and they need more free time to develop their own thinking with the TV off. Children can learn while playing, and it is very important for them, but just watching TV is not good for them. It will reduce their chances to get direct experience in life.</p> <p>Children's television can be both good and bad. Parents have to understand the good points and bad points of TV, and use it carefully. Young children should not control the selection and viewing time of the programs they watch. Parents must choose good programs, like <i>Sesame Street</i> and <i>Okaasan to Issho</i> and control the amount of viewing time instead of letting their children do as they please.</p>					

氏名	飯野美咲	学籍番号	P012004	ゼミNo.	4
テーマ	A Short History of the British Pub & Japanese Izakaya				

In this paper, I first research the history of the British public house and compare it with other kinds of local establishments, such as inns, taverns, and alehouses. I also look at how pubs have changed over time to meet travelers' needs. I next examine the history of the Japanese izakaya from its beginnings to the modern day and compare them with British pubs. Finally I discuss the effects these establishments have on the economies of each country.

The word pub first appeared in literature in the 1860s, but before that time there were facilities with the same function as a pub. These facilities were called inns, alehouses, or taverns. When the Romans ruled Britain (1st century B.C.) they built roads between the cities so people could travel more easily. Therefore, people needed places to stay when they traveled. Consequently, pubs had many functions in society. Nowadays, pubs are not as important, but people still enjoy chatting and watching sports on TV at the local pub.

It is said that the Japanese izakaya business started in the early Edo era (1603~1868). At first, izakaya owners only sold sake by measured amounts. Customers would bring a container in which to put the sake and take it home to drink. However, some people wanted to stand and drink at the shop, so the shop owners set out seats for the customers, and began providing food. According to old records, there were 323,285 men and 178,109 women in Edo in 1721 (居酒屋の誕生, 2014, para. 8). The population of Edo was mostly men because many bachelor businessmen, tradesmen, and samurai came from all around the country. As a result of all the bachelor businessmen, places to eat out increased. According to an article in the AFPBB News (2014 May 31), the Health and Social Care Information Centre (HSCIC) data shows that the household expenditure for alcohol increased from 2009 to 2012 in the UK, but expenses for alcohol consumed outside the home decreased 9.8%. Additionally, public places became no smoking, including restaurants and pubs. This prohibition has lead to the decline of customers in pubs.

Although there are many differences between pubs and izakaya, there are some similarities. In the past the main customers of both the pub and izakaya were men, but nowadays men and women of all ages go out to drinking places, not just to pubs and izakaya, but also to many different kinds of restaurants and bars.

氏名	廣瀬沙綾	学籍番号	P012020	ゼミNo.	4
テーマ	A Short History of Wine and Sake				
<p>This paper first gives a short history of sake and wine. Then explains how to make sake and wine. Finally it discusses their importance in society. As reported by Owen, according to University of Pennsylvania archaeologist Naomi Miller, "From a social perspective, for good and ill, alcoholic beverages change the way we interact with each other in society" (Owen, 2011).</p> <p>Wine has a history of thousands of years. It is not known exactly when wine was first made, but it is closely connected with the history of farming and Western social development. The first mention of a fermented drink based on grapes comes from China around 7000-6600 BC (田崎, 1996). Historians think that wine, as we know it today, was first produced over 6000 years ago.</p> <p>It is not known when sake was first made, but historians think it was first produced in the early Nara period (710–794 AD). Sake is mentioned several times in the Kojiki (712), the first written history of Japan. It is also mentioned in the second oldest book of classical Japanese history, Nihonshoki, or The Chronicles of Japan (published in 720 AD). Both books tell the same legend about the use of sake. According to the legend, Yamata no Orochi, the parents of a young woman, Kushinada-hime, were in the business of making sake (戸部, 2003).</p> <p>An alcoholic beverage is a drink made from ethanol, and there are many different kinds of alcoholic drinks in the world. In particular, they can be divided into three basic kinds. Spirits, or distilled beverages, have a high concentration of alcohol. Examples of spirits are shochu, whiskey and brandy. Beers are made by converting the starches in grains into alcohol. Although sake is called a rice wine, it is actually a beer. Wines, on the other hand, are made from the fermentation of fruit, in particular grapes. Sake and wine are both made by fermentation but the process and the materials used are very different, resulting in very different tastes.</p> <p>The taste of wine is different depending upon the kind of fruit, the weather, the soil, and the kind of container it is made in. The flavor of sake depends more upon the water and the skill of the maker.</p> <p>People drink wine or sake for many reasons. According to Charters (2006), people give many reasons for drinking wine, for physical/utilitarian, hedonistic, or symbolic/cultural reasons. For whatever reason one chooses to drink, among the many alcoholic drinks around the world, sake and wine are excellent choices to complement a fine meal. People have long been aware that wine and food can mutually enhance each other, but they are only recently beginning to pair sake with food. Alcoholic drinks may have a harmful influence on people. However, when people drink their favorite wine or sake, responsibly, while eating a fine meal, they will enjoy their beverage even more.</p>					

氏名	澤井むつみ	学籍番号	J012019	ゼミNo.	5
テーマ	学習障害への理解 —理解が進むことの危険性—				

はじめに

文部科学省が学習障害の原因をはつきりと特定できないでいる中、現場の学校では手探り状態で学習障害のある生徒を指導し支援している。実際、私も実習や児童クラブのアルバイトでそうした様子を目にして、学習障害についてより深く探求し、私なりの考え方や支援の仕方を提案することができるようになりたいと思い、この卒業論文では学習障害をテーマにした。

1.1 読み書きが苦手な学習障害/小学4年生の事例

いち早く子どもの気になる点に気付くことのできた教師が一人いたとしても、たった一人で子どもの気になる点すべてに対応することは簡単にはできない。そのため特別支援教育コーディネーターが介在して、家庭と教師をサポートしつつ、三者が互いに力を合わせ、情報を交換し共有することのできる体制作りが必要である。

1.2 前の時間に習ったことをほとんど忘れる女子児童(5年生)

ここでは、節の見出しにあるような児童を取り上げたが、本児は家庭に問題があった。文部科学省は、家庭の教育力の低下を指摘している。それを防ぐためには、孤独な育児を行う家庭に対して学校が積極的に関与することが必要である。学校の取り組みによって、相互理解が深まれば保護者も話をしやすくなる。そうなれば少なくとも家庭の教育力低下の歯止めにはなるだろう。

2.1 教師の事前に準備することと気を付けること

家庭と相談する際に大前提となるのは保護者の気持ちに寄り添いながら共感していくことだ。そうすることで保護者と徐々に信頼関係を築けるようになる。だが、そのための努力を教師一人に背負わせるのは難しいため、こうしたスキルを学べる場が設けられねばならない。

2.2 文部科学省による教師へのサポート

初任者研修に学習障害について学ぶ時間を充実化させる必要がある。そして学習障害への理解を深めれば、保護者の苦悩を深く知ることができ、それに共感することも可能となるであろう。

結びにかえて

教師も親も児童を学習障害とラベリングする危険性がある。教師は責任回避のためにするのだが、親が自分の子にレッテルを貼ると、不安はかえって募ることになる。簡単にラベリングしてしまえば、子どもから本来得られる教育の機会を奪ってしまう。

氏名	住吉 佑梨	学籍番号	P012012	ゼミNo.	5
テーマ	助けたい 児童虐待の恐怖の現状				

はじめに

連日ニュースや新聞に取り上げられている児童虐待。虐待というものはなぜ生まれてしまったのだろうか。虐待によって社会にどのような影響を及ぼしているのか。これが本論文のテーマである。

第1章 児童虐待に関する法律

2000年に「児童虐待の防止等に関する法律」ができた。法律が制定され、児童相談所は動きやすくなったが、虐待を食い止めるためには充分ではない。様々な工夫がなされてはいるが完全に補充できているとは言いがたい。

第2章 四つの児童虐待のタイプ

虐待のタイプは、身体的虐待、性的虐待、養育の拒否・怠慢、そして、心理的虐待の四つに分けられる。

第1節 ネグレクト

ネグレクトが急速に増えているのが最近の日本の児童虐待の大きな特徴である。ネグレクトされた子供たちが親になったとき、育て方がわからず、虐待の連鎖が続いてしまうのが虐待の恐ろしいところだ。

第2節 身体的虐待

本文で取り上げた女児は、児童相談所に保護されたものの、すぐに自宅に戻された結果、父親の暴力により命を落としたケースである。アメリカでは再発したら担当職員が責任を取らなければならないため、安易に自宅に戻すことはない。だが、それほど慎重なアメリカでも虐待が減少しているわけではない。これは虐待を根絶することの難しさを物語っている。

第3章 代理ミュンヒハウゼン症候群

親が子供を病人に仕立てて、不必要な検査や治療をさせる症状のことである。現在は特異な事例でしかないが、今後代理ミュンヒハウゼン症候群と診断される事例が増えてくるかもしれない。

第4章 虐待による影響

少年院に在院する半数の者は虐待を受けていた。虐待は非行行為を生むのである。虐待を止めることができれば、非行少年の大半は生まれないかもしれない。最後に

これからも児童虐待は増えていくと予想される。そうならないためにも、子供たちを救い出す手段を更に考えてゆき、諸外国の取り組みを日本にも取り入れることが肝要となる。

氏名	西岡 愛海	学籍番号	P012017	ゼミNo.	5
----	-------	------	---------	-------	---

テーマ	凶変していったオウム真理教の内幕 ～彼らを狂わせた暴走するシステム～
-----	---------------------------------------

はじめに

悪質な宗教勧誘への注意喚起を耳にすると、「オウム真理教」が思い浮かぶ。なぜならニュースや特番などでオウム真理教は凶悪な事件を起こした宗教団体として報じられているからだ。だがそのニュースや特番はなぜオウム真理教がそこまで信じられていたかについての理由にはさほど触れていない。そこで彼らを凶変させていった理由を探ることにした。

第1章 オウム真理教と麻原彰晃（松本智津夫）

第1節 オウム真理教の成立史

オウム真理教は、1983年（昭和58年）に麻原彰晃（本名・松本智津夫）が開設した「鳳凰慶林館」からはじまり後にオウム真理教と改称され、信徒数が最大1万人を超えるまで勢力を増していった。

第2節 麻原彰晃（松本智津夫）という人物

そもそも麻原が宗教団体をたちあげたのは、人を騙して金儲けをしようと企てたからだ。また彼は何事も充分に考えずに口に出す性格であった。

第2章 オウム真理教の制度の特徴

階級や出家制度、さらに省庁制を取り入れることで麻原はでまかせであっても信者を信じ込ませる環境をつくりあげた。

第3章 修行内容から明らかになるシステム

第1節 オウム真理教の独特的な修行

「オウム食」とよばれる貧しい食事しか与えられず、頭の回転が鈍くなったりうえで、信者たちは、ひそかにLSDを飲まされ過酷な修行をしていた。

第2節 システムを生みだした状況

命に危険が及ぶほどの修行でも信者たちは幹部に従順で、オウム真理教の中では支配・服従関係が確立されていった。

第3節 麻原の優越感と権力

ピラミッドの頂点に立った麻原は、優越感を満たし過信していった。

第4節 システムが引き起こした坂本弁護士一家殺人事件

麻原は殺人までも信者に命令し、信者たちはそれを高度の修行と捉え受け入れてしまつた。

おわりに

彼らが事件を起こした元凶は、閉鎖空間で支配・服従関係に歯止めがきかなくなつたシステムにある。その暴走するシステムは、いつどこで作動してもおかしくない。

氏名	菅 和夏	学籍番号	J012012	ゼミNo.	6
----	------	------	---------	-------	---

テーマ	しあけ絵本に心が動かされる訳とは？
-----	-------------------

1. 問題と目的

幼児にとって絵本や物語、紙芝居はとても身近な存在である。これらは幼児にとってどのような影響を与えるのだろうか。絵本を読むことは、幼児の想像力や感受性を養うために必要なことであると考えられる。もしそうであるなら、絵本の中でもしあけ絵本は幼児にとって絵本の世界に入り込みやすく、想像力を豊かにすることが出来るのではないか。しあけ絵本は、どのような魅力を持ちながら、幼児の興味を覚えさすのかを明らかにしていきたいと考えた。

2. 方法

しあけ絵本 100 冊を抽出し、しあけの種類別に分類して分析を行うことにした。さらに、種類別の分類ごとにそのしあけの仕組みに着目し、詳細な分析を行う。これらに基づき、しあけ絵本の魅力について検討を加えた。

3. 結果と考察

100 冊のしあけ絵本の中から、しあけの種類として、飛び出す、穴あき、めくる、引っ張る、扉、動く、メリーゴーランドの 7 つのカテゴリーを見出すことが出来た。その中で、めくるしあけ絵本が多いことが分かった。加えて、めくるというしあけが様々な方法であったため、さらに分類を進めることにした。検討の結果、これらのめくるしあけ絵本は、読み手に対して、めくる前に何が隠れているのだろうという想像を促し、わくわくする気持ちを生み出させているのではないかと考えられる。また、絵本の中心人物になりきったり、一緒に隠れているものを探したりする感覚を引き出させているのではないかだろうか。もしそうであるならば、しあけを操作することで、絵本の世界により入り込みやすくなると考えられる。

さらに、しあけ絵本には、4 つの大きな特長があると考えた。1. しあけを子ども自身が操作することで、絵本の世界に入り込みやすくなること。2. しあけを子ども自身が操作することで、絵本に親しみを持つようになり、絵本を好きになるきっかけになること。3. しあけ絵本の場合、絵が飛び出したり動いたりすることで、絵から広がる様々なイメージや自由な発想が生まれ、言葉の広がりにつながっていくこと。4. 集団で読み聞かせの場合だと、子ども自身がしあけを直接楽しむことが出来ないが、誰か大人と一緒にしあけを楽しめれば、大人との共通の思いを味わうような会話を通して、新しい言葉を学んでいくことが出来ること。このため、集団で読み聞かせを行うよりも、大人と子どもの一対一で読むほうがよいと考えられた。

氏名	桐山 和子	学籍番号	J 012014	ゼミ No.	6
テーマ	幼児同士の人間関係構築のための交渉術について				
<p>人と人との関係の心理学的意味として、人とかかわる力は基本的欲求として、本来もっており、子ども同士が、その交渉を通して人と交渉する技能を学んでいく、という。また、幼稚園教育要領の人間関係の領域においては、自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付くこと、加えて、幼児が互いにかかわりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようになるとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を開拓する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようになると、これらを指摘している。</p> <p>このように、幼少期の人間関係というのは人と人がかかわることだけではなく、日々の生活の遊びの中で幼児同士が成長過程に応じて交渉する中で「人とかかわる力」を育んでいくのだと考えられた。</p> <p>筆者がこれまでに参加させていただいた実習において、幼児同士が園生活や遊びの中で互いの気持ちを理解しようとして、関係性や遊びをより良いものに発展させるにはどうしたら良いか考える姿を見ることができた。また、保育者の援助や言葉がけにより、幼児自身が葛藤しながらも、それを乗り越え成長する姿もあった。そこでは、自己発揮したり、自己抑制したりしながら、友達とのかかわりにおいて遊びが上手く持続するために相互に交渉しているのではないかと考えられた。</p> <p>そこで本研究では、幼児がどのように交渉したりしているのかについて、実習で見られた幼児の姿を元に事例に書き起こし、それを検討することとした。</p> <p>その結果、幼児同士の人間関係について 3 つのことが明らかとなった。1 つ目は、幼児期でありながらも、大人の社会生活と同じように人と人との譲り合いを大切にしたり、幼児の中での社会関係を築いていったりすること。2 つ目は、幼児同士が関係性を持ち、互いに刺激し合いながら、社会性を身につけていくこと。3 つ目は、人間関係構築のためにあらゆる手法を用いて交渉し合っていること。つまり、幼児は日々の生活の中で、友達との関係を繰り返しながら人としての社会生活を営むうえでのルールを身につけているのだといえよう。</p> <p>大人が社会生活を円滑に営んでいくにあたり、人とのかかわりというのは避けては通れないものであり、とても重要なものである。幼少期から友達とのトラブルや認め合うことをたくさん経験し、幼児の中での社会関係を築いていくことで、人生の基盤を作ることが出来るのではないだろうか。つまり、これらは人と人との交渉術と呼べるのではないだろうか。</p>					

氏名	白井 絵里	学籍番号	J012022	ゼミNo.	6
テーマ	保育における視覚教材を用いた指導の効用について				
<p>現場で用いられる児童文化財には、絵本や紙芝居、パネルシアター、ペーパーサート等がある。その中でもパネルシアターやペーパーサートのような立体的で動きのある視覚教材は、子どもたちにとって絵本や紙芝居などの平面的で動きのない視覚教材と比べ、ある意味日常でない存在にあるといえる。では、パネルシアターやペーパーサートのような立体的で動きのある視覚教材が与える子どもたちへの影響にはどのようなものがあるのだろうか。そこで、そのような視覚教材を用いることで得られる楽しさや魅力について検討するとともに、それらの視覚教材が子どもたちの感性や想像性を高めることに対してどのような効用があるのか、検討したいと考えた。</p> <p>F 幼稚園での実習期間中、食育指導、手洗い指導において上述に挙げた視覚教材を用いて実践を行った。この時の子どもたちの反応を記録し、これらの記録に基づいて物語の進行とその際の反応を照らし合わせ検討を加えた。</p> <p>その結果、絵本作品をパネルシアターにアレンジし、食べ物博士を登場させた食育指導を実践したところ、子どもたちは、パネルの絵やその動きに見入り、布と布がくつき合う不思議さに対して驚く姿が見られた。そのことによって触れてみたいという興味関心が生まれ、進んでやってみたいという思いにつながっていると感じた。これらから、パネルシアターの素材やその演じ方の存在そのものが子どもたちの感性を豊かにすることにつながると考えられる。</p> <p>次に、ペーパーサートを用いた筆者のオリジナルによる食育指導では、上述のパネルシアターで演じた博士の登場人物を取り入れた。子どもたちは博士が登場するや否やすぐさま話に入り込む様子が見られた。また物語の振り返りとして、パネルシアターの最中にも使用した袋から出てくる、飛び出すといった視覚的な趣向を取り入れた。これらから、子どもの感性がより働き、スムーズに話に参加でき、再度物語の大事な場面を物語の中で振り返ることで、三大栄養素の重要性を伝えるという幼児にとって理解しがたい内容でも、積極的に楽しめたのではないかと考えられる。</p> <p>さらに手洗い指導では、ペーパーサートを用いて筆者のオリジナルの物語を演じた。その際の子どもたちは、登場人物と自分とを照らし合わせて物語を楽しむ姿、登場人物の立場に立って想像する姿などが見られた。</p> <p>つまり、パネルシアター・ペーパーサートなどの視覚教材は、場面を想像しやすく、イメージをより具体的に体感しやすいという特性があるといえる。以上から、幼児にとって少し理解が難しい内容の物語や、今回演じた手洗い指導といった教師が子どもたちに伝えたい大切なことは、パネルシアターやペーパーサートなどの視覚教材を用いて演じることが有用であると考えられる。</p>					

氏名	関岡 菜緒	学籍番号	J012025	ゼミNo.	6
テーマ	昔話・童話にみられる悪役の存在意義				
<p>古くから、誰しもが知っている物語とは、よむひとに何を伝えているのだろう。これらの中には、悪役が登場する物語が少なくない。また、悪役を退治する場面がほぼあり、残酷と思えるようなものもある。文献によれば、昔話は、様々な人生を示して、子どもがどんな大人になるかを考える上での、参考と教訓が込められているという。では、残酷な場面を用いて、どんな参考や教訓が込められているのだろうか。物語の中の悪役の存在意義とは何かを探ることを目的し検討を行った。</p> <p>外国の童話・日本の昔話を 25 編ずつ講読し、物語の結末や悪人の存在、登場時を起承転結に注目しながら内容分析を行い、悪役の存在意義について考察を行った。</p> <p>その結果、外国の童話・日本の昔話に共通することは、嘘つき、欲張り、怠け者などがあり、全人とかけ離れている人物が悪役とされていた。また、物語の転・結に着目すると、悪役に対し、物語の結末は戒め、退治、報復の 3 つのカテゴリーに分けることができた。文献において、すべての人はそれ自身の影をもっており、それが、その人の黒い反面であると論じられるように、どの人も悪役と同じように全人とかけ離れている面をもっているといえる。戒めの物語が多いのは、影の部分を用いて悪行を行うと相応の悪い結果が返ってくることを諭し、教訓として取り入れてほしいからだろう。さらに、特徴的なことは、日本の昔話では、悪役として出てくる登場人物に鬼が多くみられ、外国の童話では、オオカミが多くみられたことだ。日本の昔話では、人間が初めに登場し鬼が現れ、話が展開する物語が多く、外国の童話では、動物が最初に登場し、動物の悪役が現れ、話が展開していく物語が多くみられた。全く共通しないものは、日本の昔話の鬼である。この鬼は日本文化の持つ特徴を表しているのではないかと考えた。古来日本では、農耕を主流に行うため天災や災いが起こると農耕生活が成り立たない。そのため、日本では 2 月に節分という災難や病気を鬼に例えて豆まきを行う風習がある。この節分の鬼も日本昔話の鬼も災厄や病気の例えとして、悪役を担っているのではないかと考える。日本の昔話で人間が登場する物語が多いのは、農耕民族である日本人にとって、生活を営むためには周囲の人の存在が、必須的存在だったからだろう。一方、狩猟や遊牧が主流の外国では、飼っているイヌやヒツジなどがいなくなれば生活は崩れてしまうため、それらを襲ったり食べてしまったり生活を脅かすオオカミが悪役として多くの物語で登場したのだろう。つまり、動物が最初に登場し話のきっかけをつくる物語が多くみられたのは、狩猟や遊牧生活のために動物は必須な存在のためであろう。</p> <p>このように見ていくと、日本でも外国でも悪役や登場する生き物たちは、それぞれの文化的背景に合ったものであり、その国の人たちにとって生活を営むうえでの教訓を覚える物語とするためなのだろう。</p>					

氏名	関家 彰子	学籍番号	J012026	ゼミNo.	6					
テーマ	3歳～5歳児に共通的に支持される絵本の特徴について									
<p>絵本や紙芝居は、幼児の生活環境や保育現場において毎日のように読まれ、多くの幼児達から親しまれており、絵本や紙芝居の多くには、読むにふさわしい対象年齢がある。それらは、ページ数や文字数、内容の難しさ、ねらいなどによるものである。絵が多くて文字が少なければ3歳やそれ以下の子どもに読み聞かせるのがよく、文字が大きくて内容の濃いものであれば5歳などの年長児に読み聞かせを行うのがよいと考えられている。では、3歳から5歳児までの幼児を対象とした絵本は存在しないのであろうか。筆者はこの点に疑問を感じている。</p>										
<p>本研究では、3歳から5歳児までがみな集中して聞くことができ、楽しめる絵本、紙芝居というものがあるかどうか、またあるならばその絵本、紙芝居の特徴を検討したいと考え研究の目的とした。</p>										
<p>まず、3歳から5歳児が集中して聞くことができ、楽しめると思われる絵本4冊、紙芝居1冊を用意し、幼稚園実習Ⅱの責任実習の場で読み聞かせを行った。その結果、3歳から5歳児共通的に支持された絵本を見つけることができた。それは、絵本『しりとりのだいすきなおうさま』である。この絵本は、絵本のページをしりとりを通して見ることによって、子ども自身が様々に考えながらしりとりの内容が分かるような工夫がなされている。これが、3歳から5歳児の幼児が集中して見ることのできた理由だと考えられた。</p>										
<p>次に、3歳児から5歳児に支持されなかった絵本『やさいのおしゃべり』についても検討を行った。その結果、5歳児はこの絵本に見入ったが、3・4歳児共に集中できていない様子が見て取れた。その理由は、何にもまして文字数が多く、しかも一文の文章表現が直接的ではなく、3・4歳児にとって文章の言い回しの難易度が難しかったためにスリーリーの内容や展開を十分理解するには至らなかつたためではないかと考えられた。</p>										
<p>以上の2つの絵本を比較検討した結果、以下の特徴が挙げられる。3歳から5歳児に共通的に支持される絵本の特長について、1つ目は、読み聞かせの時間が長すぎず、短すぎない適度の経過時間であること。2つ目は、物語の内容に聞き手が参加できるゲーム性を帯びるなどの思考的参加型であること。3つ目は、言葉の言い回しが比較的ストレートで幼児に理解しやすく直接的な言葉表現であること。これらが必要とされるのではないかということであろう。</p>										
<p>広く一般的には幼児の年齢発達に応じて焦点化された絵本が基本的であり、年齢を超えて全ての3歳から5歳児に支持される絵本は多くはないと考えられている。しかしながら、上述の3つの特徴を持ち得た絵本や紙芝居であるならば、3歳から5歳児すべてに受け入れられ幼児の気持ちを動かしていくのではないかと考えられる。</p>										

氏名	高橋 侑子	学籍番号	J012027	ゼミNo.	6
テーマ	乳幼児の発達を支える玩具の役割とは				
<p>保育現場では、子どもたちが玩具を使って遊んでいる様子を多く目にする。幼稚園教育要領では、遊びは心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であるとされている。幼児の遊びには人、モノが欠かせない。このため玩具は遊びにとっての必須の道具であると考え、近年の玩具にはどのようなものがあるのか。また年齢に応じて作られている玩具にはどのような役割をもつものがあるのかを探っていくことにした。</p> <p>そこで、市販されている玩具の特長およびその用途（調査1）と実際に保育現場で使用されている玩具の特徴およびその遊び方（調査2）を調べることで、市販されている玩具と実際に保育現場で使用されている玩具の年齢ごとの玩具の役割を明らかにし、乳幼児の発達を支える玩具の役割について検討に加えた。</p> <p>その結果として、まず、市販されている玩具は、乳幼児の発達に沿って作られているということが分かった。各年齢に応じて作られており、運動機能だけでなく、コミュニケーション力を伸ばすことも目的としていた。また、玩具を使って遊ぶことで、予想や意図、期待を持って行動しようとする発達の助長を目的としているものあり、それらから、子どもの発達により刺激を与え、更なる成長を促そう正在していることがうかがえる。</p> <p>次に、実際に保育現場で子どもたちの姿を見たり、保育者のインタビューを通して分かった玩具の遊ばれ方では、子どもたちが自分で遊び方を考え、新たな方法で遊んだり、別の物に見立てるなど幼児の創造性を育めるような遊ばれ方がなされていた。例えば、1歳児はおおむね使用方法に沿った遊び方をしているが、2歳児以降にはままごとの道具として積木等を使用する場面が見られるなど他の玩具と組み合わせて遊ぶ姿がうかがえた。このように、3歳未満児は玩具を野菜や果物など道具に見立ててままごとで遊んだりする。3歳以上児では、はじめは、平面的な横の広がりの積木遊びでしかなかったものが、しだいに縦に広がったり、奥行きを持たせたりなど空間を認知した遊び方など、年齢ごとに遊び方に変化が加えられていることが分かった。また、ままごと遊びでは、材料や道具、仕切りなどがだんだん増えていき、5歳児になるとままごとのコーナーで遊ぶだけでなく、積木で作った建物の中など、自分たちで遊びの場を創造的に広げていることが分かった。</p> <p>以上により、実際に保育現場で使用されている玩具には、市販されている玩具が提示しているものには見られない遊び方が多く見られた。このように、メーカーの意図する玩具も幼児の年齢、発達に応じてこのように遊ばれ方にバリエーション増えており、玩具というものは、子どもの発達に刺激を与えたり、幼児の興味関心を促したりなど重要な役割を担っているのだと考えられる。</p>					

氏名	松久 まり	学籍番号	J012055	ゼミNo.	6
テーマ	幼児が主体的に遊びこめる環境とは				
<p>幼児期における幼児の発達を促すうえで重要な環境は、幼児を取り巻くすべてであると同時に、幼児にかかわる教師や友達の存在すべてである。幼児の遊びをスムーズに展開させることに教師は大きな役割を担っているといえる。教育実習をさせて頂いたM幼稚園では、教師は介入するところと幼児を見守るところを見極めているように思われた。教師の環境への配慮と幼児とのかかわりによって、主体的な遊びが多くの感動を生み、幼児の心身に働きかけていくのであろう。では、園の保育観や保育方針によって教師の保育に対する意図やかかわりが、どのように幼児に影響を及ぼすのであろうか。そこで、これらを探ることを通して、幼児が主体的に遊びこめる環境について検討していきたいと考えた。</p> <p>本研究では、筆者の3年次、4年次教育実習の実習記録より、まずは園長先生からの助言に基づいて園の保育観や保育方針を検討したところ、園長先生には、3つの環境として、物・空間・人(友達・教師)これらを通した保育を常に大事にしていることがうかがえた。次に、筆者の教育実習日誌から実際に子どもとかかわる実習担当教師のコメントを抽出し検討すると、園長先生の助言と同様に、物との関係・空間(時間)との関係・人(友達・教師)との関係、これらのカテゴリー別に分類することができた。まず、物とのかかわりとして、遊びのなかで体験しながら、幼児が正しい関わり方を学ぶことを大切にしている姿があった。危険なものを遠ざけるのではなく、物と上手く関わるよう教師が言葉や動きなどで伝え、幼児自身が体験することを通して大きな成長へつながっていくのであろう。教師には、幼児が「したい」と思った時にできる環境を提供していきたいという信念がある。次に、空間とのかかわりとして、楽しく遊べるという空間を作り出すために、幼児が安心して過ごせる空間づくりを通して、遊びを更に深めていきたいとする願いが教師はある。一つの遊びに取り組むことが子どもにとっての遊びの中での学びにつながるのであろう。さらに、友達とのかかわりとして、教師には、クラスの友達との関係を作っていくことが一番にある。クラスから他学年の異年齢の友達とのかかわりを通して様々な学習への興味を覚えたりなどできるのであろう。加えて、教師とのかかわりとして、幼児を認め、育ちを理解し適切な援助をすること、自分なりの考えを持って主体的に動いていく力を身につけるために、教師は過度なかかわりはしないこと、子どもの目線になって共に遊び込む、といった教師観をもっている。</p> <p>上述により、M幼稚園の園全体で環境を大切した保育、子どもの発達を促す保育が実践されていることが分かる。つまり、幼児の遊びの経緯や発達段階なども把握してからの環境構成、幼児を主体とした遊びの環境となるようなかかわりがあることによって、幼児が主体的に遊びこめる環境となっているといえよう。</p>					

氏名	宮岡由美子	学籍番号	J012056	ゼミNo.	6
テーマ	5歳児のお絵かきに見られる創造性について				
<p>保育現場では、絵を描くということが表現活動の一環として見られる。その中で幼児が主体的に行うお絵かきにおいて、どのようなことが生じ表現しているのかについて疑問を持った。</p> <p>そこで、子どもたちの描画に関わる事例の検討を通して、子どもがどのような創造性を持って描画を行っているかということに着目して考察を加えることとする。</p> <p>本研究では、教育実習（幼稚園）で配属された5歳児クラスの幼児を対象としたが、自らお絵かきをするという場面は頻繁に見ることは難しく、女児と男児の事例の2つのみしか収集することはできなかった。この2つの事例を考察し、5歳児の創造性について検討していくこととした。</p> <p>その結果、女児の絵は創造的であるとはいひ難く、自由の中で描くお絵かきは、上方には空で太陽があり、下方は地面で草があるというように頭の中でパターン化された絵を描いたに過ぎなかった。また、もう一人の女児は「実習生に気に入られたい」という思いが強いため、実習生に好きなモノを尋ね、その絵を描いたのであろう。これらの事例を通して、女児から本当の遊びの中での創造性を引き出すことは非常に難しいことが分かった。しかし、男児は普段の生活の中でも非常に創造的であるといえる。対象男児の絵は「戦い」で繋がっており、ページをめくることで話が展開していくという特徴がみられた。このことから、この男児は話を展開させながら次々と発展させていき、場面転換を図っているのではないかと考えることができる。そして、それは絵を描くという手法を基にして、話が展開できることで、さらに絵が繰り広げられていくのかもしれない。つまり、彼の中で絵を描くことが助けになり、話が発展するのだろう。そうであるとするならば、絵を描かなければ男児が創造した空想の怪獣は誕生しなかったのではないか。つまり、お話も絵も両方存在すればこそ、両者が互いに補いながら話が創作できたのであると考える。また、男児のお絵かきの最中に筆者が言葉かけをした「ウルトラマン」というフレーズが聞こえたことで、その言葉をきっかけに男児なりに創造性の中では連想が終結し、お絵かきを自ら終えたのだと考える。つまり、話は次々と展開していくけれど、他者の投げかけによって終えることもあるし、発展することもあるかもしれないということである。</p> <p>結果として、明らかに男女児ではお絵かきの内容に違いがあることが見えた。女児はパターン化された絵を描いており、そこには創造性は見られなかった。しかしながらとりわけ、男児は、自分自身が作り上げた空想の怪獣がテレビに登場するという考えを持っており、より創造的であるといえるのではないだろうか。</p>					

氏名	浅山 紗輝	学籍番号	P012002	ゼミNo.	7					
テーマ	男性脳・女性脳について									
<u>1. 研究の動機</u>										
2年生の基礎演習の授業で男性脳と女性脳について学んだ。その内容は「脳には男女で性差があり、様々な点で違いがある」というものであった。脳に性差があるということを考えたことがなかった私は大変驚いた。それと同時に面白いと感じた。男性脳と女性脳に関する知識を学んだ後に自分の日常生活を改めて振り返ると、自分の思考方法が女性脳の傾向に当てはまっているところがあると感じた。もう少し詳しく男性脳と女性脳について知りたいと思い、卒業研究のテーマとした。										
<u>2. 研究方法</u>										
男性脳や女性脳について研究を進めるにあたって、インターネット情報や文献資料を利用して基礎知識や基本理論等を調べた。そして、実際に男性脳と女性脳といった脳の性差があるのか愛媛大学・松山大学・松山東雲女子大学の学生89名を対象にアンケート調査を行った。その結果を基にグラフや表を用いて分析と考察を行った。また統計的な有意差が見られるか適合度検定を行い、男性脳と女性脳の違いについて検討を行った。										
<u>3. 結論</u>										
アンケート調査の結果、男性は男性脳傾向、女性は女性脳傾向に必ずしも当てはまるとは言い切れない結果となった。私の考えとしては、男性は男性脳傾向に、女性は女性脳傾向に当てはまると言い切れる項目がもう少し多いのではないかと考えていた。だが、適合度検定を行い、統計的な有意差が見られるか調べた結果、16項目中5項目にのみ有意差が見られた。つまり、ほとんどの項目で統計的な有意差が見られないという結果となった。この結果から、個人の生活環境や好みにより男性であっても女性脳傾向に当てはまるし、女性であっても男性脳傾向に当てはまる場合があるということがわかった。そのため、男性は男性脳的な傾向、女性は女性脳的な傾向では必ずしもないというのが今回の調査の結論である。										
今回の研究で脳の性差について調べて、脳の性差以外の男性と女性の様々な性差にも興味を持った。今後の研究課題の一つとしたい。そして、機会があれば今回実施したアンケートを改善し、調査対象を変えて行ってみたいと思う。										
<u>4. 参考文献</u>										
・アラン・ピーズ、バーバラ・ピーズ共著、藤井留美訳『話を聞かない男、地図が読めない女—男脳・女脳が「謎」を解く—』主婦の友社、2002年。										
・レナード・サックス、谷川漣訳『男の子の脳、女の子の脳—こんなにちがう見え方、聞こえ方、学び方』草思社、2006年。										
・澤口俊之、阿川佐和子『モテたい脳、モテない脳』新潮社、2005年。										

氏名	安部 唯奈	学籍番号	P012003	ゼミNo.	7					
テーマ	女子大生の化粧行動について									
<u>1. 研究の動機</u>										
外出時には化粧をして出かけなくてはいけないと思っている。朝寝坊をした朝など、化粧をすることが時間的にも気分的にも不可能なときがある。以前から、女性はなぜ化粧をするのか、他の人々は化粧に興味があるのか、ということについて関心があった。そこで、女子大生の化粧行動を研究のテーマとした。										
<u>2. 研究方法</u>										
今回の論文では、化粧の歴史、化粧に関する意識に関する記述を調べ、本学の学生を対象としてアンケート調査の設問を準備し、調査を実地した。そして、調査結果を集計し、考察を加えた。										
<u>3. 結論</u>										
化粧は、「自分」のためと「他人」のためという2通りのルートによって行われる。他人との関係を前提にしたメイクアップであっても、「自己」の価値を高めることをめざした化粧であっても、その効果は互いに循環して関連する。										
古代にメイクをする理由としては、現代と同じで「身だしなみのため」であった。白粉から始まった古代のメイク以来、次々に新しいメイクが流行り、お歯黒、眉墨などが流行りとなった。そして、女性が化粧をすることは当たり前となった。										
アンケート調査結果より、化粧をする者の中で「大学に入ってから化粧を始めた」が全体の半分を占めた。大学入学以降では「周りの人がしているから」「アルバイトを始めたから」という人が多かった。また、「周りからの意識を気にしている」人も多く、化粧をすることでコンプレックスを隠す、自分に自信を持つことができるという声も多かった。										
今回、化粧行動に関する研究を行って、今まで知らなかつた化粧に関する知識を知ることができた。また同世代の女子が考えていることを伺い知ることができた。今後、まだまだ化粧をし続けていくと思うが、研究をする前と違った気分で化粧ができると思った。また、今後、研究をする余裕があれば、いろいろな書籍を読み、アンケート調査もしてみたいと思う。										
<u>4. 参考文献</u>										
<ul style="list-style-type: none"> ・高木 修監修『化粧行動の社会心理学』北大路書房、2001年。 ・ポーラ文化研究所 やさしい化粧文化史ー入門編、ポーラ文化研究所、 http://www.po-holdings.co.jp/csr/culture/bunken/muh/01.html。 ・村澤 博人『顔の文化史』 東京書籍、1992。 										

氏名	篠森 さやか	学籍番号	P012010	ゼミNo.	7
テーマ	大学生の SNS に関する意識について				

1. 研究の動機

SNS は利用者が急増し、若者の間で流行している。数年前から SNS を利用した犯罪や事件も急増した。女性が SNS によるストーカー行為で、警察に相談したが殺害されるという事件も発生した。個人情報の管理責任が問われる時代になった。そんな中、幼稚園の先生になった友人が、自分の担任クラスの集合写真を無断で SNS にアップロードしていたので驚いた。これを契機に、最近の若者の SNS に対する危険意識を調査したいと考え、研究テーマとした。

2. 研究方法

SNS の利用実態に関する調査票を作成し、地元の 3 大学でアンケート調査を実施し、集計を行った。総務省による「SNS を利用するうえでの危険と対策」の Web 資料や、SNS による悪質事件の記事を調べた。SNS の急増時期を調べるため大向一輝氏（国立情報学研究所）による文献を参考にした。

3. 結論

文献や Web 資料を調査した結果、PC や携帯電話（スマートフォン）でのインターネット接続環境やデータ通信の整備により、ユーザが利用しやすくなったことが主な原因で SNS 利用者が急増した。SNS を利用する際、不正リンクからウイルスを配布している場合やスパムアプリケーションの場合があるので注意が必要である。位置情報の設定などを適切にしておかないと、意図せず個人情報や位置情報が流出してしまう。「自分の書き込みがインターネット上に永久に公開される」ということを念頭に置き、SNS は利用しなければならない。

アンケート調査の結果、近年の大学生は SNS を利用するに当たり、それなりの危険があるという意識はあるようである。しかし実際には、それらの危険についての対策は万全ではない現状が見受けられ、十分に危険意識を強める必要があると考えられる。

4. 参考文献

- ・総務省「国民のための情報セキュリティサイト」、2016/1/7、
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/security/enduser/security02/05.html
- ・国立情報学研究所「SNS の歴史」大向一輝、2015/11/23、
https://www.jstage.jst.go.jp/article/bplus/9/2/9_70/_pdf
- ・朝日探偵調査事務所「ネットストーカーの被害に遭っている方へ」、2015/11/22、
<http://www.asahishinryo.jp/article/d581.html>
- ・防犯対策.com「三鷹女子高生ストーカー殺人事件、つきまとい対策とは」、2015/11/23、
<http://alpha-biz.com/568.html>

氏名	日野林 茉美	学籍番号	P012019	ゼミNo.	7
テーマ	アダルトチルドレンについて				

1. 研究の動機

現在の日本では、「アダルトチルドレン(Adult Children、以下「AC」と記す)」についての認知度が低く、「子どものような大人」、「大人になりきれていない未熟な人」といった誤解が多い。本来のACとは、「機能不全家庭で育ったことにより、成人してもなお内心的なトラウマを持っている人」のことを指す。自分も過去に誤った認識をしていた。今回ACについての知識を深めたいと思い、このテーマで卒業研究を行うことにした。

2. 研究内容

書籍や論文などを利用して、ACについて定義や特徴、問題や症状について調べ、考察を行った。そしてACの認知度や認識に至ったきっかけ、および印象やイメージを、実際に松山東雲女子大学の学生72名に対して調査を行い、検討した。

3. 結論

ACの認知度について松山東雲女子大学の学生を対象に調査を行った結果、約半数以上の者がACを正しく認識していないことが分かった。また本来の定義との認識の相違が非常に特徴的な結果として得られた。ACをほぼ直訳したままで印象やイメージを持たれていることが分かった。

ACは彼らが抱える問題や症状から生きづらさを抱えているとされる。その生きづらさは第三者からは認識しづらく、時として社会問題にまで発展することがある。現在の認知度や誤情報の定着によってAC問題は発覚しづらく、時としてそれにより批判を伴うこともある。ACの精神的虐待の象徴的特徴としてしばしばあげられる共依存は、友人関係にも表れることがあるが、恋愛関係においてそれが特徴的に表れる。しかし共依存、特にACは自己認知の問題である。つまり人間関係などにおいて当事者自身が苦痛や葛藤、生きづらさを感じていれば問題になるが、自身がそれらを感じていなければ何ら問題はない。

このようにACに関連する問題は現状において発覚しづらいが、人間関係など身近なところに表れることがあるので、日常から注意しておく必要がある。

4. 参考文献

- ・緒方 明『アダルトチルドレンと共に依存』誠信書房、1996。
- ・西尾和美『アダルト・チルドレンと癒し—本当の自分を取りもどす』学陽書房、1997。
- ・信田さよこ『アディクションアプローチ: もうひとつの家族援助論』医学書院、1999。
- ・玉置 悟『不幸にする親-人生を奪われる子ども』講談社、2008。
- ・齊藤 学『インナーマザー-あなたを責めつづけるこころの中の「お母さん」』新講社、2004。

氏名	本田 沙貴	学籍番号	P012021	ゼミNo.	7					
テーマ	四国遍路について									
1. 研究の動機										
<p>約 1200 年前、弘法大師が修行で歩いたといわれる 88 の寺が四国 4 県に点在する。その足跡を辿り、巡礼することを「お遍路」または「四国八十八カ所めぐり」といい、巡礼する人は「お遍路さん」と呼ばれている。四国 4 県を一周するという、世界的にも珍しい「回遊型」である。道のりは約 1400km にも及び、今も昔も多くの参拝者が四国を訪れ、祈りを捧げている。この「四国遍路」がどのようにして構築されてきたのか、また多くの人々に支えられてきたのかについて関心を持ち、卒業研究のテーマとした。</p>										
2. 研究方法										
<p>ホームページで公開されている四国遍路に関する資料や文献資料を利用して、四国八十八ヶ所の各霊場の歴史や由来について調べた。また、松山発の実際の旅行プラン（自家用車での四国遍路をする回り方について）を検討した。そして、お遍路の道具・準備について述べ、最後に四国遍路は何なのかを考察した。</p>										
3. 結論										
<p>四国遍路をする人の目的は、病気平癒、心を癒したい、自分を見つめ直したいなど様々である。道を歩いていく中で、自然や風土がお遍路さんの心を癒し、活力を与えてくれる。</p>										
<p>この四国八十八ヶ所を巡る旅は、四国の美しい自然の中で、ほとんど海岸線に沿って歩くが、山の中に入るところもあり、海あり、山あり、街の中ありで、弘法大師ゆかりの聖地を訪ねる旅でもある。そしてお寺をまわっているうちに、弘法大師を感じるようになる。</p>										
<p>人間関係でのストレスを抱えている人は、人とのふれあいや、道中の自然を見て心を癒し、自分を見つめ直すきっかけとなるかもしれない。四国遍路について具体的に調べたことはなく、今回の研究が初めてであり、初めて知る事柄も多く、とても興味深く感じた。今後、家族で四国遍路の体験もしてみたいと思った。</p>										
4. 参考文献										
<ul style="list-style-type: none"> 昭文社編集部編『まっふるマガジン はじめてのお遍路』、昭文社、2015 年。 四国八十八ヶ所霊場会公式ホームページ、2015 年 12 月 10 日、 http://www.88shikokuhenro.jp/。 第 62 番 宝寿寺（ほうじゅじ） 四国遍路へのいざない、2016 年 1 月 8 日、 http://henro88.net/180iyo/hojuji.html。 NPO 法人遍路とおもてなしのネットワーク お遍路情報、2016 年 1 月 11 日 										

氏名	神野 華澄	学籍番号	J012023	ゼミNo.	8
テーマ	現代社会に必要とされるリーダーシップとは －女性が社会で活躍するために－				

はじめに

筆者はアルバイトリーダーの経験を通して「リーダーシップとは何なのか」という疑問を持っていた。女性の社会進出が注目されている今、女性がリーダーとして活躍するために求められているリーダーシップとは何なのかと考え、このテーマで卒業研究を進めることにした。

第1章 リーダーシップ

まず既存研究から、リーダーシップは自らが望めば学習することによって身につけることができ、リーダーとフォロワーの信頼の上に発揮されるものだと分かった。リーダーの条件やリーダーシップのスタイルは時代により変遷してきたが、現在の日本社会では多種多様な価値観を持った世代が混在しており、統率力を持ったリーダー主体のリーダーシップではなく、フォロワーを主体とする支援型のリーダーシップが求められていることも分かった。

第2章 女性のリーダーシップ

近年では国際的に女性のリーダーシップの発揮が求められているが、日本の雇用制度の現状から考えると、女性がリーダーとして活躍するのはまだまだ難しい。しかし、女性リーダーの育成に力を入れる企業も年々増えている。制度が整うのを待つのではなく、女性自身の意識改革を行い、女性がリーダーシップについて前向きに考えていくことが大切である。支援型リーダーシップを発揮するためには、それに必要なスキルを身に付けることが重要になることも分かった。

第3章 コーチング

コーチングは近年人材育成で注目されている。支援型リーダーシップの特徴の一つでもある「コーチング」という視点からリーダーシップについて考察した結果、コーチングスキルは、女性が得意とする他者に目を向け、その力量を見定めて支援することをさらに活かし、引き出すことが出来るスキルであり、支援型リーダーシップをより効果的に発揮するためにも役立つことが分かった。

おわりに

この研究を通して、フォロワーもリーダーシップについて考えなければならない時代になってきたことが明らかになった。近年は、「女性の特性やコーチングスキルを活かした、リーダーがフォロワーを支援する支援型のリーダーシップ」が、集団の目標達成において必要かつ最も有効なリーダーシップではないかと考える。近い将来、女性リーダーが活躍している日本社会になっていくことを願っている。

氏名	橋 亜梨沙	学籍番号	J012030	ゼミNo.	8					
テーマ	子どもの言語習得と母親の関わり —マザリーズと読み聞かせの観点から—									
子どもがコミュニケーション媒体である言葉を用いることができるようになる過程で、母親のマザリーズや絵本の読み聞かせが言語習得にどのように関わっているのかをテーマに、本卒業研究を進めた。										
第Ⅰ章 乳幼児の言語習得										
第1節では、乳幼児の言語習得の過程を確認し、また子どもが言葉を身につけていく仕組みに関する説にも触れた。第2節では、臨界期仮説や第二言語習得について、事例を挙げて考察し、乳幼児の潜在能力の凄さを改めて理解した。										
第Ⅱ章 母親の言葉										
母親は、子どもがまだ言葉を発することができないにも関わらず、表情や動きなどから子どもの気持ちを読み取り言語化している。「代弁」という方法によって、母親と子どもとの間でコミュニケーションを成り立たせているのだ。また母親は、子どもがより聞き取りやすく感情を感じ取りやすい、母親特有の「マザリーズ」を用いる。このように、代弁やマザリーズを通して、言葉を教えるのではなく、母子の感情のやりとりを含む、コミュニケーションの取り方を自然に伝えているようだ。つまり、代弁により、言葉をまだ発さない頃から会話に触れ、またマザリーズによって、母親の気持ちを感じ取りながら言語を習得していき、コミュニケーションの基盤をこの頃から形成していると言える。										
第Ⅲ章 絵本の読み聞かせ										
母子の双方向の働きかけの一例として、絵本を探り上げ、読み聞かせの7変数や読み聞かせの効果、年齢ごとの母子の様子について文献を参考にまとめた。だが調べていくうちに、読み聞かせにおいて、親と子どもは対等ではなく、主導権は親が握っているように見受けられることがわかった。どのような絵本に出会い、どこで読み、どれだけの時間を費やすかというの、すべて親次第だからだ。しかし、同じ本を読み共有する場と時間とふれあいは、子どもにとってだけでなく、親にとってもかけがえのないものになる。また、子どもの反応があるからこそ、同じ絵本でも新しい発見があり、楽しみながら読むことができるのだ。										
終章										
本研究では、代弁やマザリーズなど、母親からの働きかけを中心としたが、母親からの発信がすべてではない。子どもは、表情や身振り手振り、ときには泣くことにより、親の関心を引き、コミュニケーションをとるためのきっかけづくりをしている。子どもの「母親に愛してほしい」という思いと、母親の「子どもを知りたい」という思いの、双方向の気持ちがあるからこそ、双方が意識的・無意識的にも働きかけ、互いに影響し合っているといえるだろう。										

氏名	岡田 麻希	学籍番号	P012501	ゼミNo.	8
テーマ	対人コミュニケーションとパーソナル・スペースへの影響要因				

はじめに

本研究のきっかけとして、会話をする時の距離が近い。と知人に言われたことが始まりである。自身では、しっかりと距離を保っている意識だが、話すときの相手と私の距離は、相手に少し気を使わせるほど近いときがあるらしい。また、たまに洋服屋に行くと、店員が近いからと接客に嫌気を指す人の話を聞く。自分の体験や他の人の話から、人と関わる時の距離というものに興味を持った。そして、関わる距離間は性格によって変わっていくのか疑問に思い始め、研究を始めた。

I章：パーソナル・スペースについて

ここでは人の持つ個人空間と、その距離帯について、定義付け、距離について検討した。一般に、自分のパーソナル・スペースが保証されているときは快適であり、逆に、この空間に他人が侵入すると不快になる、と考えることができる。また、その空間には四つの距離帯があることが明らかになった。そこで次章ではコミュニケーションにより距離間に差があるのかを既存研究結果から調べる。

II章：コミュニケーションと対人距離の影響要因

本章では、まず男女のパーソナル・スペースの違いを比べ、既存研究から、性別によるコミュニケーションの高低差と距離の違いについて考察した。親しい同性・異性はコミュニケーション能力・スキルに高低差があつても既知・未知の関係による影響の方が大きく、コミュニケーションスキルの高い人でも未知の相手に対し、前後左右 1m までパーソナル・スペースが拡大することが分かった。この距離は社会距離に値し、個人的な親密さが必要ではなくなるからである。

III章：シャイネスとコミュニケーション時の対人距離について

次に性格特性（外向性・内向性）とシャイネスの関わりを見た。シャイネスは性格特性に関係なく万人共通で心理的状況・場面によって表れることが分かった。さらに、性格特性とコミュニケーション能力・スキルからパーソナル・スペースの関係性について既存研究結果をもとに考察した。そしてコミュニケーション能力と同様にシャイネスが高い人（つまり、内向的で人と打ち解けるのが苦手な人）は、既知・未知や同性・異性に関係なく、前方向も後方向も距離をとりたがることが分かった。対して、外向的で人と話すことに不安を感じない人は、知らない人でも、前方向の距離は親しい人に対する場合とそれほど大きくは変わらないことが分かった。

おわりに

本研究では、各章ごとに仮説を立て、立証することができた。今後、社会に出て人と関わることが増えるが、本研究の結果で得たことを心得て接していきたい。

氏名	菅 由加里	学籍番号	P012502	ゼミNo.	8
テーマ	チームスポーツとコミュニケーション				
<p>現在、企業が新卒者に求める人材として「コミュニケーション能力」が最重要視されている。日本経済団体連合会が9月28日に発表した調査結果によれば、「選考時に重視する要素」の第1位は8年連続で「コミュニケーション能力」である。この結果を逆読みすると、「採用側は新卒者のコミュニケーション能力を不安視している」とも取れる。そこで社会の求めるコミュニケーションとはどのようなものなのか、また自分自身がチームスポーツ（バレーボール）をしている中で、コミュニケーション能力を向上させることができ、直接チームの技術向上に繋がると言えるのだろうか。こういった疑問について探求する。</p> <p>第1章では、まず対人コミュニケーションを中心に、既存研究を基にコミュニケーションの定義や種類・方法、コミュニケーションについて調べを進め、コミュニケーションはチームスポーツだけでなく、様々な場面で活用されていると述べた。また、相手が好感を持つような話し方のできる人でコミュニケーションが上手な人であっても、必ずしもコミュニケーション能力が高いとは言えず、良好な人間関係を築く上で相手の印象をよくすることは大事なことだが、社会で求められるコミュニケーション能力としては十分ではないとわかった。どれだけうまくコミュニケーションをとるかによって、相手に与える印象や次に繋がるステップになることがわかった。</p> <p>第2章ではチームの定義やチームスタイル、チームワークの定義、チームスポーツにおけるコミュニケーションの重要性について述べた。チームスポーツを成り立たせるのに必要なチームワークに欠かせないのがコミュニケーションであるが、これは練習や日常生活で選手間が意識的にコミュニケーションをとる努力をすることでチーム力向上につながるのであり、その点において、コミュニケーションはチームワークのプロセス全体を支える重要な役目を果たしているということがわかった。</p> <p>第3章では、企業が社会人に求める能力についての調査結果と、選手・指導者がチーム力の向上のための要件に関する調査結果を基に、本学と愛媛大学の在学生に、コミュニケーション意識と能力について2種類の質問群に回答してもらった（社会で重要な能力、チームを向上させるために必要だと思う要件）。その結果、社会で重要な能力の1位がコミュニケーション能力、チームを向上させるために必要な能力の1位が選手間のコミュニケーションという結果になった。このことから、コミュニケーション能力は企業や選手・指導者と大学生とともに、世代間の違いなく、群を抜いて必要とされていること、その一方で、一般常識、信頼性、論理性では、両者の間で重視の仕方にかなりのギャップが見られることが明らかになった。</p> <p>今後コミュニケーション能力を活かし、チームスポーツに限らず社会の様々な場面で今回の研究を活かしていきたいと考えている。</p>					

氏名	武智 真由	学籍番号	P012503	ゼミNo.	8					
テーマ	愛媛特産の柑橘の未来 — “みかん離れ”を防ぐための商品やサービスの付加価値向上に向けて—									
<u>序章 はじめに</u>										
<p>愛媛みかん大使の活動を通して、愛媛の柑橘の可能性について研究したいと考えた。本論文では、まずみかんの購入量や消費量の変化について 1973 年以降のデータを基に探し、みかん離れの要因について調べた。そして、現代の消費者に、みかんを始め柑橘を受け入れ消費してもらうために何が必要かを考察した。</p>										
<u>第Ⅰ章 “みかん”をはじめとした生鮮果実のデータから見えること</u>										
<p>本論文のキーワードであるみかんと生鮮果実の支出額、購入量、消費量の変化を調べた結果、1973 年と 2011 年では、若者から高齢者まで大幅なみかん消費量の減少が見られた。だが、購入量に比して、購入単価はさほど減少していないことから、「多品目少量消費」であることがわかった。この傾向は、消費者の食の消費動向の変化や家族形態の移り変わりなどによる人口変化が関係していると思われるため、“みかん離れ”に至る社会的変遷について調べを進めた。</p>										
<u>第Ⅱ章 “みかん離れ”に至る社会的変遷</u>										
<p>現在の日本の人口変化の特徴は、少子高齢化である。2014 年には、65 歳以上の高齢者世帯が全世帯の 24.2% となり、18 歳未満の未婚の子どもがいる世帯(22.6%)を初めて上回った。女性の社会進出も進み、共働き世帯も増加していることから、高齢者や単身世帯、働く女性向けの商品やサービスが必要であることが明らかになった。</p>										
<u>第Ⅲ章 嗜好と食のライフスタイルの変化への取組み</u>										
<p>現在、食品産業や小売業では、「高齢者」や「単身世帯」、「働く女性」に向けて「簡便・簡単」をキーワードとした展開が進んでいる。食品では、メニュー用調味料を始めとした 4 つの取組み例を挙げ、また小売では、コンビニエンスストアとスーパーの多彩なチャレンジについて述べた。</p>										
<u>第Ⅳ章 “みかん離れ”への対策と今後</u>										
<p>第Ⅲ章までの調べを基に、みかん離れへの対策と今後について述べている。みかんの良さを最大限に引き出すような活用方法や、新たな柑橘の挑戦として、2005 年に輸入自由化となったブラッドオレンジの可能性を指摘した。</p>										
<u>第Ⅴ章 考察および提案</u>										
<p>現代の消費者に柑橘を消費してもらうには何が必要かを考察した結果、柑橘離れを阻止するため、オレンジデーなど愛媛らしさを加えたオリジナルな提案を考案した。ある世代にターゲットを絞り、商品(柑橘)やサービスの付加価値向上を重視している。</p>										
<u>終 章 まとめ</u>										
<p>本論文で、柑橘離れを阻止するために何が必要なのかということや、オレンジデーに関する提案を挙げたことで、柑橘の未来が明るいものとなってほしい。</p>										

氏名	後藤 里菜	学籍番号	J012017	ゼミNo.	9
テーマ	東京ディズニーランドの特徴からみる夢の世界				
<p>私たちの身近には、ディズニーグッズが溢れている。実際に遊びに行っても、幅広い年齢層で、三世代で遊びに来ている家族も多い。海外からのゲストも多く、どの世代でも楽しめるテーマパークとなっている。また、非現実的な空間を演出し、ゲストを夢の世界へと導いていく。また、おもてなしとしての評価が高いが、どのような社員教育がされ、マニュアルがあるのか。また、成功した経営戦略な何なのか気になり研究を進めていった。</p> <p>ゲストに現実を忘れてもらい非現実的空間を楽しんでもらうために、外の世界を遮断し、各エリアごとに愉快な音楽を流し、床の色を変え、時計を置かないなど徹底して夢の空間を演出している。テーマパークには欠かせないアトラクションに関しては、建物の外観から乗り場、出口に至るまでが一つのストーリーとなっている。そのため、ディズニーの話を知らないでも楽しむことができる。それが、万人受けする一つの理由ではないか。また、施設の環境整備もしっかりと整っており、24時間体制で清掃をおこない、園内にはカストーディアールという掃除専門のキャストが常にいる。キャストを「夢と魔法の王国」の住人にしてしまうことで、ウォルト・ディズニーが生前に語った「毎日が初演」の状態を保っている。そして、職場環境が充実しているため、アルバイトが圧倒的に多いディズニーリゾートだが、テーマパークとして成功したのではないか。ディズニーリゾート独自の経営戦略では、キャストの人材育成に力を入れている。徹底した、ルーティン・ワークを導入し、特徴のある経営理念を有し、キャストに浸透させ精神面の人材育成をおこなっているため、東京ディズニーランド開園以来33年たつが陳腐化していない。作業に関しては、細かなマニュアルがあるわけではなく、すぐに覚えられるような単純反復作業となっている。テーマパークだけでなく、ホテル事業にも力を入れている。学生が安易に宿泊できる金額ではないが人気で中々予約がとれない。客室にも夢の国ならではの仕掛けがあり、宿泊者のみが体験できる特典もある。そうして、宿泊以上のメリットとなるようにしている。東京ディズニーリゾートでは、企業の参加があることによってアトラクションの導入など常に進化をし続けている。</p> <p>東京ディズニーランド開園以来、現在でも絶大な人気を誇っているのは、さまざまな特徴があり、ディズニーランドならではのさまざまな取り組みがテーマパークの魅力を維持していることが分かった。その成功の背景には、独自のしっかりとした経営戦略が貫かれている。これからディズニーリゾートは、「テーマパーク事業拡張」「ディズニー依存と舞浜一極集中からの脱却」である。それを目標に更なる進化を遂げていくだろう。</p>					

氏名	高松 彩花	学籍番号	J012028	ゼミNo.	9
テーマ	愛媛の祭り				
<p>私は、小さい時から「祭り」が好きで家族みんなで参加していた。近年は、様々な地域の祭りにも参加するようになり、地域が変われば祭りにも違いがあることを見つけた。また、違いを知ったうえで地元の祭りに参加することにより、地元の祭りの魅力について感じることもできた。私の大好きな「祭り」をより詳しく知りたいと思い、このテーマにした。愛媛県内の祭りを取り上げ、違いや特徴、祭りの様子についてまとめた。また、担き夫の人たちにアンケート用紙を配布し、その結果や家族で「祭り」について話し合った結果についてもまとめ、これから「祭り」のあり方について考えた。</p> <p>地域が変われば祭りの特色も変化するが、「祭り」に対する想いは変わらない。伝統ある「祭り」であるということ。先代が築いてくれたものに自分たちの色を足していく。それが「次世代継承」であるということ。ただ、今までの歴史を守るだけでなく、現在の自分たちが守りつつ新しい色を足していくことが大事であることがわかった。今まで、自分も「祭り」が好きで参加してきたが、ここまで改めて祭りについて考えることなんてなかったが、神輿の起源や原型など初めて知ったこと・改めて感じたこともあり、やっぱり「祭り」の持つ魅力はすごいな、かっこいいと感じた。</p> <p>これから課題として「担き夫」の確保の問題がある。また、若者の参加がまだまだ少ないとすることも関係しているだろう。少子高齢化が進んでいるなか、子ども・若者の祭り離れが進んでいけば、これから「祭り」はどうなっていくのか。たくさんの担き夫が思っている「次世代への継承」も難しくなっていく。これから「祭り」を盛り上げていくためにも、子ども・若者が参加しやすい体制づくりが大切になるだろう。また、「祭り」に対する考え方もう一度考え直すことも大事である。年配者と若者が上手く調和すれば、もっと良い「祭り」が出来るのではないだろうか。今回の研究を通じて、様々なことを知ることが出来て、より「祭り」が好きになった。また、「祭り」を通して、地域文化の交流と発展に携われていることに感謝しながら、これからも「祭り」に参加していきたい。</p>					

氏名	立川愛華	学籍番号	J012031	ゼミNo.	9
テーマ	愛媛の方言				

私は、愛媛県の松山市に21年間住み、松山東雲女子大学に入学した。入学してからたくさんの友達ができ、愛媛県だけでなく、県外や県内でも南予や東予地区出身の人と話すことがあった。会話の中で、同じ愛媛県ではあるが、言い方や言葉の使い方が違い、方言があることが分かった。私は、同じ愛媛県内で、地域によって方言がある特徴を知りたかったため、文献をもとに論じていきたいと考える。

第一章では、方言とは何かについて述べている。方言の定義や要素を調べ、方言の境界線を引くことは難しいが、単語・語尾・発音・アクセントの違いから日本全体の方言を分布として文献をもとに研究した。また、方言は地域差のある言語要素の意味で使われる。外国に向けての日本国のことばとして国を統一するための計画されたことばが標準語であり、生活環境や方言の違う人たちが、全国どこに行ってもお互いに通じ合えることばが共通語であることも分かった。方言は以前、「共通語よりも劣ったもの」で、使うことが恥ずかしいという認識が一般的であったと思う。しかし、現代では、国の動きの中で方言も価値を見直され、教育やマスコミの手も加わって、方言を使うことが恥ずかしいという認識は減り、方言は地域の特徴だという認識が広がっている。

第二章では、愛媛県の方言について述べている。夏目漱石「坊っちゃん」では、代表的表現のイメージである「ナモシ」について述べている。愛媛県は大きく分けると四国方言と呼ばれ、愛媛県のことばは「伊予ことば」「伊予弁」と言われていることが分かった。東予地区・中予地区・南予地区の地域差について文献から引用した表を参考に述べていく。ことばは時代と共に変化し、東予・中予・南予を明確に線引きはできないが、ことばの使われ方が違っている。違っている中でも、中予地区を中心に「ケン」ということばは東予方面から南予方面まで一連の連動性があることが分かった。また、地理的条件により東予地区は新しいことばが流れやすく、昔のことばが残ることは少ないが、南予地区は新しいことばが流れにくく、昔のことばが多く残っていることが分かった。

今回の研究から、これからも時代と共に方言は変化していくと私は考える。方言は、地域の文化や地域の豊かな人間関係を担うものであると考える。「方言」を使うことに恥じらいなく、コミュニケーションを取ることで、それぞれの地域独特の文化を伝える方言の価値が見直されていくだろう。共通語や標準語の中に方言を尊重して使うことが、方言をこれからも残すことにつながっていくのではないかと私は思う。

氏名	南條 歩	学籍番号	J012041	ゼミNo.	9
テーマ	母親の乳幼児期の育て方接し方による 人格形成の影響				
<p>大学二回生の時に、母親に暴力などを受けていて施設に保護されている小学三年生の女の子に出会った。その子はとても言葉一つ一つがきつく、今まで母親に言われていたと思われるような暴言を言っていた。私はその子と関わってみて、小さい頃に母親から愛情を十分に注いでもらったのとそうではないのとでは、人格形成にどのような影響が出てくるのかという疑問が出てきた。そこで、乳幼児における人格形成と愛着について論じていきたい。</p> <p>第一章では、愛着と人格形成について述べている。愛着を提唱したボウルビイによると、愛着とは、「個人が特定の個人に対してもつ情緒的な絆であり、人生最初の愛着はほとんどの場合養育者（母親）との間に形成される」と定義されている。人格形成の土台を作るには、乳幼児期のさまざまな体験（スキンシップや声掛け、愛情を注ぐなどといったこと）が必要であり、そのような体験をせずに育った子どもは愛着障害が起きてしまうということが分った。</p> <p>第二章では、愛着と虐待などの関係について事例やグラフなどを参考にしつきながら述べている。いつの時代もなくなることのない児童虐待であるが、近年は増加の一途をたどっており、児童相談所における児童虐待相談対応数は平成10年から22年間で約60倍にもなっている。虐待だけでなく、ネグレクトなどといった行為は、子どもが成長し人格形成をする過程で子どもの心身に重大な影響を及ぼし、特に乳幼児期の頃からであると、愛情などを注いでもらわないまま育つことが当たり前になってしまい、人間関係を築くことが困難になってしまふだけでなく、将来自分の子どもができた時にどう愛情を注いでいけば良いのか分らず自分も子どもに同じことを繰り返してしまう可能性があるということが分った。</p> <p>第三章では、これから母親と子のかかわりについて述べている。子どもは、母親と触れ合う機会を多く作ることで愛着スタイルは安定していく、人格形成に良い影響をもたらすということがこれまで調べてきて分かった。また、虐待を受けた子どもがいる場合には、児童相談所に相談し、周りの大人達が母親の代わりに愛情をたくさん注ぎ込んでいくように早期に対応していくことで、子どもの心の傷も、将来に影響してくる人格も、時間はかかってしまうが育て直していくことができるのだ。自分の子どもを愛情を持って育てられない母親も、子育てができるようになるために周りの支えを借りていきながら心の回復をしていくことが大切ではないのだろうか。今回の研究を通じて、子ども達には母親（親）だけではなく、周りの人達の支えや助けも必要になっているということ、周りの理解と協力が子どもだけでなく、困難を抱えた母親にも必要であることを改めて実感することができた。</p>					

氏名	本田 美珠紀	学籍番号	J012051	ゼミNo.	9
----	--------	------	---------	-------	---

テーマ	幼児期における音楽体験のあり方
-----	-----------------

本研究の目的は、人間にとての音楽はどのような意味を持っているのか、音楽が人間に及ぼす影響作用について研究し、特に、幼児期における音楽体験のありかたを考察するものである。まず、音楽の歴史をたどり、歌と言語の区別がなかったこと、音楽が人間の生活や文化のあらゆる場面で必要不可欠なものであることが明らかとなった。次に、音楽が人間に及ぼす作用には、主に生理的作用、心理的作用、社会的作用の3つの作用があり、心拍数や血圧など自律神経やホルモン、気分や情動、モチベーション、集団意識に大きな影響を与えることが明らかとなった。次に、子どもにとて音楽は遊びであり、言葉や音楽、歌うこと、音を鳴らすことが未分化あることが明らかとなった。また、幼児期は、外界からの音の刺激を鋭敏に受け入れる時期であり、幼児期における音楽の必要性が高いこと、音楽的行動には道筋があり、順序どおりに現れてくることが明らかとなった。次に、実際の保育・幼児教育現場での音楽活動の事例をあげ、音楽の効果や作用を有効に取り入れた活動が実践されていることが明らかとなった。幼稚園教育要領を紐解き、保育・幼児教育現場で展開されている音楽活動は、子どもの豊かな感性や表現力、想像力を育むために欠かせないものであることが明らかとなった。また、平成元年の幼稚園教育要領改訂により、現場での音楽活動のとらえ方が大きく変わったこと、改訂以来、子どもの主体的な音楽表現に焦点を当てるような実践や研究が数多く進められているが、歌唱に関する研究に偏っているとの見解もあることが明らかとなった。次に、音楽活動や音楽指導のあり方を考えるため、いくつかの特徴的な指導法をあげた。様々な指導法があるがどの指導法も技術を高めるためのみではなく、感性や創造性、心を育むものもあること、保育・幼児教育現場で積極的に取り入れられているが、日本の音楽教育界には、外国模倣の悪習慣が強く残っており、新しい方法がまだ作り上げられていないという見解もある。また、音楽の扱われ方の問題についても指摘し、明らかにする。最後に、今後の幼児期における音楽体験のあり方について考察する。保育・幼児教育現場における音楽体験は、子どもにとての音楽との出会いの場であり、重要な意味を持つものであると考えられる。

氏名	田中 菜津美	学籍番号	J012033	ゼミNo.	10
テーマ	偏食について				
<p>子どもの養育でよく話題になることばに偏食がある。私が実習先の幼稚園での昼食風景を見たときに偏食をしている子どもがいた。偏食が原因で生活に支障が出るほど体調を壊すことがなければ、快適な食事時間という面から、子どもが楽しく食事をするならば偏食を否定できないと考えた。本論での偏食の定義は、好き嫌いをすることで栄養バランスが偏っているという考え方として進めていく。</p> <p>まず、偏食とは何なのかについて調べた。人間が好き嫌いをすることは普通である。しかし、アレルギーを別として食べ物の好き嫌いが極端で食べられる食品が限定されることを偏食と言う。その原因としては、家庭での食事環境が大きく影響していることがわかった。偏食を軽減させるためには、大人はゆっくりと時間をかけ、余裕を持って快適な食事時間を確保することが大切である。</p> <p>次に、食生活の変化とその弊害について調べた。近年食事の洋風化に伴い、日本人が肉類、乳製品類、脂質類を過剰に摂取している。このことが原因で従来とは異なった癌になる割合が増えている。食事の洋風化は、日本人の体格の向上に大きな影響を与えたが、健康と言う視点からは日本人には少なかった心臓病や大腸癌を増やすこととなった。我々日本人にとって日本食の基本となる和食が身体の健康を維持するには適しているだろう。</p> <p>偏食が個人の健康以外に社会に及ぼす影響について調べた。現在世界一の消費大国と言われているアメリカに対して、日本は食料廃棄量が世界一と言われている。そこでこの2国の事情を比べてみた。アメリカは、レストランが提供する食事量が多く、家庭で無計画な食料の大量買いがある消費につながる。日本は賞味期限に過敏すぎることが原因であった。この2国で廃棄される食品は現在貧しく食事が摂れない子どもたちをどれだけ救うことができるのだろうか。</p> <p>また、偏食を消極的に肯定すれば人間の生活面で食事は、栄養面でも精神面でも重要な位置づけである。会食することで、ストレスが軽減され、また食事マナーを身につける機会を増やすこともできる社会学習の一助となるであろう。さらに偏食を否定する立場で、現在、栄養バランスを保つために「1日30品目摂ろう」と言われている。しかし、30品目摂ったから健康でいられる根拠はなく、食品群の偏りは発癌のリスクを分散する意味で一般化していることがわかった。</p> <p>最後に、様々な視点から偏食について調べた結果、楽しく長い人生を選ぶか、癌等のリスクを負いながらも刹那的な人生を選ぶかは個々人に委ねられた人生に対する価値観への選択であると考える。現在の社会は刻一刻と変化する多様な社会の中にあり、偏食は個人のその時々に選択された価値観によるので、私は偏食を肯定も否定もしない。</p>					

氏名	山根 ちひろ	学籍番号	J012061	ゼミNo.	10
----	--------	------	---------	-------	----

テーマ	通常学級に在籍する発達障害児への援助 —これからの支援の在り方について考える—
-----	--

【研究背景と目的】

発達障害者支援法(2005.4)の施行に基づき、発達障害者への周囲の理解と援助の広まりを期待して、これまで様々な活動が取り組まれてきた。しかし発達障害に対する世間一般的な認知度は、未だ低いままである。現在の教育現場においても、具体的な支援体制は全ての教育現場では確立されておらず、教師たちはクラスに在籍する「気になる子ども」に対してどのように対応すれば良いのかと頭を悩ませているのが現状である。そこで本研究では発達障害に対する理解を深めた上で、その具体的な支援方法について検討することを目的とする。

【研究方法】

研究方法としては主に文献によるデータを収集し、自閉症スペクトラム、注意欠如多動性障害、学習障害といった狭義としての発達障害について各々の特性や歴史に触れて調べを進めた。そして集めた情報を基に今後の具体的な支援方法の在り方について検討していく。

【結果と考察】

発達障害と一概にいっても、その症状や程度の差は一人ひとり異なっており、それによって対応の仕方や、支援の方法も変容する。適切な支援を受けられず、周囲の理解が得られない環境で育った子どもは次第に自尊心を傷つけられ、物事全てに対して自信や意欲を無くしてしまう。それが酷くなると自傷行為や社会規範を逸脱した問題行動を引き起こすこともあるので、子どもの苦手や問題行動ばかりに目を向けて叱るのではなく、子どもの長所、特技を伸ばして自信をつけさせることが重要である。また、大和久(2006)が「困った子ども」は「困っている子ども」の表現を使い、教員は子どもの表面上の問題行為だけを見て叱るのではなく、その行動背景にまで目を向けると子どもの気持ちに気が付くことができると言っている。このことから子どもを中心に据えた視点での支援の在り方を考える必要がある。発達障害のある子ども達は我々に実に多くの情報を提供してくれている。彼らの問題行動と言われるほとんどの行動、あるいは臨床象は大人サイドに立てば困った行動として捉えられる。しかしながら、彼らの行動様式を大人への支援方略を考える情報要因として捉えなおす必要がある。

彼らの行動は実は大人あるいは支援する側の人間にとて支援を求めるヘルプコールであるし、彼らが必要としている支援のヒントであるともいえる。そのような視点に立ち、単に困った行動として封じ込めるのではなくそこから支援の方略を考え彼らの自立に向けた生活支援を計画することがたいせつである。

氏名	楠橋 奈都子	学籍番号	J012502	ゼミNo.	10
テーマ	時代に生きる障がい児・者 ~戦争と命の尊厳~				
<p>私は、太平洋戦争などの戦艦、戦闘機に興味があった。同時に小学生のころに作家として名を広めている乙武さんの「五体不満足」を目にしたとき、障がいについての興味が戦争と一緒に私の心の中に大きな場所を占め存在するようになった。さらに、従姉妹のひとりに知的障がいのある自閉症のお姉ちゃんがいる。私が幼児のころは障がいという見方ではなく年上のちょっと変わったお姉ちゃんとして、一緒に遊ぶことも多かった。年月を重ねるにつれ、ちょっと変わったお姉ちゃんから私とは何か違ったものを内面世界にもっている人へと認識が変わったのを覚えている。そのころ私が目する戦争を題材とした映画やテレビ、さらに本や小説を読んでいても障がいをもった人、子どもたちがエキストラとして出演しているものがなかった。確かに、傷痍軍人や戦争による被爆等で手足の欠損等の障がい者についての記述は散見できるが、先天的な障がい者についての記述や記事について少なくとも私の目に留まることはなかった。</p> <p>戦時中の生活は苦しく、食糧確保に多大な努力が必要な時代であり、そして社会衛生環境も平常時よりは厳しい状況であったと考えられる。そういう中で戦時中ということを根拠として、記録や文献に見つからないはずではなく、そして障がい児の出生率が下がるということはありえないであろうと思う。なぜなのだろうか、障がいをもった人たちがいなかつたのだろうかと短絡的に考えることもできるが出生率が変わることはありえない。そこで根拠となる過去資料や戦争体験者の話題を中心にして調べてみようと思った。戦時中の苦しい生活の中で彼らはどのような生活をしていたのか、などと興味の枠が広がりそれを調べ、障がい者たちの人権とその時々の社会的情勢の影響が知りたくなった。現在は戦後70年の年であり、戦争体験者が今まで言わなかつたことをについて彼ら個々人の口から語り部として話題を提供し始めている。今だから分かるようになったことをテレビや新聞などを通して調べていった。</p> <p>本来、社会福祉は社会的弱者に対して国等の公の組織機関が公的責任の基に彼らの生命維持を保障するのが普遍的・社会国家としての位置にあるはずである。国の社会経済の変動や対外的利害の関係する駆け引きの中で窮地に陥るとそのような普遍性が侵害されてきた歴史がある。世の常としてその犠牲になるのは社会的弱者がその犠牲となってきた。幼い子どもであったり、女性であったり、障がいのある人々であつた。国が大きく前進しようとするとき経済効率の足を引っ張り前進の負荷となる人々は排除され、捨てられてきた歴史がある。人類の普遍的な平和はそれぞれの国の平和が保たれてこそ集大成として可能になる世界平和であるはずである。今、世界は訳の分からぬ何か強い力で世界平和とは程遠い世界に強引に引き込まれている気がする。</p>					

氏名	土井愛由実	学籍番号	J012037	ゼミNo.	11					
テーマ	効果的なスポーツ指導法について									
この卒業論文では、スポーツ選手において効果的な指導法について明らかにすることを目的とする。										
<p>第1章では、現代におけるスポーツ界の指導とコーチングについて述べている。我が国のスポーツ界は体罰問題が重視されており、そこには指導者の個人的な感情や、間違った指導法が含まれている。指導者は先生であり他人に教えるという立場でならなければならない。また、指導者もコーチのやりすぎ、オーバーコーチングにも気をつけなければならない。選手の特徴や持ち味を生かす指導法を身につけることが重要である。</p>										
<p>第2章では、スポーツにおける選手と指導者の目標設定について述べている。選手と指導者の目標設定をすることが、良い指導法への一歩となる。選手は、自分自身がやる気ができる目標設定をする必要がある。指導者は、選手一人ひとりについて、そしてチームに対し細かい目標設定をする。また、指導者は選手が目標を達成するためにフォロー・アップしなければならない。叱るだけではなく、進歩を見つけ励ますことも大切である。</p>										
<p>第3章では、スポーツに求められる動機について述べている。選手が、やる気をだすためには選手自身の内発的な力も大切だが、その時の周りの状況、環境などで低下することもあるので、外発的な力の影響もあるといえる。選手の精神面を重視する教え方は、やる気を向上させるのに対し、否定したり突き放すような教え方はやる気の低下へつながる。指導する上で、選手との関わり方、お互いの信頼関係をつくりコミュニケーションを深めることが大切である。</p>										
<p>第4章では、より良い指導法のための方法について述べている。指導者は、指導者と選手一人ひとりとの間のコミュニケーション、すなわちスポーツコミュニケーションを意識する。スポーツ指導者のように、リーダーシップを発揮することを求められる人材には、コミュニケーション能力は必要不可欠である。それには、選手とともに指導者も成長し、指導者の経験や成長が、大きな力となってくるだろう。</p>										
<p>以上のことから、結果として、指導者がそれぞれ選手の個性や持ち味を伸ばし、それにあった指導をするのが効果的な指導法といえることが分かった。大切なのは、選手自身の目標ややる気を、指導者がどう導いていくのか。そして選手との信頼関係を築き、指導者が選手に対しての関わり方を改め、いかに選手を理解し、指導していくのかが大切であるといえる。</p>										

氏名	竹嶋 千遥	学籍番号	P012014	ゼミNo.	11					
テーマ	発達障害者への理解について ～ADHD と自閉症から考える～									
<p>私は、大学2年生の時に参加したインターンシップ研修で発達障害の子どもたちが集う施設に行った経験を通し、発達障害はそれぞれ症状が異なり生きていく上でハンデがあることを知った。成長するにつれてハンデも人それぞれ違い、居住環境や教育環境、周囲との関わり方によって変わっていくものだと考えることができた。そして、卒論研究では、自分が関わって興味を持った発達障害の中から自閉症とADHDに絞り特性やそれぞれの問題に焦点をあて参考文献を読み研究を進めていく。</p>										
<p>第1章は、発達障害について述べている。発達障害は、生まれつき脳の発達に異常をきたしていることで幼児の頃から症状が現れ成長過程に伴い、出来る事と出来ない事を理解し生きにくさを感じる障害であると考えられている。また、発達障害者支援法の制度や発達障害者支援センターの役割について焦点をあて書いた。</p>										
<p>第2章では、自閉症の問題と特徴について述べている。周囲の人とコミュニケーションが取れず言葉を使って表現することが難しい。こだわりの強さも増し学習面でも難しく場面に応じた行動がとれなくなり認知機能の部分において障害が表れパニック障害を起こす可能性があげられる。</p>										
<p>第3章では、ADHDの問題と特徴について述べている。7歳頃に症状が表れ、学童期では、興奮しやすく目立ちたがりで思ったことをすぐ行動に移したがる好奇心旺盛な性格をしているが周囲に誤解を招きやすい。また大人になるとストレスやうつ病等の合併症を引き起こす。</p>										
<p>第4章では、発達障害の捉え方について述べている。障害を抱えている人は、普段の生活を送るだけでも大変である。傍にいる人のサポートが約立つことも多く何かをやり遂げようとする姿勢と一緒に見守り、相手の気持ちを読みとり理解した上で行動することが大切な事でもあるだろう。</p>										
<p>発達障害は、社会全体で知られていても、細かい特性や理解の認知度が低く障害を持っているだけで生きにくさを感じ、苦しい思いをしている方も存在しているということに向き合わないといけない問題もある。障害を理解した上で、自分なりの克服の仕方を見つけ優れた分野を伸ばし弱点をフォローし苦手な部分は、一つの良い個性として理解を深めることが大切なことであると考えた。</p>										

氏名	能田 裕美子	学籍番号	P012018	ゼミNo.	11
テーマ	障がい児・者のきょうだいの現状と支援について				

はじめに

以前、放課後等デイサービス（以下デイサービス）でアルバイトをしたことがある。そのデイサービスでは、障がいのある子どもだけでなく、3人の「きょうだい」に会った。NHK 福祉ポータル「ハートネット TV」によると、「きょうだい」とは、自分の兄弟姉妹に病気や障がいのある人がいる健常の兄弟姉妹のことをいう。（「きょうだい児」とあらわされる場合もある。）そして、この「きょうだい」達と関わってから、これまであまり考えてこなかった「きょうだい」にも関心を持つようになった。そこで、本研究では、きょうだいへの支援はどのようにあるべきかを先行研究や書籍などを用いて分析し、どう行動したらよいのかについて考察する。

第1章 障がいのある人のきょうだいとは

まず、自分の兄弟姉妹に障がいのある人がいるということはどういうことか。ここでは、3つの事例をもとにきょうだいの実状について明確にしていった。

第2章 きょうだいへの心理的影響

ここでは、きょうだいの実状が心理的にどのような影響を及ぼすのか大瀧（2011）がまとめた否定的・肯定的影響をもとにみていった。

第3章 きょうだいの生活状況

ここでは、健常の兄弟姉妹同士と比較した三原（2003）の調査を参考にし、心理的影響はどのような場面で起きるのかみていった。

第4章 きょうだい支援の必要性

ここからは、きょうだいに対する支援について、どのように行動していくべき良いか、「自助グループ」、「親にできる支援」、「支援者にできること」の3つに分けて考察していった。

おわりに

本研究では、きょうだいの現状について分析し、その支援についてどのように行動したらよいのか考察した。より良いきょうだい支援を行うためには、きょうだいを支援する団体の増加に加え、親の支援を充実させることが結果としてきょうだい自身の支援にもつながってくるといえることが分かった。しかし、これまで多くのきょうだい研究でも述べられているように、すべてのきょうだいがつらい思いを抱えているとは限らない。よって、きょうだいにしっかりと目を向け、その子に合った支援をすることが大切だと考える。

氏名	八幡 樹里香	学籍番号	P012504	ゼミNo.	11
テーマ	高齢化の原因 ～高齢者の健康状態の変化について～				

はじめに

以前、実習にて、「高齢化は進んでいるが、昔と比べ元気な高齢者が増えた」と職員の方からお話を伺った。実際、身近な高齢者でも、退職後に趣味を楽しむ等、日々活動的に過ごされている方が多い。そこで、近年の高齢化が進むことにより高齢者の健康状態は昔と比べ、どのように変化してきたのか知りたいと思った。本研究では、高齢者の健康状態の変化について分析し、健康を保持するためには何が必要となるのかについて考察を行う。

第1章では、高齢化の推移と要因についてみていった。その中では、現代の高齢社会に至るまでの高齢者人口の推移とその要因を知ることができた。

第2章では、日本の平均寿命と健康寿命についてみていった。日本の平均寿命は男女共に年々、著しく伸びていることが明らかになっている。平均寿命が伸びていく一方で、健康な高齢者の状態を表す健康寿命はどのように変化してきたのかについてみてみたところ、平均寿命と並行して伸びていることが分かった。このことから、少なからず過去と比べて、健康な高齢者は増加していると考えることができる。

そこで、第3章では、健康な高齢者に必要なことは何なのかを考えるために、80代のF氏にインタビュー調査を行った。F氏の話を聞いていく中で、F氏には心と身体のバランスが整っているのではないかと感じた。このことから、どちらか片方が欠けてしまうと、心身共に健康な状態を保つことができないのではないかと考える。

第4章では、高齢者の心の健康についてみていった。その中では、高齢者の精神的な病気として多い老年期うつ病について、その要因と予防方法について考察を行った。予防方法としては、適度な運動をすることでストレス解消になることが分かった。このことから、健康な心を保つためには、健康な身体が大切であると考えることができる。

第5章では、高齢者の身体の健康についてみていった。身体の健康を保ち生活するためには、適度な運動が大切だということが分かった。また、自分の役割から生きがい等を見出し、明確な目標をもって生きることも重要だと考えられる。終わりに

以上の事から、今後も進んでいく超高齢社会に向けて、平均寿命・健康寿命は共に増え、健康な高齢者も増加していくと考えられる。高齢者が健康な状態を維持するためには、心と身体の健康をもとに生きていく上で個々の役割・目標を見つけ、気軽に運動ができるような環境が必要となってくるのではないかと考える。

氏名	岡本奈菜	学籍番号	J012007	ゼミNo.	12					
テーマ	保育／幼児教育の現場（段階）における音楽教育の在り方について									
本研究の問いは幼児が楽しく音楽に触れることができる方法を明らかにすることである。										
<p>筆者は幼い頃、鼓笛隊の活動をしていた。しかし、筆者は皆でタイミングを合わせて楽器を叩いたり、何度もやり直したりする練習が好きではなかった。筆者は友人の誘いを受け、小学5年生の時に金管バンド部に入部し、打楽器を担当することになった。上級生や下級生と一緒に練習する時間はとても楽しく、打楽器を演奏することがとても好きになった。このように、筆者の中には、音楽を嫌なものとして捉える時期、音楽を楽しいものとして捉える時期があった。日々、多くの場面で音・音楽と触れ合う子どもたちが楽しく音楽に方法は何かということを疑問に感じ、本研究に取り組むことにした。</p>										
<p>近年、幼稚園の発表会などで、子どもが演奏しているとは思えないような完成度の高い楽器演奏を見ることがある。筆者は、そのような演奏の映像を見ると、子どもたちが必死に鍵盤を見て演奏をしており、周りの音を聞くことや、音楽を楽しむということができていないように感じる。また、筆者が幼い頃の鼓笛隊の発表では、練習したタイミングに合わせるために必死で音を楽しむ余裕がなかった。しかし、吹奏楽や金管バンドでは周りの音を聴いて演奏していたため、自分で演奏をしながらも、音楽を楽しんでいたように感じる。実際に、そのように音楽を聴きながら演奏している時の方が楽しかった。</p>										
<p>研究結果から、筆者は幼児が楽しく音楽に触れるができる方法について、7点の大切なことがあると考える。①子どもたちの発想を否定しないこと。②大人側の望みが一方的に託されている結果でないこと。③楽器だけでなく、身近な物の音を楽しむこと。④楽しい気持ちをみんなで共有する空間があること。⑤安全管理をすること。⑥大人（保育者）の都合で子どもたちの音環境が変わらないこと。⑦保育者が音楽を楽しむこと。この7点である。</p>										
<p>音や音楽は日常のどこにでもあるものである。子どもたちがその音楽とたくさん触れ合うことができるよう保育者はさまざまな工夫が必要だと考える。保育室の環境を工夫したり、子どもたちの発見と一緒に喜んだりすることで、子どもたちはそれを応用して新しいものを作り出したりする。そのような子どもの向上心や達成感を援助していくことが大切である。子どもたちが楽しく音楽に触れられるようにするために、保育者自身も音楽を楽しみ、その楽しさを子どもたちに伝えることができる。音楽を楽しいと思うことができれば、子どもたちは周りにあるものにもさらに興味を持ち、たくさんの物に触れるきっかけにもなるだろう。</p>										

氏名	沖田夢摘	学籍番号	J012008	ゼミNo.	12
テーマ	絵本が魅せる食事の魅力				

人間の三大欲求は「睡眠欲」「性欲」「食欲」と言われている。生きていくうえで必要なこれらの欲求の中で筆者は特に「食欲」にもっとも興味を持っている。友人と食事をすることが好きで、仲間同士で食事をすると楽しい気持ちがこみ上げてくる。また、自分で新しい料理を考えることも好きで、休日には自分で考えた料理を作っている。何故これほど食べる事が好きになったのか考えてみると、小さい時から両親が買ってくれた食べ物が出てくる絵本の影響が大きいからだと思われる。

絵本の食事にはただイラストが描かれているのではなく子ども心を惹きつける力があるように筆者は感じている。そこで、本論文では食べ物が出る絵本を読んで考察し、その魅力について明らかにしていく。子どもの心を惹きつける魅力とはどういったものなのか。筆者が魅力を感じた食べ物がでる絵本で考察し、そこから子どもの心を惹きつける魅力とはどういったものなのか見つけていった。

その結果、11冊の絵本を通し、どの絵本にも「食べてみたい」「触りたい」「お手伝いしたい」「作ってみたい」といった好奇心を引き出す魅力があるとわかった。同時に「どんな味がするだろうか」「どんな食感がするだろうか」といった想像力を働かせ、子どもの想像が豊かになる力を育てる魅力がある。また、食べ物の出てくる絵本にはみんなで食事をする楽しさや食べるだけでなく、食事の一連の流れとは食べ終わった後の片付けまで済ませることが重要であるシーンが描かれている。さらに、独特なイラストと擬音を使うことにより絵本の食べ物をより一層おいしそうに見せ、食べ物が出てくる絵本には子ども心を惹きつける魅力があるのだと分かった。

以上のような絵本の魅力を活かせば、子どもの好き嫌いを減らす事や遊び食べや偏食が抑えられる食育の効果があるのではないか。また、食べることだけではなく、食事の音や味を楽しむ事や、食べた後の食材の利用法などは、子どもの想像力を豊かにし、子どもが食への興味と関心をより楽しく持つことにつながるだろう。さらに、絵本を通して子どもが片付けを自ら行う自主性が芽生えたりする可能性もある。絵本には食べることだけではなく子どもが成長していく上で大切な多くの魅力があると筆者は考える。

氏名	塩崎玲奈	学籍番号	J012020	ゼミNo.	12
----	------	------	---------	-------	----

テーマ	ディズニープリンセスからのメッセージ
-----	--------------------

本論文の目的は、プリンセス物語の様々なストーリーに基づいて、ディズニーのプリンセス物語が子どもに何を伝えたいのかを、名言や心に残るメッセージなどからそのメッセージ性を引き出し、考察していくことである。

この論文の背景は二つある。一つ目は、時代によってプリンセスの性格や行動が全く違っているといった変化に気付き興味が湧いたからである。二つ目は筆者自身、ディズニーが好きだから詳しく調べて知りたいからである。筆者は本研究で、現代の若者の特徴や名言も織り交ぜ、ディズニーのプリンセス物語が子どもに何を伝えたいのかを明らかにしていく。

第一章ではディズニーを代表するプリンセスのあらすじとプリンセスの特徴を明らかにした。シンデレラの特徴は、心優しく根気強い性格であり苦労の末、女としての幸せである結婚をしたのであった。アリエルの特徴は好奇心が人一倍あり、恋愛においても積極的であった。ラプンツェルの特徴は自由奔放で初めての恋愛にも物怖じせず最終的には結婚の道を選んだのであった。アナの特徴は自由奔放で失敗をしながらも心の強さで恋愛を乗り切ったのであった。エルサの特徴は女性として芯があり男に頼らず強気であった。

第二章ではディズニープリンセスの名言や心に残るメッセージを挙げ考察した。自分が迷い落ち込んでいるとき、ディズニープリンセス達のどの台詞も、背中を一押ししてくれるのである。その時の自分が置かれている状況によって、心に響く言葉は違ってくる。人はみな、人生悩んだり喜んだりしながら生きているが、そんな時に少しでも気持ちが楽になるディズニープリンセスの言葉の力は素敵である。

第三章では、昔のプリンセスと現代のプリンセスの違いや、現代の若者の特徴、女性進出などを考察した。かつての日本では、現実離れした生活や結婚が女の幸せで家庭に収まることが常識的な考えだったが、女性が恋愛に積極的でも良い、働いても良い、といった世の中に変化してきている。夢と魔法の王国を描くディズニー物語だが、現代の情勢を良く観察しているからこそ、次々に新しくつくられるディズニー映画は、女性の共感を呼びヒットし続けるのだろう。

ディズニープリンセスの物語は、子どもに何を伝えたいのか。それは、子どものうちや若いちは、冒険をして失敗をしても経験の糧となるから、この世界を好奇心いっぱいを目いっぱい楽しめと伝えているのだ。プリンセスのように華やかできれいな女性になって、現代の日本や世界を引っ張っていける強い女性になることを願っているのであろう。大人になってもう一度ディズニープリンセスの作品を見直せば、再び幼い頃の夢を心に甦らせることが出来るのだ。

氏名	田中麻衣	学籍番号	J012034	ゼミNo.	12
テーマ	保育における演劇の魅力 ～私の演劇実践の考察から～				

本論文の研究テーマは「保育における演劇の魅力～私の演劇実践の考察から～」である。

私は演劇部に所属している。そこで役者として舞台に立ったり、仲間と共に一つの舞台を作り上げたりすることで、演劇の魅力を知っていった。そこから表現力を身につけ人の前で話すことへの自信を得ることができた。そしてここで得たものは、保育にとても役立つのではないかと考えるようになった。また、今までの授業や実習を通して、保育者として子どもたちの前で話したり、絵本を読んだりする際に、演劇で培った表現力や舞台に立つ度胸は役に立つものだと実感した。子どもたちは保育者から読んでもらった絵本などから物語を知り、ごっこ遊びや劇遊びを展開していく。このように保育者を通して様々な演劇に触れたり、子ども自身が劇で遊んだりすることで、子どもたちの表現力や創造力を養えるのではないかと考え、保育における演劇の魅力はどのようなものであるかを研究テーマと定めた。

まずは先行研究として『幼稚園教育要領』を読み、演劇に関する項目をまとめていった。そして倉橋惣三や岡田陽、無藤隆らの文献を購読し、保育における演劇の魅力について調べる。そこから保育においての演劇の魅力は普段の遊びの中から得られるものであり、子どもたちが自らやりたいという主体性が大切なのだと考えることができた。

次に私が経験した演劇からその楽しさをまとめた。自身の演劇部での経験、子供たちと関わった経験、プロの考查を受けた経験を挙げてその魅力を考えた。そこから演劇の魅力とは人とのかかわりの中その時感じた思いを共有することで得られるものだと考える。

最後に保育園や幼稚園での体験の事例を挙げて保育における演劇の魅力を考える。筆者自身の幼稚園での劇作りの体験や実習での経験、保育園の演劇ワークショップの体験から、子どもたちが表現することを楽しむためには一人ひとりの姿を受けとめて、安心して表現することの出来るよう環境を構成し、保育者が支援してくれることが必要なのだと考えた。

保育における演劇的な活動として、表現力や協同性が育つことも大切だ。しかしごっこ遊びで自分を表現しそれが受け入れられること、認められること、発表会の劇作りで仲間と協力して大きな劇を作り自分の役割を発揮出来ること、いつもと違う非日常を楽しむことなど、子どもが演劇を楽しむことこそがその魅力であると考える。そのように保育者が子どもに演劇の楽しさを伝え、様々なことを経験させることができが保育における演劇的活動の魅力の一つだと私は考えた。そのためにも子どもたちに様々なことを経験できる環境を提供することが保育者の役割である。

氏名	橋田美沙	学籍番号	J012044	ゼミNo.	12					
テーマ	絵本に出てくる料理を再現してみて～その楽しさと工夫～									
本論文の目的は、絵本に出てくる料理を実際に作ってみてその楽しさを明らかにし、絵本を通して子どもたちの食への関心をどのように持つてもらえるかを考察することである。										
<p>子どもが見る絵本には「心の痛み」や「人の思いやりや暖かさ」を知るためのヒントがつまっている。また絵本には、空を飛んだり、見た事もない綺麗なもの、美味しいなものなどの出会いが数多くある。絵本を見て初めて知る事があり、子どもは絵本を通して世界を知る。筆者自身、絵本を見て学んだ事、感動した事、あるいは怖かった事など絵本の物語によって感じる事がある。またその感じ方は人それぞれであり、絵本の奥深さを感じさせられる。</p>										
<p>そこで筆者は、絵本に出てくる美味しい料理を再現してみることにした。実際に料理を再現することによって、絵本で見た時の料理の美味しさを実際に自分の舌で感じ取ることが出来る。主人公達の料理を作る努力や工夫など絵本を見るだけではわからない事を実体験してみようと思った。そこから子どもたちに伝えられる何かがあるのではないかと考える。</p>										
<p>絵本には、様々な物が出てくるが、私が料理を選んだ理由が二つある。一つ目は、偏食がみられる子どもに食への関心を高めてもらいたいからである。二つ目は、私自身がとても料理が好きだからである。</p>										
<p>第一章では、子どもの食問題について取り上げ、どうすれば子どもに食への興味が湧くか考えた。第二章では、『絵本からうまれたおいしいレシピ』のレシピで実際に料理をし、考察をした。第三章では先行研究の批判から、『11ぴきのねことあほうどり』を先行研究としてでてくる料理のオリジナルレシピを考え同じゼミの学生3人に子ども役になってもらい、絵本にでてくる料理を実際に作ってみて、その楽しさを明らかにした。</p>										
<p>筆者のオリジナルレシピのコロッケを、実際に作って食べた3人の感想の共通点は、みんなでコロッケを作ったからこそ楽しかった、自分がねこの気持ちになれたということだった。</p>										
<p>筆者はこの研究を通して、絵本にでてくる料理を自分で考えたレシピで再現する楽しさを知った。そこには家庭の味を大切にしたり、友達と一緒につくる喜びがあった。筆者は4月から保育士として働くにあたり、実際に子どもと一緒に料理を作る際には、この研究を活かして、子どもに食への興味を楽しく持つてもらえるようにしていきたいと思う。</p>										

氏名	松岡夏希	学籍番号	J012053	ゼミNo.	12					
テーマ	子どもの文字習得における保育者の配慮や環境構成									
<p>私たちは日々の生活の中で、当たり前にことばや文字を活用している。自分がどのようにして読み書きを身につけてきたのか覚えていないこともあるだろう。ことばや文字は、生きていく中で自然に習得していくものだと思っている人もいるのではないか。自分の気持ちや意見を相手に伝えるには、ことばや文字が必ず必要であり、相手の気持ちや意見を知るには、やはりその手段となることばや文字が必要である。それは、日本では子どもが読み書きができるようになるための「環境」を大人が周到に用意しているからではないかと筆者は考えた。</p>										
<p>本論文の目的は、大人が子どもの生活の場にどのような作戦を立てて文字環境を配置しているのかを明らかにして行くことである。研究方法としては、家庭や保育所等でのことばや文字環境について考察すると共に、子どものことばや文字の獲得についての過程や個人差について調べていく。</p>										
<p>本論文の第一章では家庭において大人がどのように文字環境をつくっているのかについてあきらかにした。第二章では先行研究により、保育者がどのような方法で文字に興味・関心を持てるようになっているのかをあきらかにした。第三章では先行研究の事例を考察した。第四章では筆者が実習で観察した保育所等の集団において保育者がどのように文字環境をつくっていたかを考察した。そして第四章では現代の日本における知育玩具についてどのような状況であるのかを調べた。</p>										
<p>子どもにとって文字とは、生活や遊びと直接結びつく便利で楽しい道具であると筆者は考える。文字は、生活を便利にしたり、遊びを広げ、子どもの世界を広げて行く。保育者は文字の便利さや楽しさ、面白さを実感できるような環境を構成することが大切である。文字の習得が喜びとなるような出会いを、一人ひとりの成長の過程に用意することが保育者の役割なのである。子どもの「覚えたい！覚えよう！」と興味を持てるよう遊びを通して導いていく。保育者は遊びを通して文字への興味や関心を高めていくように、環境を整え、一人ひとりの子どもの育ちに応じた支援が必要であり、こういった積み重ねが、文字の興味や関心・習得へと繋がっていくのである。</p>										

氏名	下山成美	学籍番号	J012021	ゼミNo.	13
テーマ	小1プロブレムの原因と対策				

第1章 はじめに

保育には、「設定保育」と「自由保育」という保育の違いがある。自由保育の場合、「小1プロブレム」という問題を起こしやすいと言われている。「小1プロブレム」とは、「小学校に入学したばかりの1年生が授業中に私語や立ち歩きといった自己中心的な行動をとることで学級が長期間機能しない状況」を指す。では、この問題を解決するために、幼保小連携を行っている幼稚園・保育園はあるのか、いつどのように行われているのか、疑問を持つようになった。

第2章 小1プロブレムの実態と取り組み

小1プロブレムの実態には、授業に集中できず教師の話を聞くことが困難であり、さらに学校生活の面では、促されないと出来ないということがわかった。その原因として、自由保育が自由な雰囲気と適当な環境のなかで、子どもの自己発揮と自己充実が最もよくなされるような遊びが主たる活動となる保育であることから、子どもたちが集団の中で勉強する小学校の方法に対応しきれないからだと考えられる。それを少なくする取り組みとして、小学校と幼稚園・保育園の子ども同士、教員同士の交流がなされている。

第3章 幼稚園・保育園と小学校の理解・指導方法

幼稚園・保育園は遊びを中心とした活動で、小学校は教科を中心とした学習であり、異なった指導方法がなされている。小1プロブレムの対策として、幼稚園・保育園は、小学校を意識して指導し、小学校は幼稚園・保育園を意識して指導を行っていくべきである。相互理解が必要であることがわかった。

第4章 幼保小連携の問題点と対策について

しかし、幼保小連携には問題があると言われている。一つ目の問題は、いまだ幼保小連携に関わる活動が進んでいない現状があるということ、二つ目の問題は、小学校が連携の捉え方を幼稚園、保育園の独自性や文化を否定せずに意識化できているか、ということである。その対策として、幼稚園・保育園側の「お兄ちゃん先生・お姉ちゃん先生」、小学校側の「サポーターによる支援」の例がある。小学生が園児と触れ合うことによって小学生は自立ができ、自信に繋がることがわかった。サポーターの支援は環境の変化に戸惑う児童にとって学校に馴染めることができ効果的であった。

第5章 おわりに

小1プロブレムの対策を1年生に行って、小1プロブレムを防いだとしてもまた、「プロブレム」が生じることがある。小1プロブレムは、1年生だけを対象に対策して回避すればよいわけではなく、1年生で行った対策の効果を2年生以降でも効果的に持続させるための配慮を考える必要があるだろう。

氏名	田中 玖季	学籍番号	J012032	ゼミNo.	13
テーマ	子どものつぶやき ～小さな声に耳を傾けて～				

第1章 はじめに

幼稚園実習で子どものふとしたつぶやきにはっと驚かされたり、面白いなとクスッと笑ったりすることがあった。今回の研究は、その何気ない「子どものつぶやき」における笑いの誘因を明らかにすることである。調査対象年齢は、言語発達が一番盛んな3歳児、4歳児に限定し、そして筆者が幼稚園実習の際、採集した150例のつぶやきを分類していく。また、つぶやきの対象を探る事から、子どもが関心を寄せているものについて明らかにする。

第2章 子どもの育ちについて

「つぶやき」が起こる原因は、子どもは自分の知っている限られた語彙の中で、世の中を自分なりに表現しようとするところから起こると考えられる。3歳ぐらいになると、自分である程度文章を構成して、話が出来るようになり、話し言葉が完成する。4歳ぐらいになると、話すことに興味が高まり、一時的に非常におしゃべりになる期間があるため、つぶやきが多くなる。また、自分をはっきり意識し始め、自分と他人との関係に気づき始める時期だからこそ、つぶやきが生まれるのである。

第3章 つぶやきにおける笑いの分析

米田（2003）は「子どものつぶやきにおける笑いは「ことば遊び」「比喩」「理屈」の3つに分類できる」と述べている。米田氏の分類方法に従って、筆者自らが採集したつぶやきを分類すると「理屈」（43.33%）が一番多く占めていた。

第4章 つぶやきの対象について

つぶやきの対象としては、「自己」「家族」「先生」「友達」「動物」「植物」「食べ物」「物」「自然現象」の9項目に分類することが出来た。その中で一番多いのが「自己」（19.83%）であり、その次に「先生」（14.03%）「友達」（43.33%）が多く占めていた。年齢が上がるにつれて、つぶやきの対象が「自己」のことから「先生」「友達」に関心が向けられ、それは、周囲の人との関係も出来上がってきていることの表れとみる事ができる。

第5章 おわりに

子どものつぶやきは、今までの生活の中で自分自身が体験した事がすべて言葉になる。何気なくつぶやいた言葉も非意図的に「イメージ」と「言葉」を関連させている。限られた語彙の中で、自分なりに表現していることに、それぞれの面白さや笑いの誘因がある。また、毎日を過ごす中で、子どもとその周りとの関係性の広がりが見えたことにより、子どものつぶやきの対象が変化していくことは、人間の発達過程とも大いに関わっていることが分かる。

参考文献 「子どものつぶやき」における笑いについての一考察 （2003、米田恵子、笑い学研究 10）

氏名	堀川麗香	学籍番号	J012050	ゼミNo.	13
テーマ	ディズニーリゾートの人材教育は世界で共通するのか				

第一章 研究の動機と目的について

東京ディズニーリゾートのキャストの接客に感動したので、人材教育について研究しようと考えた。研究の目的と方法は、ディズニーリゾートの人材教育方法とその人材教育は世界のディズニーリゾートで共通するのかについて文献をもとに考察する。

第二章 ディズニーリゾートとは

ウォルト・ディズニーという人が作り上げた夢いっぱいのテーマパークである。そして15年の月日を経て故郷であるアメリカのカリフォルニア州に設立したディズニーリゾートはテーマパークと関連ホテルやショッピング施設を合わせた施設群を指す。世界中で存在するディズニーリゾートは、フロリダ・カリフォルニア・東京・パリ・香港・上海の6箇所である。

第三章 若手社員の人材教育について

若手社員が育たない理由に、ゆとり世代やゆとり教育を受けてきたからという理由があるが、上司としてどういう心で後輩に接していくべきなのか、上司が考え直す必要がある。ディズニーの人材教育は、ディズニーランドでは ES(従業員満足度)と CS(顧客満足度)を意識しており、ES→CS→会社の成長を考えながらアルバイトや社員に教育を行っている。そして、ES も CS も備わってたくさんのゲストからの期待があることから会社も成長できているといえる。ディズニーリゾートの人材教育の共通点の一つに、キャストはウォルトが作り上げたこの夢の国についてしっかり考え仕事を誇りを持って働き、お客様を大切に想っている点がある。そしてキャストは「ディズニーリゾートの存在意義」を伝え続けていることが、世界のディズニーリゾートの人材教育に基本的に共通しているといえることである。しかし人材教育の具体的方法は今回の研究ではまだ明らかにできていない。

第四章 まとめと課題

ディズニーリゾートのスタッフは、先輩や上司の背中を見て憧れを持ち、仕事に対する意欲が湧いてくる。そして、ディズニーリゾートの存在意義を伝え続けている。このように上司や先輩が見本となって後輩たちに指導して行くことが、世界のディズニーリゾートで共通しており、日本の社会においても人材教育の有効な方法の一つではないかと考える。その具体的な教育方法は、今後研究していきたい。また、最後に、日本は、会社で働く従業員の大切さや重要さを理解し、ブラックバイトの問題や雇用対策について、もっと深く考えなければならない。

氏名	森岡 友紀	学籍番号	J012058	ゼミNo.	13					
テーマ	幼児の音楽教育の歴史 —保育現場におけるピアノの役割—									
1. はじめに										
<p>子どもたちは、保育現場で、歌ったり、楽器遊びをしたりして音楽にたくさん触れている。保育現場に音楽が取り入れられるようになった時代、楽器にピアノを使用する理由について疑問が出た。そこで、音楽教育の歴史を研究するとともに、ピアノの保育現場への導入時期と現在のピアノの役割を明らかにしたいと考える。</p>										
2. 日本における音楽教育の歴史										
<p>音楽教育にとって重要な時代は、明治維新以後と大正時代である。初めは音楽を教える教師さえおらず、また、どのように子どもたちに音楽を教育すればよいのかも分からなかった。そして、階級の差も大きく庶民の間に西洋音楽は、なかなか浸透しなかった。しかし、音楽教育が大切だと感じていた伊沢修二がアメリカ人のメーソンについて音楽を学んでから日本の音楽教育は変化した。音楽教育についての決まりや『幼稚園唱歌集』などが出来、庶民の間でも音楽教育に関心が持たれるようになった。そして、大正時代に行われた、鈴木三重吉によって創刊された「赤い鳥」は童謡運動であり、それは当時の子どもたち、そして現代の子どもたちにも大きく関係する運動となった。しかし、昭和 16 年 (1941) 頃の音楽教育は、空襲に備えた音感訓練へと変わってしまった。その後、国のために行われていた音楽から、唱歌教材も見直され、現在の音楽教育へと近づいてきたのである。</p>										
3. 幼児教育（保育現場）とピアノの繋がり										
<p>ピアノが導入されたのは、明治 9 年 (1876) 東京女子師範学校付属幼稚園を開園したときである。しかし、この時ピアノが弾けたのはドイツ人の松野クララだけであった。最初は、今のように歌の伴奏ではなく、保育者の歌う唱歌に楽器が調子を合わせる程度で、音程にはあまり重点は置かれていなかった。しかし、その後、メーソンや伊澤修二を中心とした音楽取調掛の唱歌教育で、音程をとる伴奏楽器が必要だと考えられた。『幼稚園唱歌集』の緒言にも、そのように書かれている。</p>										
4. まとめ										
<p>ピアノは、明治初期に唱歌教育と連動して保育現場に取り入れられた。そして、ピアノを弾くことによって、子どもたちは、音程やリズムを理解し、唱和することの楽しさを味わうことができる。よって、現在の保育現場での音楽活動を支えるピアノの役割は大きいと言える。</p>										

氏名	豊島 麻里	学籍番号	J012503	ゼミNo.	13					
テーマ	学生が求める教師像について									
1. はじめに										
<p>筆者は、松山東雲女子大学に編入するまでは、幼稚園教諭として4年間、私立幼稚園に勤務していた。人に「教える」ということと人から「教わる」ということの両方を経験することで、様々な教え方や流れがあることに気づき、学生を理解することの必要性を「学生が求める教師像」という点から研究を進めることにした。</p>										
2. 研究の目的と研究方法										
<p>本研究では、教わる側が教師に求めるものや教師が学生を惹きつける魅力とは何かを明らかにすることを目的としている。研究方法は、主に松山東雲女子大学の子ども専攻と心理福祉専攻の1年～4年生、各学年10名ずつにアンケートを依頼し、現状を調べることにした。アンケートの項目は、以下の通りである。「I. 松山東雲女子大学の授業について」「II. 松山東雲女子大学の先生について」「III. 松山東雲女子大学生の考える理想の大学について」「IV. 松山東雲女子大学にとっての大学進学とは」</p>										
3. 結論										
<p>アンケートを実施した結果、明らかになった本学の学生が求める教師像は、以下の通りである。子ども専攻では、①授業内容が面白い先生（28名）②話を聞いてくれる先生（26名）③自分が困っている時に助けてくれる先生（24名）の結果となった。心理福祉専攻では、①授業内容が面白い先生（31名）②話を聞いてくれる先生（25名）③明るい先生（19名）の結果となった。学年では違いが見られなかったが、専攻別で見たときに求める教師像に違いが見られた。これは、大学への進学理由がさまざまであることや専攻が違えば学ぶ教科も変わることで、求める教師像も変化すると言える。だが、教わる側は、授業内容の充実を求め、授業外でも進路や学生生活についての自分の悩みを相談できる教師を求めていることが分かった。同時に、教師に多くの事を学生が求めすぎていることも分かった。</p>										
4. 今後の課題										
<p>アンケートを実施する時期や、回答者数を増やすことによって、新たな結果が出てくる可能性もある。しかし、大学は自ら学びたいという意識が求められる場所であるため、学生が教師から学ぶためには、自ら動き、習得しなければならないという事をどのように学生に伝えていくべきなのか今後それを検討していきたい。</p>										

氏名	北 明日香	学籍番号	P012006	ゼミNo.	13					
テーマ	流行はどのように生まれるのか									
小さいころからオシャレが好きで、ファッショントレンドができるまで										
流行(ファッショントレンド)は2年前から計画されており、色や繊維・素材を順番を決め、販売者が半年ごとのトレンドに向けて準備する。そして、雑誌に新しいトレンドが掲載されて、消費者に届く。2年もかかって手に届くということは、トレンドを作るのは簡単なことではないし、大変ということである。										
ファッショントレンドを作る上で重要なのがSPAモデルという企画、デザイン、製造、小売まで全て自社で行うことである。これがあることによって売れ行きがわかりやすく、ファッショントレンド業界にとっては、メリットである。このSPAモデルは世界的に有名なブランドが使っている。売れ行きを見て販売し続けるものもあれば、店舗からなくす場合もある。そうすることで、売れ行きがわかりやすくなるということである。										
2. ファッショントレンドについて										
数年前はファッショントレンドがいてそれを真似るというのが主だったが、今はネットの普及によりSNSで芸能人がコーディネートを掲載するなど、自分と系統が違った人でも、服装は真似ることができるとして誰がファッショントレンドのモデルかがわかりやすくなっている。オリジナリティでいうと、今ファッショントレンドとして上位にいるのは、きやりーぱみゅぱみゅである。独特だが、自分のオリジナリティを大切にしているため若者からの支持が高い。										
3. 若者のファッショントレンドについて										
現代の若者は自分に似合う洋服を探すには大きなイベントや雑誌からインターネット情報を吸収してオシャレを楽しんでいる。また、女性モデルが着こなしている洋服も様々な洋服をTPOに合わせて着こなしているため、真似しやすくなっている。数年前は、派手なメイクに派手な服装をした女性もいた。しかし、可愛いやかっこいいでもない新しいファッショントレンドスタイルが出てきて女性がオシャレをする幅が広がり服飾雑貨にもお金をかける女性も増えた。時代と共にファッショントレンドもどんどん変化して新しい流行が生まれてそれが流行っていくものということである。										

氏名	池川 舞	学籍番号	P012005	ゼミNo.	14					
テーマ	地域包括ケアシステムからみた地域福祉の取り組み									
はじめに										
<p>このテーマを選択したのは、3年生の時に体験したソーシャルワーク実習がきっかけである。実習を行う前までは、地域福祉についてあまり興味を持っていただけではなかった。しかし、実習を通してスタッフや各専門職同士の連携だけでなく、地域住民の理解や協力がとても大切であるということを実際に目にし、強い印象として残っている。このことがきっかけで、地域福祉について興味を持つようになった。</p>										
<h3>I 地域包括ケアシステムができる背景及び推移</h3> <p>地域包括ケアシステムに基づく考え方は以前からいわれていた。しかし、本格的にこの考えが進められるようになったのは近年のことであり、取り組みが進められるまでに時間がかかっている。そこで、地域包括ケアシステムが誕生することになった背景や推移を年代ごとにまとめた。その中で、現在の高齢化問題である「2015問題」「2025年問題」についても取り上げている。</p>										
<h3>II 地域包括ケアシステムについて</h3> <p>「地域包括ケアシステムがどのようなものであるか」ということを中心に、地域包括ケアシステムの仕組みに焦点を当てている。その中で、5つの視点すなわち「介護」「医療」「予防」「住まい」「生活支援」といった考え方や構成要素、また「自助」「互助」「共助」「公助」に基づいた考え方から地域包括ケアシステムについてまとめた。</p>										
<h3>III 松山市における地域包括ケアシステムについて</h3> <p>IIでまとめた地域包括ケアシステムについて松山市で行われている取り組みについてまとめている。その中で、松山市北条地区、松山市小野地区、松山市城北地区(和気、潮見、堀江、久枝)の3つの地区の事例を基にし、地域包括ケアシステムの取り組みを述べている。</p>										
<h3>IV まとめ</h3> <p>本研究によって地域包括ケアシステムについて理解を深めることができた。また、自分の住む松山市の地域包括ケアシステムの取り組みがどのようなものか事例を調べまとめていくことによって明らかになった。その反面、地域包括ケアシステムという取り組みが曖昧であることも明らかとなり、人々から地域包括ケアシステムは理解されにくいのではないかと感じた。</p>										
<h3>おわりに</h3> <p>今後は地域包括ケアシステムが構築され、地域で大きな役割を果たしていく過程を見守っていきたいと考えている。</p>										

氏名	升田 友子	学籍番号	P012022	ゼミNo.	14
テーマ	障害者の就労支援について				

はじめに

私は障害者施設でソーシャルワーク実習を体験した。そこで、普段は意識することの少ない障害者の生活の実態を学んだ。

実習を体験する中で衝撃的だったことは、賃金についてであった。就労支援 B 型では、最低賃金よりも低い賃金が支払われる。何時間も一生懸命に働いても、わずかな賃金しか得られないことに疑問を抱いた。それと共に、障害者を取り巻く実状や制度について関心を持った。

第1章 障害と障害者の定義

障害についての国際的な定義(ICF)と障害者についての日本の定義をまとめた。ICF は障害者の定義はできないが障害の種類と程度を測定することができる。また、画期的な面は、人のプラスの部分に注目していることであった。これは、障害者のみならず人間全てに当てはめて見ることができるのも革新的である。

第2章 就労支援について

我が国における就労支援の成り立ちをまとめた。その背景には戦争が深く関わっていたことが分かった。

また、現代における就労支援の対象者数や就労支援の内容についてまとめた。我が国の障害者総数は約 744 万人である。決して少ないとは言い切れない人数の障害者が暮らしている。

総括すると、就労支援は 3 種類あり、それぞれで大幅な賃金格差があることが問題となっている。これらの問題を是正するために、工賃向上計画が作成された。

障害者の就労について、政府は「福祉的就労」から「一般就労」への移行を促進する改革を行うとしている。

また、日本政府は国連の障害者権利条約を 2014(平成 26)年 1 月に批准した。第 27 条には「…あらゆる形態の雇用にかかる全ての事項に関して障害を理由とする差別を禁止…合理的配慮が障害のある人に提供されること…」とある。このように政府は国際的な概念を取り入れ、これまでの利用者のニーズを充足させようとしている。

まとめ

就労に賃金は非常に重要な要素であるが、やりがいを持って取り組むことも大切であると思う。賃金とやりがいを得ることができてこそ真の労働といえるのではないだろうか。ディーセントワーク(働きがいのある人間らしい仕事)の重要性が叫ばれる昨今、障害者にも平等にこれを味わってもらえる社会の実現を願いたい。

氏名	村口 恵子	学籍番号	P012025	ゼミNo.	14
----	-------	------	---------	-------	----

テーマ	孤独死から高齢社会を考える
-----	---------------

はじめに

現在、「団塊の世代」が65歳以上の前期高齢者となっており、10年後の2025年には75歳以上の後期高齢者となる。高齢者人口が増加することによって、高齢者の夫婦世帯や単独世帯が増加し、高齢者の孤独死などが多くなる。そこで、特に深刻な一人暮らし高齢者の孤独死の状況について捉え、その背景や課題を分析する。

第1章 高齢者人口の増加

後期高齢者人口が増え続け、高齢者の世帯数にも大きな変化がみられるについて分析した。その中で65歳以上の単独世帯と夫婦のみ世帯を比べると単独世帯の高齢者が増加していることがわかった。また、65歳以上の単独世帯が増加するにつれて、家族や地域社会との日常的な交流が乏しくなり、身近な人付き合いが希薄となり近隣から孤立し、次第に地域社会の中で見えない存在となってしまう。このことで社会的排除となりかねない状況に置かれ、最悪孤独死に繋がる恐れがあることを述べている。

第2章 孤独死

孤独死の定義や年間孤独死者推移、孤独死の原因とされる単独世帯の増加、家族・地域のつながりの希薄化、貧困、格差などについて述べている。年間死者数約125万人のうち、約3万人が孤独死である。中でも、65歳以上の男性の孤独死が女性より年々増加しており、女性と比べて男性が孤立しやすい状況にあることがわかった。

第3章 孤立・孤独を防ぐために

孤立・孤独を防ぐために見守りネットワークや介護保険サービス、生きがいについて考察した。団塊の世代は、健康維持や介護予防、社会参加、生涯学習などに対する意欲・意識が高く、自ら積極的に取り組んでいく人が多い。ボランティア等の社会参加活動や生涯学習等に熱心に取り組んでいる高齢者が増加している。

まとめ

高齢者が地域社会の中で孤立しないためには、日常的に話しが出来る人がいることや、日常生活の中で友人や知り合いと集まることができる場所が必要であると感じた。孤立化の誘因が確認される高齢者については、緩やかな見守りを実施しながら、コミュニティサポートなどで高齢者の外出機会を増やすことも重要だ。地域や社会全体で高齢者が安心・安全に生活をできるよう見守り続けなければならない。

氏名	山本 千晶	学籍番号	P012026	ゼミNo.	14					
テーマ	障害児をもつ母親の障害に対する受容過程									
はじめに										
障害者支援について考えた時、障害者自身とその家族の人生において最も混乱や不安を抱え、支援を必要と感じる時期は出生時または生後における発見時にあるのではないかと考えた。そこで、その時期における母親の障害に対する”受容”と母子への支援過程に焦点をあてて考察することにした。										
<p>1章 障害についての概要</p> <p>障害の概念及び種類の学びとして知的・発達の分類分けと特徴をあげ、発達障害と知的障害の違いや自閉症との関係性、個々に持つ能力の違いなどについてまとめた。種別に理解することで療育方法の考え方やコミュニケーションの工夫をすることができる。</p>										
<p>2章 障害児を持つ母親の受容過程</p> <p>生涯を共にする家族にとって大きな不安や負担を抱えながら障害を受容していくことは容易なことではなく、様々な感情の葛藤が繰り返されるため、受容に至るまでの心理的な部分に着目することが必要である。障害児を持つ母親の受容に関する先行研究を基に、発達の節目に悲哀を感じる慢性的悲哀説と、受容までのゴールに向けて段階を踏む段階説の二つから心理的変化の過程を学び、障害に対する複雑な心理状態を理解することで個々の支援に繋げていけることを学んだ。また一方、早期療育による早期発見は必要性を感じる半面、告知の曖昧さや、自閉症などの低年齢での判断が難しい障害に対する早期振り分けには問題があり、障害の告知について今一度見直す必要性を感じた。自閉症のように低年齢であればあるほど症状が明確でない障害においては、早期振り分けについて慎重である必要がある。</p>										
<p>3章 障害児福祉の現状と早期発見</p> <p>福祉の現状と、社会的・教育的側面からどのような施策があるのかについてまとめた。障害を抱える児童は日常生活において制約を受けていることが多いため、それらの制約をできる限り軽減し、社会への適応、または障害のない児童と同様の生活が送れるよう支援者は導かねばならない。そのためには、地域社会や教育現場の施策・サービスの理解と、個々に合わせた活用が必要であり、利用者(または家族)にとって必要な知識として提供することが大切であると感じた。</p>										
<p>まとめ</p> <p>この卒論を作成していくなかで、これまで障害を抱える当事者本人に視点を向けることが多かったが、それをその母親(または家族)に視点を変えることで受容に至るまでの苦難や葛藤に気がつくことができた。当事者への支援も勿論大切だが、それを支える家族が抱えている問題を知り、まずは理解することが必要である。</p>										

氏名	伊藤 ゆりか	学籍番号	J012003	ゼミNo.	15					
テーマ	木で作るおもちゃ～ままごとキッチン～									
<p>筆者はものを作ることが好きで、オリジナル性や自分が作品に現れることを大事にしている。「3段ボックスで作るままごとキッチン」に保育実習で出会い、身の回りにあるもののおもしろい使い方、工夫の仕方に心打たれた。これをヒントに木で作るままごとキッチンを制作することにした。子どもの育ちに木のおもちゃの存在がどのように結びつくのか。自分でものを作って遊ぶという経験に結びつけるにはどうしたらよいのか考察したい。</p>										
<p>ホームセンターへと足を運び、ままごとキッチンの素材として、触れて軽くて丈夫な木を選んだ。見た目も可愛く、ままごとキッチンの機能に加え、家具としての機能も兼ね備えるキッチンを目指した。木を切ることや釘打ちに自信があったのだが、制作が進むにつれて木を真っ直ぐに切ること・釘を真っ直ぐ打つことが出来ていないことに気付いた。先生に相談をしてアドバイスをいただき、真っ直ぐに切ったり打ったりする術を学んだ。ちょっとした下準備を行うことで、作業が思い通りにかつスムーズに進むことが分かった。</p>										
<p>筆者の作品を保育現場へ導入すると仮定すると、子どもは木のおもちゃとプラスチックのおもちゃを比較して遊んでみたり、自分も木で作るおもちゃを制作してみたいと思ったりするだろう。幼稚園教育要領(2008)の「環境」の記述に「(自然に触ることで)幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われる」とあることからも分かる。子どもと一緒に制作を想定したとき、のこぎりや金槌を使うことの補助ばかりが「支援」ではない。この支援に加え、子ども自身が「自分で作った」という感情の育ちも見込んだ「待つこと」を含む支援もあるだろう。子どもだから出来ないと割り切るのではなく、子どもの可能性を信じて「待つ」というのも保育の現場で大切な教育ではないだろうか。</p>										
<p>そして、もの作りが好きな筆者は、好きなことだから作業も楽しくスムーズに進むと考えていた。しかし、実際に制作をしてみて好きというだけでは物事が進まないということもあるのだと実感した。最初は楽しいという感情が湧いてこず、作業工程も分からぬまま先生に頼りっぱなしであった。しかし、思い描いていたものが形になってくると次第に楽しいという感情が芽生え、自分の力で作業工程も考えて行動できるようになった。こうして制作が軌道に乗ってくると元々ある好きという感情が盛り上がり、自分なりのこだわりや自分という色が作品に現れてくるのが実感出来た。この現れこそが最初はひとりで出来なかつたことが支援や経験・知識を身に付けることによって、徐々に自主的な働きをしたいという自我の育ち、欲求の現れではないか。そうした心の変化や育ちが子どもたちの大きな自信へと結びつくだろう。</p>										

氏名	内山和香 楠本空海	学籍番号	J012005 J012015	ゼミNo.	15					
テーマ	ゲームが与える影響と物語の多様性									
私たちちは幼い頃からゲームと共に育ってきた。私たちとはゲームとは家族や友人とのコミュニケーションの手段とし、その変化に目を輝かせながら成長してきた。そのような私たちにとって、ゲームとは日常的に、当たり前にあるものとしての認識が強い。一方でゲームと共に育ってきた私達とは違い、ゲームというものを受け入れ難い人もいる。ゲームの中には残酷な描写や猟奇的な表現を含むゲーム、一部卑猥な表現のあるゲームもあるからだ。しかし、私たちとはゲームにはそれだけではない、別の一面もあるはずだと幼少期からの経験により感じてきた。										
また、私たちとはゲームだけでなく幼少期から本を通じても様々な物語に触れてきた。物語には「暗黙の了解」というものがある。私たちが慣れ親しんだ童話、児童文学の要所や結末に使われている暗黙の了解が少しづつ腑に落ちなくなり、物語に対する疑問が生まれてきた。そして、そのような物語の疑問をいつか解決したい、当たり前になっている部分に切り口を入れたい、と心のどこかで思っていた。										
そこで私たちちは物語の疑問を解決するために、どのような題材があるか考え、私たちのもう一つの共通点「ゲーム」という題材で卒業制作を行うことにした。										
ゲームの良い点悪い点をあげると、まずゲームの一番の問題として「依存性」が挙げられる。一方で探求心や好奇心を満たしてくれることもゲームの性質の一つとして挙げられる。つまり思考力や判断力を楽しみながら身に附いている。ここまでゲームの危険性や特性について考えてみて、共通点に気が付いた。それは「理解する」ということである。ゲームには良い点悪い点があるが、大切なのはそれを理解し、どのように扱うかである。										
ゲーム制作を通じて、「物語の暗黙の了解」は作者や読み手にとってのハッピーエンドであると考えた。これがあったからこそ、物語が世界中で語られ作られ、様々な人が私たちのように物語に疑問を持ち、様々な形で物語を発展させていったのではないだろうか。つまり「物語の暗黙の了解」それは物語の世界を広げる可能性がある魅力の一つであるというのが、私たちがたどり着いた答えである。										
私たちちは「物語」と「ゲーム」のあるべき姿について考察しながら、迷い、困惑し、悩み、それを乗り越えることを何度も繰り返すことで卒業制作としてのオリジナルゲーム「物語はこれでおしまい。」は完成した。だが、私たち自身の「物語」はさらに続していく。これから先の私たちにとっての「物語(人生における多くの出来事)」について、今回のゲームで型通りではない展開を楽しむことができたように、とらえたい枠にはめて固執するのではなく、様々な可能性を試しながら多面的に向き合っていきたいのである。										
私たちの作品、「物語はこれでおしまい。」が誰かの創造のきっかけになれば、と願っている。										

氏名	川崎麻由	学籍番号	J012010	ゼミNo.	15
テーマ	小さいものの視点				

第1章 はじめに

子どもの頃、女子はドールハウスで、男子はミニカーや鉄道の模型で遊んだ経験があるだろう。大人でも、もう一度集めたいと話す人が多くいる。老若男女問わず、人々がミニチュアの世界に憧れを持つのはなぜなのか。そしていつの時代から、このようなものに关心を持つようになったのだろうか。

第2章 ドールハウスとは

「ドール」は「人形」を意味するが、人々は「小さいもの」を表す言葉だった。ドールハウス自体は、古墳時代や古代エジプト、ギリシャからあったとされる。しかし現代に近い形になったのは、英國ヴィクトリア時代のことだ。その頃でも、貴族階級や大富豪といった、限られた身分の人々のみの持ち物であった。

子どもにもたらす教育的影響として、象徴機能、想像力、コミュニケーション能力、基礎的な動作、美的感覚の5つの発達が挙げられる。また、親しみやすい「かわいさ」と、憧れの存在である「美しさ」の絶妙なバランスを保つ玩具なのだ。

第3章 作品制作を通して

主な材料として、木材を使用した。木材では作れない家具は、綿やフェルトといった実物に近い素材を使い、理想の世界がより再現できるようにした。木の温かみを生かすために、色も暖色系を多く取り入れている。

今回、慣れない加工もたくさん体験した。ものづくりの経験値があれば作業は容易だが、そうでなければ、作る工程も出来上がりのイメージを抱くことすらも困難だ。「自分が思い描いたようにものをつくる」と、口で言うことは容易いだろう。しかし現実に至るには、それまでの個々の生活体験が大きく関わっているのだ。

第4章 まとめ

ドールハウスが認められるのは、「かわいさ」と「美しさ」とを兼ね備えているためだ。今回制作を進めていく中で、だんだん筆者の中にも細部へのこだわりが芽生えていった。「小さいものの視点」に立ち、理想を広げるとともに、幼い頃の自分と大人になった今との両方の見方を取り入れるように努めた。

ドールハウスや模型に限らず、「遊び」はその世界に入り込むことだ。自由で、しがらみから解放してくれる素晴らしい活動である。また子どもには、教育的な発達ももたらす。中でも「小さいもの」は、よりその遊びの世界に溶け込みやすい。だから筆者を含め、人々がその虜になっていくのではないだろうか。

これから筆者は保育者になろうとしている。子どもがどの程度小さなものの世界に夢中になっているのか、筆者も「小さいものの視点」に立って更に理解を深めていきたい。

氏名	窪田 優希	学籍番号	J012016	ゼミNo.	15
テーマ	子どもたちから見る飛び出す絵本とは				
<p>幼い頃筆者は『しらゆきひめ』や『おやゆびひめ』といった2冊の仕掛け絵本に出会った。普通なら平面で終わるはずの絵が立体的に「飛び出した」ことに衝撃を受けた。仕掛け絵本は「読む」というより「見て」楽しむものである。また、3年時に『おしいれのぼうけん』という絵本を劇にし演じる活動を行い、絵本の世界観を身をもって体験した。この体験を通して、筆者が幼い頃抱いていた『奇妙な世の中のイメージ』を思い出した。これらから、筆者が抱くイメージを一から掘り起こし、仕掛け絵本として作品化に取り組むことで、子どもが感じる仕掛け絵本の本当の魅力について考察を試みる。</p> <p>仕掛け絵本の中にはそれぞれ 90・180・360 度に開けるポップアップがあり、筆者は 180 度のポップアップを制作した。これは台紙を 180 度に開ききった時に仕掛けが立体になるもので、カットするタイプやイラストを貼るタイプ、組み立てるタイプがある。仕掛けや物語は様々な文献を参考に、自身が一から手掛けた。幼い頃筆者は“この世に存在する自分以外の人間はみんなおばけ”という奇妙な世の中をイメージしていた。そのイメージを題材に、『おしいれのぼうけん』を参考にしながら物語を作ることにした。仕掛けはページごとにその場面の思いを込めながらあらゆる仕掛けを施した。</p> <p>この制作を通して、筆者の中の『奇妙な世の中のイメージ』を絵本として表現したが、筆者が幼い頃に抱いていたイメージを振り返ることによって、当時は周囲の人々に対して不信感のようなものを抱いていた頃があったのかもしれないと思い至った。様々な経験や人とのかかわりによって、今ではそう感じることはない。これらから、幼少期から感じた思いは大人になってからもずっと大切な経験になるということに気付くことが出来た。また制作過程において、新しい画用紙ばかり使っていると端材が出るが、その量の多さに気付いた。つい湯水のように使ってしまっていることがある。特に子どもはその無駄を「もったいない」とまだ分かっていないため、物の使い方をはじめどんな物でも大切に使うということを、将来保育者として子どもたちに伝えていきたいと考えた。</p> <p>本研究で、自分なりに表現をすることの大切さに気付いた。子どもたちにはあらゆる環境から何かを感じ取る経験をたくさん積み、大人になってからも感じたことを何らかの形で他者に表現出来るような人になってもらいたい。保育者としてその時感じたことを表現出来る機会をたくさん作っていくことで、自ら思いを伝えられる素直な子どもたちを育てていきたい。また、物を作る喜びを伝えることでも子どもたち一人ひとりの思いに向き合いながら良い保育へと繋げていきたい。</p>					

氏名	佐薙 奈々	学籍番号	J012018	ゼミNo.	15
テーマ	「祭り」と人とのつながり ～新居浜太鼓祭りからみえてくるもの～				
<p>筆者の地元の祭りと言えば、新居浜太鼓祭りである。その中でも太鼓台同士の鉢合わせは迫力があり、多くの老若男女がそれを観に行く。</p> <p>地元で行った保育実習Ⅱでは、年齢を問わず子ども達が太鼓の模倣遊びをする姿が多々目にする機会があった。これから筆者は、子どもの頃から好まれる祭りの魅力について注目した。そしてそもそも新居浜太鼓祭りとは何か見直すと共に、子ども達や多くの人にきちんと祭りの魅力を伝えられるようになりたいと考えた。研究方法として、祭りの歴史や太鼓台の意味を調べ、祭りと人との繋がりについて考察していく。また、目で見て太鼓台の魅力を伝え興味を持つてもらう事をねらいとし、フォトコラージュを用いた作品制作も同時に進めた。フォトコラージュとは、写真を組み合わせて一枚の絵にする視覚のトリックを利用した表現方法であり、様々な太鼓台の姿の写真を多く使用するため、それを通して太鼓台の迫力や豪華さなどを視覚的に伝えられることが期待できる。</p> <p>そもそも研究対象としている太鼓台の発祥起源は、はっきりと答えられる資料はないが記録に残された文献によると、江戸時代後期頃の記述に太鼓台に関する内容が確認されている。以前は、神輿に供奉する山車の一種で豊年の秋を感謝して氏神に奉納していたものである。その後、祭りの主役になっている現在の姿になったのは明治時代中期以降と言われている。</p> <p>このような太鼓台は複雑な細部の組み合わせにより構成され、各部位は自然現象や方位象徴的なものから、建築様式、神話、伝説、歌舞伎など親しまれた題材にまで至っている。四神思想や中国に由来する内容もみられる。新居浜でも、古くから中国との文化交流による影響があったと考えることも可能かもしれない。</p> <p>また、保育現場における祭り（年中行事）の意義について、いつもと何も変わらない「日常」のケと年に1度の特別な「祭り」のハレの相互関係があるからこそ子どもの記憶に深く刻まれやすく、新しい経験や体験そして人との出会いが子どもたちの人間関係をより豊かに深めつつ育ちへと繋がっていくのではないかと考察した。このように物心ついた時から身近にある祭りは「なくてはならない存在」となり、特別なものとして記憶や感覚に刻まれていくのだ。</p> <p>この研究を機に筆者は祭りが当たり前にあるものではなく、その発祥から現在に至るまで、時代の流れの影響を受けながら少しづつ形を変えてきた事実と深い意義を知った。保育の現場に立つ時、次世代の子どもたちに「祭り」の意味を伝え、より多くの子どもに興味をもって参加してもらえることができるよう「祭り」のあり方についてさらに考えていきたい。</p>					

氏名	田中 みづき	学籍番号	J012035	ゼミNo.	15
----	--------	------	---------	-------	----

テーマ	私と秘密基地～秘密基地が人々にあたえる力～
-----	-----------------------

I はじめに（研究の動機）

幼い頃から自分だけの世界観を作り出すことが好きだった私は「秘密基地」を作りたいと考えた。公園や神社に遊びに出かけては木にロープや布、段ボールなどあらゆる材料を使い、自分だけの空間を作り出すのが好きだった。そして、このことをきっかけに、このゼミの活動の目的とする、美術においてあらわすこと・つたえることを念頭においた上で秘密基地の制作に取り組むことに決めた。

II 研究方法

木材や廃品を用いて、実際に秘密基地を制作する。その制作過程を通して、ものづくりの本質的な楽しさや「秘密」でつくる秘密基地の魅力を再確認したい。さらに、こうした「かくれ家」のような空間が子どもにとってどのような意味をもつのか。保育所保育指針の「人間関係」「環境」「表現」の該当するところを見ながら、考察してみたい。

III 秘密基地の種類

私は秘密基地について木や紐など日常生活を送る上で身近な材料から作るものだと考えていた。しかし、秘密基地を作るうえでの動機が違えば形、材料、場所なども大きく変化する。景山裕樹（2014）によると、秘密基地は、使い方ひとつでたくさんの多様性があることがわかった。これを踏まえて制作に取り組んだ。

IV 保育現場で「秘密基地」はどのような意味をもつのか。

子どもにとっての秘密基地は「ごっこ遊び」から生まれることが多いのではないだろうか。ごっこ遊びのテーマを決め、その拠点となる場所が子どもたちにとっての「秘密基地」だと考えた。子どもにとっての「秘密」というのは仲間を確認し、共通の意識をもつという証であり、子どもの成長過程において、組織的な遊びを進めていく上で意味をもつことだといえるのではないだろうか。

保育所保育指針「環境」「表現」「人間関係」から子どもが「秘密基地」を制作する上で関係すると考えられる項目をあげて考察した。

V まとめ

今回、「秘密基地」の制作を進めていく中で「安心して落ち着ける場所」「自分を見つめなおせる場所」という二つのことに重点をおいた。様々な作業を通して、仲間や先生の助けがあったことからこの秘密基地を完成することができた。そこには仲間の協力すなわち「協働」があった。完成して思うことは、子どもにとっての「秘密基地」はそのものに子どもながらの「夢」がつまっており、「自分たちだけの特別な場所」＝「秘密基地」といえるのではないかということだ。

氏名	坪内 奈央	学籍番号	J012036	ゼミNo.	15
テーマ	フェルト絵本の世界				
<p>実習に行った際、様々な場面で絵本の読み聞かせが行われていた。子どもたちに読み聞かせを行っていく中で、絵本の世界観に引き込まれ、いつしか自分の手で絵本を作りたいと考えるようになっていた。今回の卒業制作ではフェルトを使って、汎用性のある知育絵本を制作することとした。それが子どもの発達段階にどのような関わりをもつのか作品としての知育絵本を実際に子どもに示し、どのような遊びが展開されるか予測をもとに検証したい。</p> <p>絵本とはその主たる内容が絵で描かれてある書籍のことで、幼児や児童向けのものが多いが、大人が読んでも読み応えのあるものや大人対象の絵本もある。また、絵本には「飛び出す絵本」「かたぬき絵本」「テレビ絵本」「布製絵本」などの種類がある。本研究では布製絵本に着目し、幼児向けのものに限定し制作を行った。また、十分に字が読めない幼児から字が読めるような幼児まで、様々な発達段階の子どもたちにとって有用なものを目指した。</p> <p>制作では、手本とする書籍の型紙を利用し、フェルトを使った知育絵本を作成した。まず、フェルトなどの必要な材料を集め、型紙を利用し部品ごとに切り分けていった。これらを縫い合わせ、最終的に1冊のフェルト絵本を完成させた。このフェルト絵本を1歳7か月の女児に、ページごとの完成時と最終的な完成時の二段階に分け遊んでもらい、反応を観察した。想定内の遊び方とそれに反した遊び方を展開し筆者を驚かせた。</p> <p>今回、卒業制作では、筆者が裁縫などの細かい作業を得意としているため、布製絵本の制作を安易に考えていたところがあったが、作業を進めていくと思った以上に奥が深く、繊細で、集中力の必要なものであることがわかつたと同時に、子どもが遊ぶ姿を思い浮かべながら思いを込めて作りあげることの素晴らしさや楽しさを感じられた制作であった。また、布を使って絵本を作ることで安全性の向上や作品の温かみが増すということを改めて感じることができた半面、すべて手縫いで行っているため耐久性には少し乏しくなるのではないかということを感じた。実際に子どもの手に触れてもらう機会もあり、予想外の遊び方を展開する子どもを見ていると、絵本にはたくさんの可能性が秘められていることを感じられたように思った。</p> <p>これからも自らの手で布製の絵本やおもちゃを制作し、子どもたちに喜びと感動を与えていきたい。ただ単純に子どもと関わるだけでなく、たくさんの引き出しを持った保育者になりたいと考えている。本研究を通して学んだことは今後、保育者として現場に出た際、大いに活かされることとなるだろう。</p>					

氏名	中村 喜絵	学籍番号	J012039	ゼミNo.	15
テーマ	シーサーから見える沖縄				

私は、県外に進学してみて、県外の人にとっては沖縄が『観光地』という存在でしかないということを知り驚いた。京都や奈良には歴史遺産が多くあり、授業の中でもそれについて学ぶ機会も多くあった。しかし、沖縄という土地に関しての歴史や文化について知っている人は非常に少ない。約130年前までは沖縄ではなく、琉球王国という1つの国であり、その時代には、今の沖縄の原点が多くある。そんな沖縄のことについて、県外の人たちに知ってほしいと思う。そのための第一歩として、私自身のシーサーについて知識を深め、伝えていきたいと思い、このテーマを選んだ。

本研究内容は、実際に自分なりに様々な材料でシーサーを作ってみて、様々なシーサーを愛媛の人たちに見てもらいたいとするものである。また、同時にシーサーの歴史や、その存在について調べていき、そこにみられる沖縄の文化についてわかりやすく伝えていきたいと考えた。

まずは、シーサーの歴史から調べていった。シーサーの原点である石獅子から始まり、時代の流れから、屋根獅子が誕生し、最終的に門獅子という近代的な家にあった阿吽の獅子ができた。こうしたシーサーはもともとは中国から来た文化であったが、沖縄人(ウチナーンチュ)にとって1つの洗脳であったのではないだろうか。中国との貿易が盛んであった琉球王国時代には、中国の傘下にあり、決定権はすべて中国の王様が持っていたといつても過言ではなかった。とらえ方によっては、権力の弱い沖縄人にとっては頼れるものが『神頼み』しかなかったのではないだろうか。沖縄では教科の中に「沖縄の歴史」取り入れている高校もあり、そのときに学んだことと照らし合わせてみると、シーサーの歴史1つ調べるだけで多くの沖縄が見えてきたように感じる。

制作では、赤土粘土を使ったシーサーや、絵シーサー、版画のシーサーなど、多くの材料を使い制作を行った。歴史を知った上で1つ1つの作品を観てもらうだけのものではなく、観た上で何か感じてもらえる作品制作にこだわった。その中でも版画のシーサーは1つの作品の中に様々な沖縄が取り込まれており、1目見ただけで「シーサーだ！」とわかるだけでなく、じっくり見ていくと様々な沖縄が見えるようにと制作を進めた作品であるからだ。1つの板にシーサーを描き、1枠1枠に「沖縄といえば」を盛り込んで、彫り進めていったものである。

自然豊かで、独自の文化や歴史を先祖代々大切にしてきた沖縄の良さを、今回の卒業研究や、制作を通して作品の良さを伝えることができているのではないかと感じる。

今回の卒業研究から得た、観光地だけではなく、歴史や文化が多く溢れている魅力的な部分を伝えていきたい。また、シーサーが沖縄の人に愛される存在であり、今回の卒業研究から得た知識を多くの人に配信していきたい。

氏名	有田優紀	学籍番号	J012002	ゼミNo.	16
テーマ	コーチングについて ～コーチングの手法、効果及び日本で注目される背景～				
<p>現在、日本経済を取り巻く行政や就業構造が変化する中で、日本経済の競争力の強化のためには、その源泉である人材が重視されている。企業は若者の採用に当たり、社会人基礎力の中でも、熱意・行動力・協調性といった人間性や人物像を重視している。それに対し、若者は、やりたい職業が見つからないという悩みをもったり、働くことへの目的が明確でない。厚生労働省、若年者雇用関連データによると、卒業3年後の離職率は32.4%となっており、その中でも、卒業1年後の離職率の割合が最も高く、13.4%となっている。また、フリーターの数も、平成15年に217万人に達して以降、5年連続で減少していたが、その後増加した。こうした社会状況の中で、コーチングと呼ばれるコミュニケーションの手法が注目されるようになってきた。</p> <p>第一章では、コーチングの言語と歴史について述べた。コーチングとは、相手の取るべき手段を引き出すコミュニケーションサポートである。「コーチ」が英語のボキャブラリーに登場した当時は「乗馬」という意味だった。米国のスポーツコーチたちは自らの経験を踏まえて、マネジメントにも通じる心構えを抽出した。1992年には、コーチを育成するバーチャル大学、Coach Universityが誕生し、コーチング・スキルの知識を提供するようになった。</p> <p>第二章では、コーチングの種類と関連手法との違いと共通点について述べた。日本で行われているコーチングは大きくパーソナルコーチング、企業向けビジネスコーチングの二種類に分けられており、パーソナルコーチングは「個人」に焦点を当てたものである。企業向けのビジネスコーチングは、人間関係の円滑化や人材育成など組織力を高める目的で行われていることがわかった。</p> <p>第三章では、コーチングの効果について述べた。日本では近年、コーチングによってもたらされる利益が大きいことを、企業・組織が実感し始めている。そのことから単発の一時的な導入ではなく、継続的にコーチングを導入する企業が増えてきている。導入した企業では、コーチングにより現場感のある具体的な解決策が得られるケースがあることがわかった。</p> <p>第四章では、コーチングが必要な背景について述べた。コーチングが必要な背景には、日本の社会が変化したことにより、一人ひとりの主体的に考える力が重視される社会へと変わったことにある。それは、縦型社会から横型社会へと変化したことでもある。従来の研修や考え方では会社の求めている成績・ノルマが達成できなくなってきたことがあると分かった。また、身近な人間関係のコミュニケーションでも年齢間のギャップがある。それは、高度な消費社会やインターネットの普及により価値観が多様化したことが背景にあると言える。</p>					

氏名	坂上 薫	学籍番号	P012009	ゼミNo.	16
----	------	------	---------	-------	----

テーマ	分かち合う心を持った交換する人間
-----	------------------

「ありがとう」と伝えること。一日どのくらい、声に出して言っているだろう。私たちは毎日の生活のなかで、相手と言葉を通して会話をしたり、親しい人に何かを贈ったり、贈られたりして、人とかかわりながら生活している。

しかし、近年では、孤独死が社会問題となるなど、人間関係の希薄さが問題視されている。また、地域社会にも変化があり、昔のように地域での人々のつながりがなくなり、地域で助け合い、かかわりあうことが減ってきている。その背景には、技術の進歩によって、便利な世の中になった一方で、個人主義や自己責任の考え方方が社会に広まり、人に頼らない社会(頼れない社会)になってしまったことが挙げられる。分かち合うことや、助け合うことの大切さを改めて認識する必要がある。

本論文では、人間の交換という行為について考察した。

第1章では、動物は贈り物はするが、人間のように物と物を交換しないことについて論じた。ボノボに関しても、性の交換はするが食料などの物の交換はしないといわれている。

第2章では、女性の交換について焦点をあてて述べた。女性の交換が行われることによって、結婚の制度ができ、さらには、家族集団が形成された。

第3章では、産業化される以前の社会の共同体で行われていた、互酬、再配分、分配の特徴を述べた。また、市場交換が始まったことにより、それまでの交換とは違って共同体に縛られず、自由な交換を実現することができたことを論じた。

最後に第4章では、貨幣がもたらした社会への影響について論じた。貨幣ができることにより、それまでの自給自足の生活が崩れ、分業が成立していった。様々な専門的な職業ができたことで、都市が誕生し、発展していった。

その一方で、コインが一般的に使われるようになると、人を信頼することから、お金を信頼する社会へと変わってしまった。

産業化される以前の社会では、人と人との密にかかわりを持っていて、強固な人間関係を築いていた。家族の形も、昔と比べて核家族が増えてきているのだからしかたないのかもしれない。しかし、2011年3月11日に起きた東日本大震災は、地域でのつながりや人とのつながりをもう一度考え直すきっかけになったように思う。人間関係が薄れてきたとはいえ、人間は分かち合う心を持っている。人間は交換をする動物である。相手のことを想うことができ、記念日やイベントがあれば、相手のことを考えながら贈り物を贈る。その繰り返しで、交換の本来の目的である、相手とのコミュニケーションや信頼関係の絆が深まるのである。贈り物がつなげてくれる人と人。今一度、プレゼントを持って「ありがとう」と伝えたいものである。

氏名	王ろ	学籍番号	P012505	ゼミNo.	16
テーマ	消費社会における広告 ～インターネット広告を中心に～				
<p>社会環境の変化と新しい技術の発展にともない、広告もその表現手法や媒体を変化させてきた。広告はメディアとして我々の消費意識さらには生活意識に影響を与えてきた。1994年にアメリカでウェブマガジンの先駆けである『ホットワイアード』が創刊された際に14社分のバナー広告が掲載された。これを機にインターネット広告がひろがっていった。インターネット広告により大幅な売上増を実現した事例が次々に登場した。特に広告費が潤沢でない小さな会社の成功事例が多く見られ、人々が注目するようになった。インターネット広告は急速に成長をしてきたが、まだまだ多くの課題も抱えている。インターネット広告をよりよく理解するために、インターネット広告の特徴と現状を研究する必要がある。</p> <p>本論文では、まず、広告の歴史を概観し、広告が生まれた背景、発展状況などを明らかにした。また、インターネット広告に焦点を当て、インターネット広告の現状と課題を考察した。</p> <p>第一章では広告の発展過程について論じた。近代広告の出現とそれが現代広告に発展した背景を考察した。その背景には広告代理業の出現、新しい技術の応用、広告が一つの学問になったことがあげられる。また、戦後の日本における現代広告と社会環境の関係についても考察した。</p> <p>第二章ではインターネット広告と消費社会について論じた。インターネットがもたらす情報行動の変化、特に広告媒体としてのインターネットの歴史と特徴を考察した。また、インターネット広告の利点や問題点などを調べた。利点には、インターネットはインタラクティブなメディアであることや、高度なターゲティングがされることなどがあげられた。問題点には、情報の信頼性や公正さの問題、個人情報の保護の問題などがあげられた。最後に、インターネット広告のこれから発展について考察した。</p> <p>現代広告と社会はお互いに強く影響しあっている。社会、経済、文化などの変化は広告に如実に表れる。一方、広告自体も社会の様々な側面に影響を与えてきた。経営販売を促進する手段とみなされる広告は経済的に機能するだけでなく、コミュニケーション・メディアとして人々に働きかけ、我々の消費意志や生活意識に影響を与えてきたことにも注目する必要がある。インターネットの普及に伴い、インタラクティブで高度なターゲティングができるインターネット広告はますます身近なものになってきた。情報の信頼性や個人情報保護においてまだ様々な課題も残るが、能動的に情報を得られるインターネット広告はこれからもより発展していくであろう。</p>					

氏名	焦 安然	学籍番号	P012506	ゼミNo.	16					
テーマ	日本と中国の社会保障制度の比較研究									
社会保障制度とは、国家が国民の生活を保障する制度である。社会保障という用語の由来は、1933年アメリカで経済保障あるいは所得保障にかわるものとして造語されたもので、1935年社会保障法として初めて公用語として使用された。										
日本では社会保障制度が長い年月をかけて整えられてきた。一方、中国ではまだ社会保障制度が十分に整備されていない。日本の社会保障制度はこれから中国が社会保障制度をさらに整備していく上で、大変参考になるものと思われる。										
本論文では、日本と中国の社会保障制度の発展過程を述べ、それぞれの社会保障制度を比較検討した。										
第一章では、日本の社会保障制度の成立期、発展期、改善期の三つの段階と「社会保険」、「公的扶助」、「社会福祉」、「公衆衛生」の4つの分野を述べた。また、「規模」「内容」「財源」の三点から整理し、日本の社会保障の特徴を考察した。										
第二章では、中国の社会保障制度の成立期、調整期、停滞期、再建期、改善期について論じた。1990年代後半の制度改革により、中国の現行社会保障制度は、社会保険、社会救済、社会福祉、住宅補助、軍人福祉などによって構成されるようになった。また、「都市と農村の二元化」、「制度の国家的な統一と地方ごとの具体策の決定権」、「セーフティ・ネット機能の拡大」、「社会保障の適用対象の拡大」の四つの特徴を論じた。										
第三章では、日本と中国の社会保障制度を比較検討した。社会保障制度の発展過程、法整備、社会保障制度のカバーする範囲、制度の実施主体の明確化、高齢者の介護サービスの質において大きな違いが見られた。										
今後、中国が取り組まなければならない課題として、①法律を整備すること、②社会保障制度がカバーする範囲を拡大すること、③高齢化対策を優先すること、④制度実施主体の責任を明確にすることなどが挙げられる。今後これらの研究成果を活かして、日中の社会保障制度に関して、さらに研究を深くめていきたいと考える。										

氏名	宋丹	学籍番号	P012507	ゼミNo.	16					
テーマ	日本語のオノマトペ及びその学習方法についての研究 —中国人学習者を対象に—									
日本語を学ぶ中国人は基本的な文字、語彙、文法を理解している場合でも、日本人と会話するとき、意味がわからないことがしばしばある。その理由は、日本人が日常生活の中でよくオノマトペを使うからである。										
日本語のオノマトペは種類が極めて豊富である上に、話し方も複雑である。オノマトペは感覚的な言葉であり、世界各国の言語にも日本語のオノマトペに対応する言葉が少ないため、第二言語学習者にとって、最初は「まごまご」、そして、「いらいら」してしまうのである。										
本論文では、先行研究を踏まえて、日本語におけるオノマトペの定義、形態、特徴について説明し、中国語を母語とする日本語学習者の視点から、日本語オノマトペの効果的な学習法について考察した。										
第一章では日本語におけるオノマトペの定義や形態を明らかにした。まず、オノマトペという語の語源、また、オノマトペがどう定義されているのかを説明した。続いて、金田一や田守による先行研究を概観した。										
第二章では、オノマトペの特徴を説明するために、意味と音との間の合理性や統語的特徴について論じた。まず、意味と音との間の合理性について、金田一（1978）は、オノマトペでは、必然とは言えないまでも、音と意味との間にある程度合理的な結びつきがあると指摘した。また、オノマトペの統語的特徴を考察した。田守（1999）によると、日本語オノマトペの多くは様態副詞として機能している。一方、二拍反復形及び二拍の語根に促音ないし撥音を含み、「り」語尾を持つオノマトペは、結果副詞、程度副詞及び頻度副詞として用いられる傾向がある。動詞として用いられる場合、「—する」という動詞に組み入れられて派生動詞化したものが多く見られる。名詞用法を持つオノマトペは主に幼児語であり、「ぼろい」「とげとげしい」のように、オノマトペの要素から変化したものは形容詞あるいは形容動詞の形になる。										
第三章では、中国人学習者にとってのオノマトペの効果的な学習法について考察した。まず、中国人学習者がオノマトペを難しいと思う理由を明らかにした。日本語のオノマトペは多義的で、また、中国では擬態語という概念が存在しないからだということが分かった。次に、現在中国で最も使われている教科書の中でオノマトペが取り上げられている比率の分析をした。その結果、中国の日本語教材において、オノマトペが十分に取り上げられていないことが分かった。続いて、オノマトペの学習における問題点を整理したうえで、その効果的な学習方法を提案してみた。学習者が早い段階からオノマトペに気づき、オノマトペの体系性を意識し、統語の視点から学習することの重要性を指摘した。										

氏名	楊媛	学籍番号	P012508	ゼミNo.	16					
テーマ	日本の集団主義に関する研究									
<p>日本人はいつも何人かで行動し、チームワークを重視し、互いに協力しあい、団結するとよく指摘されてきた。いわゆる、「集団主義」である。中国の場合は、自分の考えで一人で行動することが多い。集団主義は日本人の国民性を研究する時の重要なテーマの一つである。これまで、社会学や人類学の視点からの研究がたくさん蓄積されてきた。日本人の集団主義に関する議論を深く理解し、今後それを批判的に考察していくために、これまでの集団主義に関する考察をまとめておく必要がある。</p>										
<p>本論文では、日本の集団主義の定義、日本における集団主義の形成の原因やその特色についての議論を考察した。第一章では、これまでの研究者による日本の集団主義の定義を詳しく紹介した。研究者は集団一体の観点を主張する。つまり、個人と集団の関係は対立的ではなく、一体として融合していると考える。日本人が外に向かって（他人に対して）自分を社会的に位置付ける場合、好んでするのは、資格よりも場を優先することであるということも指摘されてきた。</p>										
<p>第二章では、日本における集団主義の形成の歴史的原因、地理的原因、文化的原因、社会的原因について論じた。まず、日本における集団主義の形成の歴史的原因は稻作の生産方式であると考えられてきた。また、島国で外界から離れていることは日本の集団意識の形成に大きな影響を与えたとしばしば指摘されてきた。さらに、恥の文化、儒教思想、地震などの自然災害に対する危機意識も日本の集団意識の形成に大きな影響を与えてきたと言われている。最後に、日本の伝統社会の家族制度（家構造の特徴）が日本の集団意識の形成に大きな影響を与えたとする説もある。</p>										
<p>第三章では、日本の集団構造の特色を考察した。集団の内部構造から言えば、「タテ」集団は底辺のない三角関係である。「ヨコ」集団への入団条件はルールであるのに対して、「タテ」集団への入団条件は個人関係である。「タテ」集団の一番大きな短所はリーダーが一人に限られ、交替が困難ということである。そして、「タテ」集団の中では、のつとりと分裂もよく起こる。それらの短所にも関わらず、日本の集団主義は日本の近代化の達成に大きな役割を果たしてきたとも言われている。</p>										
<p>日本は戦後わずか2、30年の間に、世界第2位の経済大国になった。日本人の集団主義の精神が日本の経済発展に大きな役割を果たしたと思われる。</p>										
<p>一方、日本の集団主義が中国や朝鮮への侵略戦争を招いたとも言える。第二次世界大戦の時代、集団主義は日本人の重要な価値観の一つであった。日本人の「集団主義体質」は社会や組織の「無責任体質」に結びつく場合があるとも指摘されている。</p>										
<p>社会が複雑化し、価値観が多様になっている現在、一概に集団主義が日本人の行動様式の特徴であるとは言えなくなつた。集団主義的な価値観が現在の日本の社会でどのように変化してきているのか、今後見守っていきたい。</p>										

氏名	楊 瞳	学籍番号	P 012509	ゼミ No.	16
テーマ	中国の地域間の労働移動				

はじめに

中国では、多数の農村労働者が、農村を離れて、都市に出稼ぎに出て、農業以外の仕事に従事している。労働力は一般的に賃金の高い職を求めて移動する。移動方向は内陸部から沿海部の方向というように、経済の発展が遅れた地域から進んだ地域に移動する。中国の国土は大きく、経済発展の状況が他の国より複雑である。労働力の移動規模も大きく複雑である。そのため、2000 年代には労働力の余剰と不足の問題が深刻になった。経済成長を続けている中国の地域間の労働力移動の現状を把握することの意義は大きい。

本論文では中国の労働移動について考察した。

第 1 章では民国期と計画経済期の状況について論じた。中華民国期の労働移動の主な理由には、就業不足、婚姻、食料不足などがあげられる。1949 年からの計画経済期の労働移動は政府の戸籍制度や文化大革命の政策に大きく左右されていた。そのために、個人の自由意識による労働移動はあまり見られなかった。

第 2 章では、中国の改革開放後の変化とルイスモデルを述べた。改革開放後の労働移動は一般的に第 1 次産業部門から第 2・3 次産業への移動であった。この時期、中国の経済学者たちはルイスモデルを適用して、中国の経済発展状況を分析しようとした。

第 3 章では、中国における労働移動の現状について論じた。現在の中国の労働市場には地域間格差、失業問題などの問題がある。中国の労働移動の要因として、①就業機会の地域格差、②移動コスト、③都市と農村の所得格差、④政府の政策、⑤第 1 次産業部門から第 2・3 次産業部門への労働移動の状況の 5 つがあげられる。

今後、これらの要因に関するデータを収集し、トダロモデルを用いて、中国の労働移動の現状を分析しようと考えている

氏名	藤田 紗織	学籍番号	J012048	ゼミNo.	17					
テーマ	コミュニケーションの在り方を考える ～現代の子どもと若者に視点をあてる～									
はじめに										
人はひとりでは生きていくことはできない。多くの人と交わりながら生きていく。しかし今、コミュニケーションの在り方が大きく変わっている。社会環境の変化の中で、子どもは他者とどのようにコミュニケーションをはかっているのだろうか。また、ネット社会では、人間関係はどのように変容しているのだろうか。現代の子どもと若者に視点をあて、コミュニケーションの在り方を考察した。										
<p>第1章 ことばの歴史とコミュニケーションの変容</p> <p>ダーウィンやオングの文献を手掛かりにことばの歴史を考察した。音声言語の時代は、話し手と聞き手が一緒に・共にという感覚が生じた時に、コミュニケーションが成立した。文字の時代は、読み手のことを考えながら、いろいろと悩むことで心の中のコミュニケーションが成立した。ところが、メディア社会では、相手のことを考えなくても自分の都合でコミュニケーションが成立したと思い込んでしまっている。人間の発達の基本的な姿は、子どもが人との関わりを通して自分の世界をつくりあげていく点にかかってくるのである。</p>										
<p>第2章 ネットにおけるコミュニケーションの問題</p> <p>幼児生活時間調査などのデータと正高や藤川・ウォレスの文献を手掛かりに、不必要な情報を切り捨てるというネットコミュニケーションの特徴について論じた。また、乳幼児期から、人と言葉を交わさずに時間のコントロールをしない生活を続けている子どもが増えている。ネット社会では、ナマの言葉や態度で自分を表現できること、親子や兄弟の会話が激減し、地域社会で言葉を交わすことが少ないと、表面的な人間関係しか結べないこと、音声言語を使う機会が減り、言葉の力が弱くなつたことが問題となっている。</p>										
<p>第3章 生きていくために必要な力と課題</p> <p>教育実習でのお遊戯会などの事例研究から、価値観の多様性を認め、子どもが人として成長していくコミュニケーションの在り方を考察した。園内での人との出会いには喜びや楽しみだけではなく、悲しさや苦しみもあるが、その中に人としての成長がたくさん詰まっている。我慢強く接することで、社会のなかで生きる術を身に付けることができるのである。</p>										
おわりに										
今日のコミュニケーション環境において重要なことは、目先の安心だけを求めて、自分の居場所を外部から閉ざすことではなく、むしろ異質な世界へ向けて開放していくことである。そしてまた、コミュニケーションがヒトの「発達の場」としてとらえていくことも忘れてはならない。自分のさまざまな感情や情動をきちんと見つめ、認め、コントロールできる力を培っていくには、幼い頃からの他人との深い交流経験を持つことが重要なのである。大人は、その心の基礎を培うために、子どもの声に耳をすまして、じっくりと成長していくのを見守り、信じて待つ姿勢を持つことが大切である。										

氏名	堀川 奈々	学籍番号	J012049	ゼミNo.	17
テーマ	ひとり親家庭について ～父子家庭に目線を向けて～				
<p>現在、ひとり親家庭が増加している。ひとり親と言っても注目されているのは母子家庭の支援ばかりであることが多い。そのため、ここでは父子家庭の大変さや父親の育児について詳しく考察していく。私はこれから、保育士になるにあたって専門の知識を持ち子どもや両親と関わっていく必要がある。ここでの考察の成果を、子供の目線と両親の目線で考え、対策を行っていく参考としたい。</p> <p>第1章では、ひとり親世帯の状況について考察していく。平成10年から現在までひとり親世帯が増加している。その主な原因是、離婚の増加であり、離婚件数は昭和22年から昭和50年にかけて平成2年から平成17年まで増加し続けている。離婚率が高くなりひとり親が増加していく。また、三世代世帯が減少し、核家族が増加している。子どもを育てるうえで子育てを一緒にしてくれる人がいつも身近にいない家族が増えたということが分かる。さらに、子どもへの影響をみると、学校の成績や子どもとのコミュニケーションとの関わりに多く関係していることが分かる。</p> <p>第2章第1節では、春日（2013）などに基づいて、父子家庭が直面する問題を具体的に考察した。父子家庭が育児について直面している問題は、大きく分けて3つあると考えた。命を支える、子どもとの関係づくり、経済的問題である。父子家庭の父親は子どもが家で待っているため残業をせずに帰ることは難しい。子育てをしながら仕事をすることは出来ないと会社から言われ仕事を取るか育児を取るかの選択せられているのが現状である。</p> <p>第2節では、父子家庭の困難の背景にあるものを考察した。それは4つある。社会通念、世間から見た父子家庭の印象、父親自身の中にあるもの、男の面子と親子関係である。そして、これらに共通しているものが性差信仰である。</p> <p>性差信仰とは女性は育児男性は仕事等など性別で出来ることと出来ないことがあると判断してしまうことである。そのため、母親にしか育児ができないと勝手に判断てしまっている。社会は母親だけに目線を向けており様々な支援をしてきたが、父親にはあまり目線を向けてこなかったことが父子家庭への支援が少ないと想定される。父子家庭を支援するためにはまず性差信仰の考えを変えなければならない。</p> <p>母親だけが育児をするのではなく父親も母親のように仕事をしながら子どもを育てる意識と子どもと遊ぶ時間を作ることが必要である。また、男性にも育児の意識を高く持って欲しいと願う。これから子どもを育てる上で母親が育児、父親が仕事という考え方をなくしひとり親ということも関係なく両親がお互いに助け合い、家族を作っていくべきである。</p>					

氏名	柴原真帆	学籍番号	P012011	ゼミNo.	17
----	------	------	---------	-------	----

テーマ 女子大学生の身体観について～痩せ志向に焦点を当てて～

現在、日本の若者の中で痩せ志向が問題視されている。そこで、痩せ志向は本当にあるのか、その背景に何があるのかという問題をとりあげ考察を行った。その方法として、松山市の女子大学生を対象にアンケート調査を行った。その調査においては痩せ志向以外にも、SNSの利用状況や人生観についての質問も行い、痩せ志向との関連を考察した。

第1章では、現代の若い女性の痩せ志向、BMI、痩せ過ぎによって起こりうる病気について述べた。痩せすぎている女性は母体となったときに、十分な栄養を保持していないのでお腹の中の子どもにも悪影響を与えてしまい、発達に支障がでることがある。最近では「美容体重」と呼ばれている計算の仕方(見た目がスリムで健康を害さない程度の目安値のこと)もある。しかし、日本肥満学会では、最も病気になりにくく、長生きできる体重は、BMIが22のときだと発表しているため、無理なダイエットはよくない。BMIが25を超えると脂質異常症や糖尿病、高血圧などの生活習慣病のリスクが2倍以上になり、30を超えると高度な肥満としてより積極的な減量治療が必要になるので、BMI22を目安に目指し、体作りをすることが望ましい。

第2章では、松山市の女子大学生に焦点を当て、体型やダイエットなど身体観に関する事、外見にかかるコスト、SNSについて述べた。同性からの目しかしない女子大の女子学生100人と、異性の目がある共学大の女子学生100人の間で何らかの違いがあるのではないかという仮説をたて、この両グループをアンケート調査により比較した。その結果、アンケート調査の対象者の約7割がBMI22以下であり、その中の2割の女子大学生がBMI18.5未満の痩せ過ぎであるにも関わらず、痩せたいと答えた女子大学生が7割もいた。既に痩せているのにさらに痩せたいという願望があるということである。したがって、女子大学生の中の痩せ志向は確かにあるということがわかった。ただし、女子大と共学の学生間ではそれほど大きな差は出なかつた。

第3章では、男女の身体観の差、メディアによる社会通念、アンケート調査のクロス集計によって見つけた痩せの要因について述べた。男女が考える望ましい体型の基準には差がある。男性の基準の方が厳しく、普通体型、むしろ痩せ体型の女性のことを「ばっちやり」と判断しているのだ。このような男性の考え方も若い女性の痩せに繋がると考える。また、メディアも大きく影響している。アンケートの中で憧れている芸能人を聞いたところ、痩せたタレントが多く登場した。テレビや雑誌ではスリムな体型の女性が多く登場し、もてはやされていることから、痩せている方が美しいという価値観を作り上げてしまっているのである。実際の体重と自己評価のずれがうまれ、痩せる必要のない体型の女性までもが自分の体型を太っていると考え、もっと細い体型を理想としているのだ。

氏名	高取 亜衣子	学籍番号	P012013	ゼミNo.	17
テーマ	人間とペット動物の共存				
<p>近年は空前のペットブームと言われ、多くの家庭でペットが飼われるようになってきた。昔は家畜として飼われていた動物なども現在は愛玩動物として飼われ始めている。ペットブームに伴い、ペットを家族同様に位置付け、人間とより密接な関係を持っている動物が増加しており、その動物をコンパニオンアニマルと呼ぶ。</p> <p>第一章では、ペットの普及と近年密接になってきている人間とペットの関係について述べる。2014年に発表された全国犬猫飼育実態調査（一般社団法人、ペットフード協会調べ）の結果によると、日本で飼育されている犬の数は1034万6000頭、猫が995万9000頭にのぼる。愛玩動物だけでなく、近年、補助動物も増加している。補助犬の数は年々増えており、特に介助犬と聴導犬の数が大きく増えている。また、近年ではペットを家族同然の存在として扱う人が増えており、ペットを飼うことで人間の心情の変化がみられたり、夫婦間の関係がよくなっていると感じたりしている人が多いことがわかった。その傾向に伴い、家族同然のペットを失ったときの喪失感からペットロス症候群に陥る飼い主や、人間と同じようにペットの埋葬を行う飼い主も増えている。</p> <p>第二章では、動物と人間の関係が親密になるに伴い起こっている様々な問題について述べた。飼い主の管理の問題で起こる動物虐待や殺処分は、年々減少傾向にあるが未だに解決できていない問題である。さらに、動物実験、動物園の問題について触れた。</p> <p>第三章では、第二章で述べた問題を改善するために作られた法律や考え方について述べた。1960年代のイギリスで、家畜の劣悪な飼育管理を改善させ、家畜の福祉を確保させるために、その基本として「5つの自由」が定められた。また、動物の福祉には、ラッセルとバーチが1959年の著書でまとめた「3つのR」の考え方がある。これは動物実験のあり方を見直そうとできあがったものである。また、日本では、1902年、西洋の動物愛護運動に接した日本人が動物愛護団体を立ち上げ、動物虐待防止会を作った。さらに1973年には日本で最初のまとめた動物立法である「動物の保護及び管理に関する法律」が制定された。</p> <p>終章では、ペットの普及、問題、運動や考え方を踏まえて人間とペット動物がよりよく生きていくためにはどのようにしたらしいのかを述べた。ペット先進国といわれるドイツなどでは犬税が存在する。日本も犬税を取り入れることで飼い主の責任意識が強くなり、殺処分や飼育放棄も減少していくのではないだろうか。</p>					

氏名	徳田 早紀	学籍番号	P012016	ゼミNo.	17
テーマ	『魅力あるまちづくりを目指して』 新居浜市をモデルにして考える				
<p>高校時代に若者中心の地元活性化ボランティア団体に所属し、活動を通して地域の人と関わる中で生まれ育ったまちである新居浜市について考えるようになった。そして近年、テレビで地方消滅や地方活性化についての特集を目にすることが多く、新居浜市をより魅力あるまちにするために研究しようと考えた。</p> <p>まず第1章では、地方消滅や消滅都市問題についての概要や原因を述べた。日本創成会議は、2014（平成26）年5月に「少子化と人口減少が止まらず現在の自治体の機能が維持できなくなり財政破綻に陥り地域の存続が危ぶまれる事態となる消滅可能性都市が2040（平成52）年には896市区町村も存在するようになる」と発表した。地方消滅や消滅都市問題の原因については、少子化・人口減少以外に若年女性の人口減少・東京一極集中が深く関わっていることが判明した。</p> <p>次に第2章では、新居浜市の概要について述べた。新居浜市の人口は、総数121,735人で全世帯数は50,377世帯（平成22年）である。合併を背景に人口が増加した結果、四国内では第6位、愛媛県内では第3位という順位を維持している。しかし、1981（昭和56）年を境に減り続け現在では毎年自然減少・社会減少の状況が続いている。日本創成会議は、若年女性人口変化率について人口移動が終わらない場合-41.0%となると述べている。それを受け新居浜市は、2015（平成27）年に新居浜市人口ビジョン（案）を発表し現状と将来予測を公表した。</p> <p>第3章では、新居浜市における地域活性化の取り組みについてその担い手を行政、地元企業や商店、市民や団体に3分類し、目的や活性化の影響を述べた。行政では、あかがねミュージアムや駅前整備など人が集い学ぶ場所の充実が実現している。新居浜市は、行政以上に市民や団体の力が強く活性化運動が活発であるという点が特徴である。市民の活動の例を挙げると新居浜アメニティ倶楽部（新居浜をお手玉の里にした）や新居浜ゆるキャラ制作委員会（ゆるキャラの制作・全国発信）などがある。また、高校生のボランティアグループも活動しており若者の地元への思いが強い。</p> <p>これまでの章を受けて終章ではまとめをし、地域活性化について考察し、最後に活性化案を述べた。地域活性化とは、若者たちが自分のまちを誇れるような場所を作らなければ意味がない。そのためには、若者が若者自身でまちをつくりあげる（課題を見つけ他者様々人の力を借り、課題解決に尽力する）ことが大切であり求められる。まずは、自分の住んでいるまちに興味を持ち、他者と情報を共有して取り入れ、若者の声を行政に発信し、まちづくりについて考える機会を増やすことが必要であると考えた。新居浜市の課題としては、市民の活動の認知度の低さであると考えた。あかがねミュージアムなどでの広報活動に力を入れる必要がある。</p>					

人 文 科 学 部
国 際 文 化 学 科

氏名	秋元 りか	学籍番号	Y009003	ゼミNo.	7					
テーマ	電子マネーについて									
1. 研究の動機										
自分の財布の中に入っているものを調べると、現金以外に各種のカード類、身分証明やポイントカードなどがある。近頃では電子マネーの普及に著しい。電子マネーとはどのようなものか、手軽で身近にありながら私たちとはどのような関係性なのか、どのような影響を与えていているのか、を調べたいと思った。										
2. 研究方法										
今回の論文では、電子マネーとは何か、コンビニの電子マネー戦略、電子マネーの発行状況や使用状況などをWeb資料から調べ、考察を加えた。										
3. 結論										
電子マネーのメリットは、簡単な決済で済む利便性の高さにある。クレジットカードのような複雑な手続き、認証方式が必要ではなく、現金ではないため、持ち運びなどに便利である。逆にデメリットとして、仮想マネーでもあるために使用感覚があまりない。ポストペイドであれば、限度額もなく高額な請求書が送られてくる可能性がある。そして現金を電子マネー化すると、基本的には現金化が不可能である。さらに、電子マネーは複雑な技術であるため複製が難しい。しかし、盗み出す技術はいずれ確立されると思われる。										
電子マネーを貯蓄のように利用することも可能である。交通系電子マネーではポイントを貯めることはできないが、企業から出ている電子マネーは利用するたびポイントが付く。また、一定のポイントが貯まれば、商品に交換できる場合もあり、アンケートなどに答えてポイントが貯まるサイト等を利用すれば、電子マネーのポイントと合算し、同時に現金化できるサービスもある。										
まだまだ改善の余地があるとはいえ、電子マネーの可能性は大きく期待できると思われる。今後の展開に期待したい										
4. 参考文献										
<ul style="list-style-type: none"> ・電子マネーとポイントカードのスイッチングコスト分析 (<特集>デジタル・エコノミー)、2015.12.10、http://ci.nii.ac.jp/naid/110007504187。 ・日経 MJ 次の時代を読み解く NEXT keyword 手軽！便利！お得！電子マネー、2015.12.1、http://adnet.nikkei.co.jp/e/img/insertedEventImage.asp?e=01579&disptype=1&eventitemid=0026&imageid=00001 ・楽天 Edy、2015.12.25、http://edy.rakuten.co.jp/。 ・電子マネー比較.com、2015.12.25、http://kuchikomi0.com/。 ・セブン・イレブン、2015.12.25、http://www.sej.co.jp/。 ・Ponta - Wikipedia、2015.12.25、https://ja.wikipedia.org/wiki/Ponta。 										

松山東雲女子大学 人文科学部 卒業研究抄録集

発 行 2016年1月

編 集 松山東雲女子大学 人文科学部
〒790-8531

愛媛県松山市桑原3丁目2番1号

TEL (089) 931-6211

印 刷 明星印刷工業株式会社
〒790-0056

愛媛県松山市土居田町500番地

TEL (089) 971-7111